

第Ⅱ部 2010-2011年度における各研究室等の活動

01 言語学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

言語学は、世界の言語を実証的かつ理論的に研究する学問である。本研究室では、特定の理論・言語に偏ることなく、過去の文献資料も含めた世界の多種多様な言語を自分の手で調査・研究し、その一次資料から一般化を図るという基本姿勢を貫いている。

言語を教科書から学ぶのと、自分で未知の言語を調査し分析するのは全く別のことである。後者の方法を身につけるには、学部段階から教育・訓練が不可欠である。当専修課程は、言語学の基礎的な考え方を学ぶだけでなく、音声学を修得し、言語の調査・分析を行なう能力も身につけることのできる国内でも数少ない課程の一つである。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2011年度末現在の教員数は、教授2名、准教授2名、助教1名である。この他、学部・大学院の共通講義として毎年異なる非常勤講師を他大学から迎えている。加えて大学院教育では、韓国朝鮮文化研究室、中国語中国文学研究室の教員をはじめ、本学の日本語教育センター、および情報理工学系研究科（音響音声学）の教員による講義も開講している。

教養学部からの言語学専修課程への進学者数は最近では10名前後で、大学院修士課程へは、本専修課程卒業者のほか、他大学出身者や外国人留学生も入学している。博士課程はそのうちの約半数が進学するが、外部にも門戸を開いている。博士課程大学院生の間では博士論文を書く態勢が定着してきている。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

教員と大学院生の研究発表の場として、1979年以降『言語学論集』を毎年刊行している。最も関係の深い学会は日本言語学会であり、教員全員が常任委員会、評議員会、編集委員会のいずれかの委員を務めている。学会大会では、博士課程の大学院生が大会で活発に研究発表をしている。その他、研究テーマによっては日本語学会や日本音声学会で発表することもある。

また、1998年度以来、京都大学の言語学研究室と交流演習を実施して成果をあげている。院生が每期1人ずつ相手校で発表をし、教員・院生の批判を受けるというものである。

当研究室では、1998年以來、ホームページを立ち上げ、これらの研究室活動の情報を日本語と英語で広く提供している。そのURLは次のとおり：<http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/indexj.html> ここでは、『東京大学言語学論集』の目次と要旨も見ることができる。

(4) 国際交流の状況

本研究室は外国人留学生が多く、アメリカ、インドネシア、韓国、中国、フィンランド、マレーシアなどの学生が日本語や自分の母語の研究を進めている。日本人学生にとっても良い刺激となっている。

逆に、日本人の大学院生が、現地調査ないし留学のために長期に渡って海外に出ているケースも少なくない。研究室としてもこれを積極的に勧めている。

また、外国人研究員も随時迎え入れている。さらに、科学研究費などで海外の研究者を招待した時には、院生・学生に向けての講演会も開催している。

2011年から発足した香港中文大学との部局間交流協定においては、担当研究室として交流事業に貢献している。この交流協定の枠組みで、2011年5月22日に“Sign Language Research in Asia”を開催し、150名を超える参加者があった。また、同時に締結された学生交流の覚え書きに従い、2012年に大学院生1名が1学期間香港中文大学に留学した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 熊本 裕 (教授) : イラン語学 1989年4月～現在
林 徹 (教授) : チュルク語学 1997年4月～現在
西村 義樹 (准教授) : 認知言語学 2004年4月～現在
小林 正人 (准教授) : 歴史言語学 2010年4月～現在
梅谷 博之 (助教) : モンゴル語 2008年4月～2011年3月
永澤 濟 (助教) : 日本語史 2011年4月～現在

(2) 助教の活動

梅谷 博之 (うめたに ひろゆき)

在職期間：2008年4月～2011年3月

研究領域：記述言語学、モンゴル語（ハルハ方言）

学会発表：「モンゴル語の「後置詞」の特徴」日本言語学会第141回大会、東北大学、2010年11月27日。

「モンゴル語の preverb」六科研合同研究会：アジア言語の研究－最新の報告－、京都大学ユー
ラシア文化研究センター、2011年2月19日。

フィールドワーク：

2010年8月：モンゴル国ウランバートルで言語調査

永澤 済 (ながさわ いつき)

在職期間：2011年4月～現在

研究領域：日本語史

論文：「複合語からみる「自分」の意味変化—なぜ「自分用事」「自分家」「自分髪」という言い方ができたか—」、『東京大学言語学論集』、第29号（上野善道先生退職記念号）、pp.195-220、2010.3

「変化パターンからみる近現代漢語の品詞用法」、『東京大学言語学論集』、第30号、pp.115-168、
2010.9

「文法的機能からみた漢語」、『国文学解釈と鑑賞』、第76巻1号（特集「いま、漢語は」）、
pp.153-162、2011.1

「漢語「-な」型形容詞の伸張—日本語への同化—」、『東京大学言語学論集』、31、pp.135-164、
2011.9

学会発表：「日本語との接触における漢語の異質性と受容」、第4回東京移民言語フォーラム、2011.11.26

(3) 外国人研究員・内地研究員

	2010年度	2011年度
内地研究員	2名	0名
外国人研究員	0名	0名
大学院人文社会系研究科研究員	0名	1名

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「二者間会話における発話のオーバーラップ」

「エトルリア語における印欧語からの借用語について」

「断り表現としての「大丈夫です」—ポライトネス、支障想定的可能性、もの度の観点から」

「ハウサ語におけるアラビア語由来の動詞表現とその受け入れ方」

「静岡県西部方言における使役接尾辞「一カス」」

「イタリア語における複合語形成」

「『甲骨文字における認知的なメカニズム』」

2011年度

「代換—関係性のレトリック」

「青森市津軽方言の推量形式「ビョン」」

「京都府舞鶴市方言（舞鶴弁）の記述」

「CHISE IDS データベースの分析と漢字入力への応用」

「無声摩擦子音同定の音響的手掛かりについて」

「ベトナム語の受け身マーカー *duoc / bi* の機能」

「ドイツ語のいわゆる冠飾句をめぐる研究」

「アイルランド語の動形容詞文に関する考察」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

佐々木優「英語とドイツ語における虚辞」(指導教員) 西村義樹

2011 年度

石塚政行「バスク語レクンベリ方言の能格標示」〈指導教員〉熊本裕

MOELJADI, DAVID「A Statistical Analysis of Indonesian Possessive Verbal Predicates」〈指導教員〉林徹

中澤光平「淡路島方言の音韻と形態」〈指導教員〉小林正人

濱田武志「湖南省江華瑶族自治県の梧州話の粵語に於ける系統論的位置付け」〈指導教員〉熊本裕

平沢慎也「A Description of the Meanings and Uses of the English Preposition "By"」〈指導教員〉西村義樹

ZHENG RUOXI「中国語における「所有者主語の BEI 受身文」の意味・機能」〈指導教員〉西村義樹

HO SEK JIA「Particles and Exclamations in English (Manglish) Spoken by Chinese Malaysians」〈指導教員〉

林徹

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

(甲)

永澤済「近現代期日本語における漢語の変化」

〈主査〉菊地康人 〈副査〉林徹・上野善道・鈴木泰・小野正弘

(乙)

なし

2011 年度

(甲) (乙)

なし

02 考古学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

東大考古学研究室は、伝統的に東アジアの中の日本という視点を重視してきた。同時に、研究科内の常呂実習施設や韓国朝鮮文化研究室、あるいは学内の総合研究博物館、新領域創成科学研究科、埋蔵文化財調査室等に所属する、日本近世、朝鮮半島、北アジア、西アジア等の考古学分野ないし生態系史や年代測定学等の関連分野の教員と協力して、幅広く教育研究活動を展開している。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

50年以上にも及ぶ北海道における調査では、常呂実習施設との共同調査として大島2遺跡の調査を09年よりおこなっている。

大貫を代表として07年度より開始した科研費課題である東京大学とロシア・ハバロフスク郷土博物館との国際共同調査では、10年度はハバロフスク近郊のクニャーゼ・ボルコンスコエ1遺跡を調査し、11年度はアムール川下流域のコンドン1遺跡を調査した。佐藤を代表として09年度より開始した更新世黒曜石の流通と消費を課題とする科研費研究では、北海道北見市吉井沢遺跡の調査を10、11両年度に実施した。

(3) 学会・研究誌・ホームページなどに関する研究室としての活動

11年12月日本中国考古学会大会開催、12年2月北アジア調査研究報告会開催

『東京大学考古学研究室紀要』は、10年度25号、11年度26号と順調に刊行された。すべて下記の研究室HP上にて公開している。

研究室のホームページのURLは<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/archaeology/>

(4) 国際交流の状況

ロシア・ハバロフスク郷土博物館、同国立極東大学博物館、同サハリン総合大学博物館との間に結んでいる研究交流協定に基づき、科研費課題を遂行した。

11年度の北見市大島遺跡の調査に中国・北京大学考古系の教員1名、大学院生5名が参加した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

大貫静夫 東北アジア考古学（現在に至る）

佐藤宏之 旧石器考古学・民族考古学（現在に至る）

設楽博己 縄文・弥生時代考古学（10年度より現在に至る）

(2) 外国人研究員・内地研究員

2010年度

外国人研究員 姜 仁旭

2011年度

外国人研究員 ヤンシナ・オクサナ・ヴァディボブナ

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「滋賀県における縄文時代の石錘・土錘について」

「上野東照宮の銅灯籠と石灯籠」

「エジプトフスタート遺跡水差しのフィルター」

「埼玉県の漁網錘について」

「サブカルチャーの中の「考古学者」—考古学に対する大衆的イメージ—」

「二里頭文化新石器期考察」

2011年度

「江戸大名屋敷出土の龍泉窯青磁について」

「北海道擦文文化期のサケ利用について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

大澤正吾「前期古墳における土器・埴輪の配置・配列の展開とその意義」〈指導教員〉大貫静夫

役重みゆき「蘭越型細石刃石器群の石器製作技術構造」〈指導教員〉佐藤宏之

堤絵莉子「殷周時代における腰坑の研究」〈指導教員〉大貫静夫

2011年度

新井才二「南コーカサス新石器時代の骨角器インダストリー」〈指導教員〉西秋良宏

高屋敷飛鳥「関東地方後期旧石器時代前半期における環状ブロックの構造に関する研究―遺物分布と台形様石器の視点から―」〈指導教員〉佐藤宏之

津田祐也「イラン南部、マルヴ・ダシュト平原後期新石器時代の生業変化―Tal-i Mushki, Tal-i Jari B 出土磨製石器類の技術的分析より―」〈指導教員〉西秋良宏

三木健裕「イラン、マルヴ・ダシュト平原におけるバクーン期編年の再検討―タル・イ・ギャブ遺跡出土土器の分析から―」〈指導教員〉西秋良宏

夏木大吾「中部・関東地域における稜柱系細石刃石器群の技術的変異性とその時間的、地域集团的帰属に関する研究」〈指導教員〉佐藤宏之

野村高広「古墳時代の東日本における「特殊な器台」に関する一考察」〈指導教員〉設楽博己

林正之「古代東国における集落構造の研究」〈指導教員〉大貫静夫

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

根岸洋「東北地方北部における縄文／弥生移行期論」

〈主査〉佐藤宏之 〈副査〉大貫静夫・設楽博己・今村啓爾・高橋龍三郎

(乙)

なし

2011年度

(甲) (乙)

なし

03 美術史学

1. 研究室活動の概要

1910年、「美学」の講座が創設されて以来、その主要研究分野のひとつが美術史であったため、1917年、「美学美術史」と改められた。1963年、組織拡充に伴い「美術史学」として独立し、第一類（文化学）に属することになった。5年後に、第二類（史学）へと移る。1994年、文学部の改組によって、歴史文化学科の専修課程となる。1995年、大学院重点化に伴う改組により、美術史学の大学院課程は、ディシプリンの独立は保持しながらも、最近の専門研究の動向とインターディシプリナリーな要求に応えるため、考古学とともに人文社会系研究科基礎文化研究専攻の中で形象文化コースを形成することになった。

研究の対象は、あらゆる美術作品や形象表現である。時代は原始から現代まで、地域もまったく限定されない。もとより、教員の専攻分野にしたがって、現在のところ、日本、中国、西洋、イスラームの美術、特に二次元芸術である絵画が主たる研究対象になっているが、決してこれに局限されるものでない。

現在の教員は、教授3名である（2008年3月までは助教1名が在職）。それぞれ自己の専門分野を中心に研究および教育に最大の努力を重ねているが、上述のような美術史学専修および大学院課程の基本的性格から充分であると言いきれない。そこで、東洋文化研究所および総合文化研究科から教員4名のほか、多くの非常勤講師に出講を依頼し、さらに次世代人文学開発センター先端構想部門（2005年3月まで文化交流研究施設基礎理論部門）の協力を得て、可能な限り完璧なカリキュラムが編成できるよう努めている。

教養学部からの進学はこのところ定員枠一杯である。修士および博士課程進学者は、学内外から受験者が多いものの、ここ数年合格者が定員枠に満たない。この他、学士入学者の採用も行ない、優秀な学生の発掘にも心掛けている。

研究室の活動としては、2008年6月より教授1名が再び美術史学会の代表委員となっており、学会活動を主導した。なお、別の教授2名が、前年度に引き続き美術史学会の常任委員を務めた。2010年3月、2011年3月には美術史学会東支部例会を担当した。このほか、1985年以来、研究室紀要『美術史論叢』を毎年1冊発行し、既に27号（2011年）に至っている。教育活動として毎年実施される古美術研修旅行（演習）があり、学生にとって美術作品調査研究の最初の訓練の役割を果たしている。

国際交流も盛んである。2011年11月現在で、外国人留学生の博士課程在籍者2名、外国人大学院研究生3名がいる。2010年5月16日にミケーレ・パッチ氏（シエナ大学、現フリブール大学教授）を招聘し、日本側研究者5名とともにシンポジウム「礼拝像の生動性をめぐって」を開催した。6月10日に次世代人文学開発センター、南欧語南欧文学研究室と共に、アンブロジーアーナ図書館副館長兼付属極東研究所長ピエール・フランチェスコ・フマガッリ氏を招き、講演会を開催した。2011年2月13日には、G-COE 死生学研究拠点と共に、ハーバート・ケスラー（ジョンズ・ホプキンス大学教授）、ファビオ・ランベッリ（カリフォルニア州立大学サンタ・バーバラ校教授）、ミケーレ・パッチ氏を招聘した国際シンポジウム「イメージとヴィジョン 東西比較の試み（死生と造形文化Ⅲ）」を開催した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

小佐野重利教授（西洋美術史）

佐藤康宏教授（日本美術史）

秋山聡教授（西洋美術史）

(2) 助教の活動

当該期間は助教不在のため特記事項なし。

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「ゲルハルト・リヒターのフォトペインティング研究」

「ブリュッゲル作「月暦画」連作に見られる様式についての一考察」

「宗達筆「白象図」の図像学」

「湯女図に関する考察」

「ギュスターヴ・モロー《ヘラクレスとレルネーのヒュドラ》について」
 「鬘光「眼のある風景」に見る画家像」
 「ジョルジュ・ド・ラ・トゥールの『ヴィエル弾き』について」
 「ジョン・エヴァレット・ミレイ「ファンシー・ピクチャー」再考」
 「池大雅と中国の画譜の関係」
 「近代日本における裸体画の受容」
 「ラファエル前派の誕生と19世紀イギリス社会」
 「少女雑誌における視覚表現の変化と継承」
 「菊池契月小論—自然・古画・絵画の関係—」
 「世紀末の女性イメージとクリムト」
 「ベルニーニの作品に見る公共性と私性」
 「フリーダ・カーロ作品のモチーフについて」
 「誰ヶ袖図の成立と展開」
 「フランス革命と新古典主義の関係性について」
 「シトー派初期写本『ヨブ記講解』における挿絵彩飾の図像研究」
 「浄土寺浄土堂にみる重源の設計士理念とその背景」

2011年度

「『愛に囚われし心の書』—叙述と象徴」
 「カルロ・クリヴェッリの祭壇画について」
 「J.B.グルーズのローマにおける活動と影響」
 「メムリンクの〈聖ヨハネ祭壇画〉について」
 「池大雅「漁楽図」（京都国立博物館蔵）について」
 「長沢芦雪の魅力」
 「ピカソの「青の時代」について～ピカソはなぜ「青」にこだわったのか？～」
 「モネの人物表現と視線の問題について」
 「ホイッスラーの水彩画」
 「ティツィアーノの平面的変奏」
 「岡本太郎《明日の神話》—「太陽の塔」とマックス・ワルターズワンベルグの関係性から—」
 「ダビッド・アルファロ・シケイロス作《今日におけるメキシコの肖像》における色彩、立体性、そして人物描写から窺う、イデオロギーと現実性の表現」
 「ウィリアム・ターナーにみる時代継承性と作風変化」
 「企業あるいは企業家が美術品収集において果たした役割とその意義について（特に19世紀～20世紀前半の日本について）」
 「「南蛮風俗画」と狩野内膳筆「南蛮屏風」に関する考察」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

小林真結「俵屋宗達の料紙装飾について—色紙装飾および「檜図屏風」を中心に—」（指導教員）佐藤康宏
 鈴木しおり「鈴木其一研究—画業第一期と第二期について」（指導教員）佐藤康宏
 鈴木麻里子「パリ包圍（1870-71）と美術—ピュヴィ・ド・シャヴァンヌの《気球》と《鳩》を中心に」（指導教員）秋山聰
 帯刀菜緒「久隅守景の四季耕作図作品群に関する考察」（指導教員）小川裕充
 BAZAZO, Rami「天明期に至るまでの島居清長の様式展開をめぐって～遠近法を中心に～」（指導教員）佐藤康宏

2011年度

荒川仁美「フランス王政復古期のパリ・サロンにおける「アンリ四世と子供たち」研究」（指導教員）秋山聰
 神田惟「ルサーファ」陶器再考：三上・フーケコレクションに基づくシリアの無色透明釉下多彩フリット胎土陶器の研究」（指導教員）榎屋友子
 宗岡由美子「鶴亭研究—新たな鶴亭像の構築に向けて」（指導教員）佐藤康宏
 村田梨沙「若冲筆「石燈籠図屏風」試論—晩年期の作品と制作状況をめぐって—」（指導教員）佐藤康宏
 富田真理子「大正期におけるレオナルド・ダ・ヴィンチ受容の一側面—甲斐庄楠音を中心に—」（指導教員）小佐野重利

中村真弓「慶派の僧形彫刻」〈指導教員〉佐藤康宏

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

黄立芸 (HUANG,LI-YUN)「呂紀「四季花鳥図 四幅」(東京国立博物館)を中心とする日中花鳥画の比較研究」

〈主査〉小川裕充 〈副査〉佐藤康宏・板倉聖哲・鈴木廣之・宮崎法子

宣承慧 (SUN, SEUNG HYE)「東アジア絵画における陶淵明像—韓国と日本の近世を中心に—」

〈主査〉佐藤康宏 〈副査〉戸倉英美・小島毅・小川裕充・板倉聖哲

植田彩芳子「明治後期の絵画と思潮——横山大観・岡倉天心・黒田清輝——」

〈主査〉佐藤康宏 〈副査〉木下直之・板倉聖哲・古田亮・塩谷純

(乙)

なし

2011年度

(甲)

佐々木守俊「平安時代の仏教造像における中国図像の受容」

〈主査〉佐藤康宏 〈副査〉板倉聖哲・有賀祥隆・浅井和春・奥健夫

(乙)

なし

04 哲学

1. 研究室活動の概要

1877年の東京大学設立以来、一貫した歴史をもつ哲学科は、1910年、「哲学」、「史学」、「文学」の3学科中「哲学科」に属する哲学専修学科として今日に至る基礎をかためた。本研究室は、井上哲次郎、ラファエル・フォン・ケーベルといった最初期の教授陣のもと、西田幾多郎、桑木厳翼、田辺元、九鬼周造といった日本の哲学草創期の哲学者たちを輩出してきた伝統を持つ。1963年の類制度創設以降は、第一類（文化学）中の、そして1995年からは、思想文化学科中の「哲学専修課程」として、文学部の研究・教育組織の一角を占める。また、哲学専修課程は、大学院の組織としては、1953年、人文科学研究科の中の哲学専攻課程として発足し、1995年からは、人文社会系研究科における基礎文化研究専攻内の思想文化コースに属する哲学専門分野となり、西洋哲学の歴史的探究に基づきつつ、哲学の体系的なおよび個別テーマ研究をその任務として活動を続けている。

2012年3月現在の所属教員は、教授4名、准教授1名、外国人専任講師1名、助教1名であり、哲学史の時代区分的には古代ギリシャ哲学から現代哲学まで、そして内容的には論理哲学から、存在論、形而上学、社会哲学、応用倫理に至るまでの広い領域をカバーするべく、多方面にわたる研究者を偏りなくそろえることに留意してスタッフが構成されている。また、不定期的ではあるが、フルブライト講師など外国人教員が一定期間在籍することもしばしばであり、その際は英語による講義が開講される。ちなみに、2008年度から2009年度は、米国のメアリマウント・コレッジのRoger Robins教授がフルブライト講師として哲学研究室に在籍し、哲学特殊講義を英語にて講じていた。2010年度以降は、グローバル化の現状に対応するために、日本人専任教授による英語の授業も開講され、さらに2011年10月からは、ドイツ人専任講師を迎えて英語による授業が増加し、グローバル化に対応する方向性が強化された。また、毎年、他大学から3~4名の非常勤講師の協力をあおぎ、今日の哲学研究の多様化の情勢に対応するべく多彩なカリキュラムの編成にたえず留意している。

教養学部から毎年進学する学生数は、近年、少数の学士入学者を含めて、毎年20名を越えている。また、大学院も、修士課程、博士課程それぞれの枠について、多くの応募者の中から選抜された院生で毎年ほぼ満たされている。関心もたれる領域は、古代哲学から近世・現代の西洋各国ないし各言語圏の哲学にひろく及び、そして論じられるテーマも特定の偏りなく分布している。また、近年は、欧米あるいは中国など東アジアからの大学院生や研究生も少しずつ増えてきており、研究室全体が着実にグローバル化しつつあることが実感される。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、「哲学会」の運営があげられる。哲学の学会としては、文字通りわが国における草分けとして、明治初期以来の長い伝統を持つこの組織は、今日、戦後生まれの中堅・若手層の成長によって、自由闊達な雰囲気のもとに旧来にまして活発な研究活動を展開し、わが国の哲学の学会のなかにあつて重要な位置を占め続け、多くの有能な人材を世に送り出している。「哲学会」の主な事業としては、今日では特集形式をとる年報の形で出されている「哲学雑誌」の編集・刊行、秋の「研究大会」、春の「カント・アーベント」（研究発表と講演会）の企画開催があり、いずれも高レベルの研究の披渡と研鑽の場として機能している。また、近年は、哲学に対する社会的要請に呼応すべく、哲学研究室として死生学グローバルCOEとの連携のもと「応用倫理・哲学研究会」を企画し、研究報告書もすでに刊行している。その他、「Hongo Metaphysics Club」というタイトルのもと、哲学研究室を訪れる外国人研究者を交えた国際研究会議も大変頻繁に行われ、そこでは同時に哲学研究室の大学院生が、そしてときに応じて参加する他大学の大学院生が、英語で発表をしている。加えて近年は、北京大学、ソウル大学、そして東京大学の人文系学部間で、教員と院生がともに英語で研究発表をするBESETO哲学国際会議が持ち回りで開催されており、多くの教員と院生が参加・発表をしている。2012年1月には、哲学研究室が主体となり、第6回BESETO哲学会議が開催された。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 天野正幸（教授、ギリシャ哲学）
- 高山守（教授、無という観点から哲学を読み解く）
- 一ノ瀬正樹（教授、因果性の哲学・人格概念の研究）
- 榊原哲也（教授、現象学・ドイツ現代哲学）
- 鈴木泉（准教授、近世形而上学・現代フランス哲学）
- Richard Dietz（専任講師、現代英米哲学・言語哲学）

(2) 助教の活動

朝倉 友海

在職期間 2010年度から2011年度まで

研究領域 西洋近世哲学、東アジア比較哲学、生命概念を中心とした自然哲学

主要業績 『概念と個別性 スピノザ哲学研究』、東進堂、2012年3月

“On Buddhist Ontology: A Comparative Study of Mou Zongsan and Kyoto School Philosophy,” *Philosophy East and West* 61-4, 2011年10月

「ドゥルーズと「人間の死」」、『流砂』4号、2011年7月

「生命と他者」、『世界経験の枠組み 哲学への誘い IV』、東進堂、2010年10月

(3) 外国人教員の活動

ディーツ リチャード (専任講師)

在職期間 2011年度10月から

研究領域 Philosophy of Language, Epistemology, Philosophical Logic

主要業績

(書籍) Horsten and R. Pettigrew (eds.), *The Continuum Companion to Philosophical Logic*, 2011, pp. 128-79.

(論文) Dietz, Richard. “A puzzle about Stalnaker’s Hypothesis”, with Igor Douven, *Topoi* 30 (2011), pp. 31-7.

(学会発表) ‘The Structure and Content of Appearance’ 12/11: Japanese Society of Philosophy conference, University of Tokyo.

‘The Structure and Content of Appearance’ 01/12: BESETO Conference, University of Tokyo.

‘Vagueness, Knowledge, and Choice’ 02/11: Hongo Metaphysics Club, Department of Philosophy, University of Tokyo.

‘Boundarylessness’ 02/12: InterOntology 12, Keio University, Tokyo.

‘Comparative Concepts’ 03/12: PhilLogMath 2, Seiryō Keikan, Tokyo.

(学会活動) Member of the editorial panel of the new journal *Thought* which is launched by the Northern Institute of Philosophy.

Founder of Tokyo Forum for Analytic Philosophy (TFAP)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「バークリの抽象観念批判について」

「ウイトゲンシュタインの哲学的研究の推移～彼の宗教観、ならびに語り得る・語り得ないの世界観を観点として～」

「ジョン・ロックの人格論について」

「『善の研究』における純粋経験について」

「ウイトゲンシュタインの独我論について」

「カント「定言命法」の検討」

「自由と決定に関する一つの議論として、自由を阻害する決定要因<悲劇>の分析」

「ミル『自由論』研究」

「フレーゲの実在論について」

「フッサール『デカルト的省察』における他者論について」

「カント『純粋理性批判』における触発について」

「ヘーゲル『精神現象学』における生命について」

「フッサール『イデー I』における本質概念」

「カント『道徳形而上学の基礎づけ』における定言命法の導出とその課題」

「カントにおける自由の問題—消極的自由と積極的自由—」

「人格概念に関する考察—ロック哲学を手がかりに—」

「刑罰と責任について—脳神経倫理学を手がかりに—」

「アリストテレス『政治学』における「自然」概念について」

「現象学的還元と世界」

「物体の通時的同一性と現在主義」

2011 年度

「レヴィナスの顔概念について」

「確率論におけるベイズ主義への試論」

「前期サルトルにおける自由と行為～『存在と無』を中心に～」

「所有権論を巡って～ロックの議論を端緒に～」

「ヒュームにおける類似の概念について」

「集合的責任実践—応答責任論を巡って—」

「J.S.ミル『自由論』の読解—その現代的意義の確認—」

「経験主義者は何を信じてよいか：ファン＝フラーセンの認識論」

「アンスコムにおける「理由」と実践的推論」

「ライブニッツの認識論」

「時間の流れについて—ベルクリンの議論をもとに—」

「フッサールの自我論について」

「スピノザ『エチカ』における隷属と能動化」

「ジョン・ロックの『統治論』第二論文における人格概念について」

「ミルの功利主義における快樂の質的区別に関する考察」

「ウイトゲンシュタインの言語使用論」

「『存在と時間』における「死」をめぐって」

「J.S.ミルの自由論研究」

「J.L.オースティンの行為遂行文に関する一試論」

「いかにして利己を乗り越えるか—キリスト教における死と愛の倫理—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

生野剛志「メタ倫理における自然主義について 非還元的自然主義の批判的検討」(指導教員) 一ノ瀬正樹

今井悠介「デカルト知識論研究—明晰判明性の問題—」(指導教員) 鈴木泉

嶋崎史崇「初期ハイデガーにおける遂行としての哲学」(指導教員) 榊原哲也

柏谷崇江「ルソーの教育思想—『エミール』の読解を通して」(指導教員) 鈴木泉

川瀬和也「ヘーゲル『大論理学』における目的論」(指導教員) 高山守

田村未希「前期ハイデガーにおける歴史性の問題と解釈学的方法—学問の基礎づけの観点から—」(指導教員) 榊原哲也

2011 年度

木山裕登「『物質と記憶』の知覚論と物質的実在の概念について」(指導教員) 鈴木泉

山本和則「自由の理論と実践に関する考察—カントを手掛かりにして—」(指導教員) 高山守

坪井耕一郎「パスカル『パンセ』における人間の諸能力と「三つの秩序」の関係について」(指導教員) 鈴木泉

山田康弘「エンネアデスVI, 9, 3における一者(体験)」(指導教員) 天野正幸

葛谷潤「『論理学研究』における志向性概念について」(指導教員) 榊原哲也

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

(甲)

岸貴介「ニーチェ哲学研究—「根本的に健康である」ことに基づく、最良の生存の追求—」

〈主査〉高山守 〈副査〉松永澄夫・榊原哲也・鈴木泉・村井則夫

木田直人「自然的判断理論の生成と発展—マルブランシュの真理・秩序・価値への視座—」

〈主査〉松永澄夫 〈副査〉熊野純彦・一ノ瀬正樹・榊原哲也・鈴木泉

伊多波宗周「秩序の哲学としてのプルードン思想の方法と展開」

〈主査〉鈴木泉 〈副査〉一ノ瀬正樹・榊原哲也・森政稔・松永澄夫

大谷弘「ウイトゲンシュタインにおける言葉の意味と哲学の意義」

〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉榊原哲也・鈴木泉・野矢茂樹・入不二基義

(乙)

なし

2011年度

(甲)

島村修平「自分自身の心を知ること：命題的態度の自己知を巡る哲学的ジレンマとその解決の試み」

〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉高山守・榊原哲也・飯田隆・柏端達也

佐藤暁「タイプとしての意味と実践的能力の命題的表現—ダメットの哲学に即して—」

〈主査〉一ノ瀬正樹 〈副査〉天野正幸・鈴木泉・戸田山和久・斎藤浩文

相澤康隆「アリストテレスのアクラシア論—「自制心のない人」とはどのような人か—」

〈主査〉天野正幸 〈副査〉一ノ瀬正樹・高山守・高橋久一郎・神崎繁

(乙)

なし

05 倫理学

1. 研究室活動の概要

人間存在、価値、道徳意識、行為等に関する学的反省を行う倫理学の研究は、古今東西の先人の思索の跡を踏まえ、これを手懸かりとして深められる。倫理学専修課程の講義・演習も倫理学の基礎理論の考察を目指したもののほか、西洋の倫理思想を対象とするものと、日本の倫理思想を対象とするものがあり、教授3名、助教1名から成る専任教員の専門分野も多岐にわたっている。専任教員の他、他大学から出講して頂いている先生方（各年度5名程度）の協力のもと、西洋と日本の主要な倫理思想を対象とする多彩なカリキュラムの編成が可能になっている。

教養学部から進学する学生数は、近年増加傾向にある（2010年度14名、2011年度15名）。学科全体としてみれば、学生、院生あわせて50名ほどの学科だが、学生、院生の研究テーマも、古代ギリシア哲学や古代ユダヤ教からヨーロッパにおける現代の先端的な社会哲学や倫理学まで、また、古事記から儒教、仏教、国学、さらに近現代の日本思想に至るまで、まことに多彩である。そして、教員と学生、院生双方に言えることであるが、本研究室の特徴として西洋思想の研究者と日本思想の研究者の間での対話が要求され、現に行われているという点が挙げられる。

倫理学研究室では、年一回『倫理学紀要』を編集、発行しているが、これは、専任教員ばかりでなく、博士課程在籍中の院生の研究成果を発表する場ともなっている。また、本専修課程の卒業生を中心に「倫理学研究会」が組織され、年一回の定例会が行われており、そこでは倫理学の専門的な研究者のみならず社会人をもまじえた活発な研究交流がなされている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 関根 清三

専門分野 西洋倫理思想史・旧約聖書学

在職期間 1994年6月－現在

教授 菅野 覚明

専門分野 倫理学原理論・日本倫理思想史

在職期間 2005年1月－現在

教授 熊野 純彦

専門分野 倫理学原理論・近現代西欧倫理思想

在職期間 2007年4月－現在

助教 宮下 聡子

専門分野 心理学的倫理学・宗教的倫理

在職期間 2008年4月－現在

(2) 助教の活動

宮下 聡子

在職期間 2008年4月－現在

研究領域 心理と倫理と宗教の接点

主要業績

(論文)

「キューブラー＝ロスの死生観——倫理の観点から——」、『倫理学紀要』第18輯、1-27頁、2011.3

「フロムの「生産的構え」の倫理性をめぐって」、『倫理学紀要』第19輯、1-31頁、2012.3

(学外非常勤講師など)

非常勤講師、青山学院大学、「自己理解」、2010.9～2011.9

ゲスト・スピーカー、立教大学、「批判から学び直すキリスト教「ユングの思想から見たキリスト教」」、2011.10.27

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- 「正統の伝えるもの～北畠親房『神皇正統記』～」
- 「伊藤仁斎の「天道」論について」
- 「石田梅岩一性と心」
- 「和辻哲郎の人格観における persona の解釈」
- 「甲陽軍艦論」
- 「バトラーにおける責任＝応答可能性の概念—その実践的意義—」
- 「三木清『人生論ノート』について」

2011年度

- 「アリストテレスの友愛論」
- 「伊藤仁斎における「王者」というあり方について」
- 「福澤諭吉における文明の概念について」
- 「北一輝と意志自由論—「国体論及び純正社会主義」における科学主義への考察から」
- 「江戸時代後期の勤労観」
- 「プラトン『ソクラテスの弁明』における知と無知について」
- 「『沈める滝』考」
- 「夏目漱石『こゝろ』における「先生」とKの自殺の動機を中心とした精神世界について」
- 「『往生要集』に関する考察—源信における行と誠について—」
- 「大君の結婚拒否」
- 「柳田國男『先祖の話』の研究」
- 「柳田國男「先祖の話」について」
- 「『野火』における二重の「私」と「神」に関する考察」
- 「井原西鶴の「好色」について」
- 「『教行信証』—「極促」から辿る超越とのつながり」
- 「安部公房『砂の女』について」
- 「カント『実践理性批判』における自由概念について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

- 前田雅彦「感受性と他者—レヴィナスを手がかりに—」(指導教員) 熊野純彦
- 加藤喜市「アリストテレス倫理学における完全性について」(指導教員) 関根清三

2011年度

- 池松辰男「ヘーゲルにおける人間学の思考—自己感情の概念にそくして—」(指導教員) 熊野純彦
- 海上隆政「ヘーゲル『法哲学』における行為とその運命」(指導教員) 熊野純彦

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

- 伊藤由希子「聖(ひじり)と凡人(ただびと)——『日本国現報善悪霊異記』研究」
(主査) 菅野覚明 (副査) 熊野純彦・多田一臣・蓑輪頭量・竹内整一
- 古田徹也「何が真理という概念を構成するのか—ウィトゲンシュタインの人間論研究に向けて—」
(主査) 熊野純彦 (副査) 菅野覚明・一ノ瀬正樹・野矢茂樹・佐藤康邦

(乙)

なし

2011年度

(甲)

- 太田貴之「『南総里見八犬伝』の倫理思想—勤懲碑史における悪—」
(主査) 菅野覚明 (副査) 熊野純彦・長島弘明・黒住真・頼住光子

(乙)

なし

06 宗教学宗教学史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程（宗教学研究室）における研究は宗教の経験科学的研究である。2010年度の研究活動は、教授4、助教1、計5名、2011年度は、教授5、助教1、計6名の教官を中心として行われた。研究分野は、宗教理論（宗教概念批判、宗教学史）、世界宗教史、日本宗教史、宗教思想史（中近世および近現代ヨーロッパ、古代イスラエル・オリエン特、近現代日本）、現代社会と宗教（死生観の変容、生命倫理と宗教、グローバル化・ポスト世俗化時代の宗教と公共圏）、宗教調査（現代日本の諸宗教・宗教性、宗教民俗）、発掘調査（イスラエル）、などをカバーしている。方法論は、宗教社会学、宗教民俗学、宗教人類学、宗教史学、比較宗教学などである（詳しくは、教授・准教授については本書第Ⅲ部を、助教については後述を参照のこと）。このように宗教学は対象とする宗教・地域も方法論も極めて多様であるため、毎年数名の非常勤講師を迎えることにより、その多様性を可能な限り反映するカリキュラムを実現している。また、近年は宗教学の社会的役割を意識し、死生学グローバルCOEとの活発な連携が研究活動の大きな特色となっており、院生・学部生の問題関心にも影響を与えている。

本専修課程では研究成果を発信するために助教と院生の協力により毎年『宗教学年報』を刊行している。これには教員、院生、研究室同窓生などの研究論文・書評・研究ノートが掲載される。併せて『年報別冊』も刊行されるが、これは本研究室の同窓会（本専修課程創設時の主任教授、姉崎正治教授の雅号により嘲風会と称する）誌的な性格をもち、同窓生（留学生を含む）の随想や近況を伝えるもの、また研究室の現況報告、修士論文の要旨、卒業題目一覧などが常時載せられる。他に研究室と同窓生の交流の場としては、定期・不定期の研究会・集会を開催している。

本専修課程の最近の傾向として、駒場からの進学者が比較的多いこと（2010年度17名、2011年度13名、学士入学者1名）が挙げられる。研究室の伝統の一つに、学部生・院生・教員全員が参加する春の研究室旅行があるが、この行事は、増加する学部生や、他大学からの大学院新入生が研究室に馴染むための、かつ教員が各学生の人柄や興味関心を把握するための場として、一層意義を増している。また、この旅行では東京近隣の宗教施設を複数見学するが、その企画は博士課程1年次の院生全員が担当する。このため文献研究を専門とする院生にもフィールドワークの実地経験のよい機会となっている。

国際交流としては、2010年8月に、ドイツのルール大学ボーフム（Ruhr-Universität Bochum）の「宗教史の動態」コンソーシアムと学術協力の協定を結んだことが挙げられる。2011年には既に死生学を通して交流のあった、イギリス連合王国のダラム大学（Durham University）宗教学科からもさらなる共同研究の打診を受けた。2010年度には、日本学術振興会の短期外国人研究員としてボストン大学教授H・レヴィン氏、イスラエルのバルイラン大学専任講師S・ムアーレム氏を招聘し、共同研究や講演会を開催した。また、2010年8月30、31日に、東京大学文学部にて、宗教学研究室とバルイラン大学の共催で、「アジアにおける一神教」をテーマに国際シンポジウムを開催し、研究室のOB、OG、博士課程院生も研究発表を行った。成果は、科研報告書（市川）として編纂した。他に、2010年8月には、カナダのトロント大学で開催された国際宗教学宗教学史学会世界大会に1名を除く全教員が参加・発表を行った。外国からの留学生と外国への留学生も増加傾向にある（2011年度は震災の影響があったが、それぞれ7名と4名）。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

島 進：近代日本宗教史、宗教理論研究、比較宗教運動論（1987年4月～）

鶴岡 賀雄：西洋神秘思想、近現代宗教思想（1998年4月～）

市川 裕：一神教の世界宗教史、ユダヤ教、比較法思想史、ヘブライ語（1991年4月～）

池澤 優：中国宗教研究、祖先崇拜、生命倫理（1995年4月～）

藤原 聖子：宗教学（理論研究・比較研究）、宗教と教育の関係、アメリカの宗教（2011年4月～）

高橋 原：ユング心理学、近代日本の知識人宗教（2007年4月～2012年3月）

(2) 助教の活動

高橋 原：（2010年4月～2012年3月）

（解説）「日本の宗教教育論 第二回」（共著者：島進・星野靖二）『日本の宗教教育論 2』各巻所収、クレス出版、2010年7月。

(口頭発表) “Psychological Approach to Japanese Myth and Nihonjinron”, XXth World Congress of the International Association for the History of Religions. in Toronto, 2010.8.20.

(口頭発表) 「日本の心理学的神話研究の歴史と特徴—河合隼雄の中空構造論を例として—」日本宗教学会第69回学術大会、於東洋大学、2010年9月5日。

(書評) 「書評特集 近現代におけるチベット 仏教イメージとその周辺」『国際宗教研究所ニュースレター』68号、2010年10月。

(口頭発表) 「清見瀧の一夏 樗牛・嘲風物語」『新佛教』研究会夏の勉強会—清水の近代と宗教、於清水市龍津寺、2011年8月27日。

(口頭発表) 「東アジアに対する新佛教徒の視線」日本宗教学会第70回学術大会、於関西学院大学、2011年9月4日。

(翻訳) マスザワ・トモコ (増澤知子) 「宗教的起源への志向性」(pp. 82-108)、デイヴィッド・チデスター「植民地主義と宗教」(pp. 213-240)、マーク・ユルゲンスマイヤー「ナショナリズムと宗教」(pp. 319-336) (『宗教概念の彼方へ』磯前順一・山本達也編、法蔵館、2011年9月)。

(論文) 「ポスト嘲風・梁川世代のスピリチュアリティ—福島政雄と霜田静志を例として—」『スピリチュアリティの宗教史 下巻』リトン、2012年1月、pp. 447-468。

(翻訳) ドナルド・S・ロペス「ビュルヌフと仏教研究の誕生」、末木文美士編『近代と仏教 国際シンポジウム第41集』国際日本文化研究センター、2012年3月16日、pp. 19-26。

(書評) 「書評特集 近代仏教研究の活況」『国際宗教研究所ニュースレター』73号、2012年1月。

(口頭発表) “Treasure hunting that failed, but fruitful”, Today-Yale Initiative (TYI) Junior Scholar Conference, Discovering Japan in the United States: The fruits and the future of academic exchange at Yale and Today, at the MacMillan Center in Yale University, 2012.3.29.

(インタビュー) 「宗教者に聞く 東北ヘルプ事務局長川上直哉牧師『東北被災地支援における宗教者の連携と心のケアについて』」『国際宗教研究所ニュースレター』73号、2012年3月。

(論文) 「新佛教徒とは誰か」、新佛教研究会編『近代日本における知識人宗教運動の言説空間—『新佛教』の思想史・文化史的研究—』(科学研究費補助金基盤研究 B 研究課題番号 20320016、代表・吉永進一) 2012年3月、pp.44-79。

(3) 外国人研究員・内地研究員

前川理子

Stephen Covell

Mark Rowe (二期)

Hillel Levine

Shlomy Mualem

Tim Graf

Erica Baffeli

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「パウロ・コエーリョの半生と作品」

「中世の修道制と修道院建築」

「西洋文化における両性具有的存在の理解・神話解釈のあり方を中心に」

「現代日本人の葬送の変容」

「学級における「いじめ」現象」

「宗教と自殺」

「隣人愛について—賀川豊彦の実践に見るその構造と問題—」

「平田篤胤の幽冥観成立について」

「現代アメリカの「市民宗教」」

「企業組織における宗教性」

「日本宗教における「病」の考察」

「境界論で読む『羅生門』」
「日本の怨霊思想」
「プロセス神学における神概念について」
「日本新宗教における一般信者の体験談・自己物語を通じたアイデンティティ再構築過程—物語論の視点から—」
「現代日本における葬送の変化と死の共同性」
「多文化主義における宗教の共生」
「政教分離研究」
「V.W.ターナーの『社会劇』理論の普遍性に関する一考察」
「ヨーロッパにおける反ユダヤ主義の歴史」
「便宜的信従に視く、近世末の普遍主義」

2011年度

「パウル・ティリッヒの神学における宗教の概念」
「日本における生命倫理と宗教」
「髪の「力」信仰の理由」
「ミシェル・ド・セルトーの神秘主義研究について」
「ブルカ禁止法案をめぐる論争」
「オーバーアマガウ受難劇の宗教的意義」
「宗教法人の法制度・税制に関する諸問題について」
「日本人の「無宗教」意識」
「死にゆく人々のケアとケアを施す人々 在宅ケア在宅看取りを可能にするには」
「マルキオンの神観」
「宗教と宗教都市—天理教、天理市を事例として」
「近現代仏教の動向から見た宗教理論の一考察—世俗化・公共宗教・社会参加仏教」
「神と性と死」
「つくられた西欧とイスラムの対立～ラシュディ事件とムハンマド風刺画事件を例にとつて～」
「アメリカの市民宗教 その歴史と類型」
「現代のための<近代>へのまなざし～天皇・国家神道・無宗教～」
「高度経済成長期における「憑きもの」の衰退と「ツキ」の登場」
「ウェーバーの儒教研究とオリエンタリズム」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

朴大信「フランクルの人間生成論—その苦悩論的考察と現代宗教史的意義」〈指導教員〉島蘭進
下野葉月「フランシス・ベイコンの自然探求という宗教」〈指導教員〉鶴岡賀雄
齋藤公太「「心神」の政治神学—閻斎学派における北畠親房の思想の継承」〈指導教員〉島蘭進
虫賀幹華「ヒンドゥー葬送儀礼の宗教的再考」〈指導教員〉市川裕

2011年度

飯島孝良「近代批判としての「イエス像」—ドストエフスキ『悪霊』をめぐる宗教的諸問題」〈指導教員〉鶴岡賀雄
藤井修平「エリアーデ宗教学の構造—彼の理論とそれを形成する諸前提の分析」〈指導教員〉鶴岡賀雄
金律里「現代の「死者」供養としての水子供養」〈指導教員〉池澤優
金貞銀「在日コリアンのエスニック・アイデンティティと宗教の役割—キリスト教を中心として—」〈指導教員〉市川裕
中井学「トルコのイスラーム政党」〈指導教員〉市川裕
前島康佑「『日本霊異記』にみられる信仰の様相」〈指導教員〉池澤優
本間美穂「ハンナ・アーレントの「赦し」の概念」〈指導教員〉鶴岡賀雄

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

江川純「イタリア宗教史学の誕生」
〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉池澤優・竹沢尚一郎・松村一男・北村暁夫

金子奈央「禅宗清規と日本におけるその変容に関する宗教学的的研究」

〈主査〉池澤優 〈副査〉島藺進・市川裕・末木文美士・石井清純

(乙)

磯前順一「近代日本の宗教言説とその系譜—宗教・国家・神道」

〈主査〉島藺進 〈副査〉鶴岡賀雄・桂島宣弘・林淳・高水博志

2011年度

(甲)

高久(中西) 恭子「ユリアヌスの宗教復興と〈真の愛智〉—その構想と帰結—」

〈主査〉市川裕 〈副査〉鶴岡賀雄・本村凌二・宮本久雄・松村一男

大澤千恵子「児童文学の宗教性 「宗教」・こども・ファンタジー」

〈主査〉島藺進 〈副査〉市川裕・松村一男・河東仁・井辻朱美

山本伸一「シャブタイ派思想における反規範主義の起源と展開—ガザのナタンからドンメ教団と『日々の歎びの書』へ—」

〈主査〉市川裕 〈副査〉鶴岡賀雄・鈴木薫・鎌田繁・勝又直也

嶋田英晴「ユダヤ教徒の生き残り戦略—中世イスラーム世界の場合—」

〈主査〉市川裕 〈副査〉池澤優・柳橋博之・深澤克己・鎌田繁

藤本拓也「シオラン宗教思想の研究—神への欲求と無信仰」

〈主査〉鶴岡賀雄 〈副査〉島藺進・市川裕・棚次正和・深澤英隆

(乙)

なし

07 美学芸術学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、その名が示すとおり、美と芸術を対象とする研究の場として機能している。研究分野の中心をなすのは、美と芸術に関する理論的考察であるが、文学、音楽、造形芸術、演劇、舞踊、映画といった個別の芸術ジャンルを対象とする研究をも含む形で多彩な研究が繰り広げられ、一般美学のみならず、個別のジャンルの研究の世界にも多くの人材を輩出してきた。このように一般的・原理的な研究と個別的・具体的な研究とが相補いながら並存することによって、美学の原理的な研究が具体的な芸術現象や芸術体験から遊離することなく、アクチュアリティを持った形で展開されてきたのみならず、音楽学、演劇学といった個別のジャンルに関わる研究分野に関しても、奥行きと広がりを持った研究によって多大な貢献を成し遂げてきた。とりわけ、本研究室の学風をなす、古典的なテキストを取り上げ、その精読によって厳密なテキスト研究を積み重ねてゆく研究の手法は、現象の皮相的な考察に陥らない、独自の研究の伝統を作り上げてきた。

さらに学問状況全体が大きく変わりつつある近年にあつては、一般美学の研究においても、また個別的なジャンル研究においても、美や芸術といった概念やそれを背景とした芸術制度や慣習といった、これまで自明なこととして問われることのなかったシステムそのものの成り立ちを対象化し、政治・経済や社会制度、メディアといった問題圏の中で捉えなおしてゆくような研究が重要な位置を占めるようになってきており、さらには美学を感性文化論的文脈のうちに位置づけることも喫緊の課題となっている。このような新しい方向性に関しても本研究室は従来の伝統を新たに生かす仕方での日本の学会における主導的な役割を果たしており、そのような研究環境を求めて他大学から本学での指導を希望してやってくる者なども少なくない。また外国からの留学希望も多く、この2年間に受け入れた外国人研究生は2名である。

本研究室では現在JTLA (The Journal of the Faculty of Letters, the University of Tokyo, Aesthetics) と題された欧文の紀要 (1976年創刊) と『美学芸術学研究』(1982年に『東京大学文学部美学芸術学研究室紀要・研究』として創刊、1995年改題) と題された和文の紀要の2つを毎年刊行している。これらはもちろん、教員スタッフや博士課程の大学院生の研究成果の発表の場となっているが、特に前者は当研究室の研究活動と様々な形で関わっている諸外国の第一線級の研究者を執筆者に迎えるなど、国際的な研究交流の点でも大きな貢献を果たしてきた。また、美学会東部会との共催で、ロバート・ステッカー (セントラル・ミシガン大学教授)、グンター・ゲバウアー (ベルリン自由大学教授)、アルネ・ツェルプスト (バイエルン科学院シェリング・コミッション事務局長、ミュンヘン大学) といった著名研究者を迎え講演会を開催するなど、海外との学術交流に努めている。なお、本研究室では美学会の本部事務局 (~2010年10月) および東部会事務局 (2010年10月~) を担当しており、名実ともに日本における芸術研究の拠点としての役割を担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

2007年12月以降渡辺裕教授 (在籍は1996年~。聴覚文化論、音楽社会史) が人文社会系研究科文化資源学研究室に移ったが、しかし文学部のほうでは、これまでと同じく美学芸術学研究室のスタッフとして教育・研究に携わっている。また、2008年4月に安西信一准教授 (庭園美学、環境美学) を新たに迎え、西村清和教授 (在籍は2004年~。現代美学)、小田部胤久教授 (在籍は1996年~。近代美学、感性文化論) とともに4名の教員スタッフによってバランスのとれた教育活動ができるように努力している。

(2) 助教の活動

太田 峰夫

在職期間 2009年4月1日~2012年3月31日

研究領域 音楽学

主要業績

論文

1. 「記譜法の変化と「南東ヨーロッパ共通の特徴」の創造—バルトークの民謡研究におけるフォノグラフの役割について—」、2011年6月、『美学』第61巻第1号121~132頁、美学会。

2. 「19世紀後半のハンガリーにおけるツィンバロン教育の近代化と「民衆音楽家（"népzenész"）」批判—ツィンバロン教師アッラガ・ゲーザの議論を中心に—」、2012年3月、『民族藝術』第28号、125～132頁、民族藝術学会。
3. 「ツィンバロンはいかにして女性の楽器になったか——19世紀後半のハンガリー市民社会におけるツィンバロンの受容史について」、2012年3月、『文化資源学』第10号、23～34頁、文化資源学会。

学会発表・講演

1. “From Csárda to “Family Circle” — On the Reception History of the Cimbalom in Turn-of-the-Century Hungarian Society”, 2010年7月17日、RMA Annual Conference 2010 “Boundaries” (The University of London, London).
2. 「19世紀ハンガリーにおけるツィンバロン教育の体系化と「民衆音楽家(népzenész)」批判 ～ツィンバロン教師アッラガ・ゲーザの演奏論を中心に」、2011年2月26日、民族藝術学会第121回例会（京都・京都国立近代美術館）。
3. “Bartók' s wrists and the 19th-century performance practice—An essay on the historicity of piano technique”, 2011年7月18日、2011 An International Musicological Colloquium to Celebrate to 50th Anniversary of the Foundation of the Budapest Bartók Archives (The University of West Hungary, Szombathely).
4. 「ツィンバロンはいかにして女性の楽器になったのか——19世紀後半のハンガリー市民社会におけるサロンの「ハンガリー化」について」、2011年10月9日、東欧史研究会 2011年度個別研究報告会（東京・学習院女子大学）。

社会活動

国士舘大学文学部非常勤講師
 群馬県立女子大学文学部非常勤講師
 東京藝術大学非常勤講師（2011年4月より）
 NHK文化センター柏校講師
 美学会東部会編集幹事

(3) 外国人教員の活動

ウルリヒ・シュタインフォルト（ビルケント大学（トルコ・アンカラ）教授、ハンブルク大学連携教授）：小田部教授とともに大学院特殊研究を担当（2011年度冬学期）。

(4) 外国人研究員・内地研究員

ウルリヒ・シュタインフォルト（ビルケント大学（トルコ・アンカラ）教授、ハンブルク大学連携教授）、2011年9月1日～2012年3月31日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- 「北野武『HANA-BI』—絵画と自己言及性をめぐって—」
- 「留学と兼常清佐 —洋行前後の音楽論を中心に—」
- 「日本音楽教育におけるスズキメソッドの意義」
- 「童謡考：小学校教育における受容を通して」
- 「R.クラウドにおけるモダニズム批判の射程と限界 —『オリジナリティと反復』を中心として—」
- 「大地の芸術祭—越後妻有アートトリエンナーレ」における新しい美的経験の展開」
- 「メディア時代の＜有名人＞ —石田佐恵子再考—」
- 「広告におけるデザイン —80年代広告表現ブームにおける広告の脱目的化を中心に—」
- 「ミースの住宅をめぐる構造、ガラス、視覚、1927年から1930年まで」
- 「ヴィレッジヴァンガードの消費を読み解く」
- 「人体解剖図の表現とその展開」
- 「新古典主義の歴史画と古代的主題についての考察」
- 「身体運動の美的契機について —スポーツを中心に—」
- 「『悲劇の誕生』における美と快の関係」
- 「月岡芳年の作品における近代的リアリティの獲得」

「《ピーターと狼》の日本における受容」
「デジタル時代における映像メディアの変化 — 「実写」とアニメの交差—」
「現代日本の女性ファッション・メディアにおける<リアル> — 新たな読者モデル「おしゃP」を中心に—」
「J.S バッハ《マタイ受難曲》コラール分析 — 会衆讃美の音楽化、最終コラールに表れる悔悛と希望—」
「土方巽の舞踏における「古層」としての「東北」 — 「なる」肉体をめぐる—」
「チャップリン映画における喜劇と悲劇の融合について — 『街の灯』を例に—」
「小劇場演劇の商業化 — Theatre 劇団子と有川浩『シアター！』との関連において—」
「香港ノワール映画における殺人の美学について」

2011 年度

「長野まゆみの作品のテーマの変容」
「大正期新舞踏運動における創作舞踏と古典舞踏」
「テレビドラマの限界 — 役者の身体の特異性—」
「筆触の概念と現代書道」
「太宰治作品における語りの変容 — 視点論をてがかりとして—」
「デジタル時代におけるポピュラー音楽聴取について」
「自然の美的鑑賞と積極美学 — アレン・カールソンの初期論稿を中心に—」
「スポーツ実践者の美的体験の様相」
「ハワード・ホークス論 — 航空映画から西部劇へ—」
「現代アートのシミュレーションイズム — アンディ・ウォーホルを中心に—」
「妖怪画の美的経験の変容」
「ファニー・ヘンゼルの日曜音楽会 — 演奏形式としての音楽サロン—」
「現代アートにおけるメディア的身体性」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

大熊洋行「カント批判哲学における技巧概念の意義——実践をめぐる思考に即して」(指導教員) 小田部胤久
黒田育世「シューベルト受容の側面：19 世紀英国における「intellectual な楽しみとしての音楽」との関わりを
中心に」(指導教員) 小田部胤久
柴田康太郎「武満徹の映画におけるサウンドデザイン：音楽と効果音の連続性をめぐって」(指導教員) 西村清和
吉成優「デイドロの「理想的モデル」の研究」(指導教員) 小田部胤久

2011 年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

(甲)

伊藤亜紗「身体的機能を開発する装置としての詩 — ポール・ヴァレリーにおける作品の位置づけと身体観」
(主査) 西村清和 (副査) 渡辺裕・小田部胤久・安西信一・塚本昌則

(乙)

西村清和「イメージの修辞学—ことばと形象の交叉」
(主査) 高山守 (副査) 渡辺裕・小田部胤久・田中純・谷川渥

2011 年度

(甲)

天内大樹「分離派建築会の展開 — 「分離」の対象をめぐる 1920 年代日本建築会の論考分析—」
(主査) 小田部胤久 (副査) 西村清和・渡辺裕・藤田彦彦・坂牛卓
村上龍「感性 (sensibilité)」をめぐるベルクソンの思想とその成立の経緯についての研究 — なるもの多
なるものとの関係を軸に—」
(主査) 小田部胤久 (副査) 西村清和・安西信一・鈴木泉・瀧一郎
輪島裕介「戦後日本<大衆>音楽言説史序説」
(主査) 渡辺裕 (副査) 西村清和・安西信一・長木誠司・細川周平

(乙)

なし

08 心理学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1903年に我が国で初めて心理学実験室が設立されて以来の長い歴史を持っており、心理学の基礎的領域における教育と研究を行っている。現在、教授4名、助教1名、日本学術振興会のPD・研究員・研究生・大学院生・学部生ら約80名が心理学研究室に所属している。知覚・注意・記憶・思考などの心理現象を精神物理学的手法・神経科学的手法・認知科学的手法によって実験的に研究している。また、文化認識や科学方法論などについても研究を行っている。毎年、教養学部文科3類や他の科類から約25名の学生が本専修課程に進学する。演習や特殊講義によって心理学に関する幅広い知識を身につけるのみならず、心理学実験演習においてヒトや実験動物を被検体として実験を行い、コンピュータの操作法・データの収集と解析法・実験レポートの作成法などを学んでいる。卒業論文では、教員の指導の下に実験的研究を行い、その成果を取りまとめている。

大学院教育に関しては、本専修課程の教員のみならず、大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系の認知行動科学に所属する心理学系教員の参加を得て、指導体制の充実を図っている。毎年、数名の課程博士（博士（心理学））が誕生している。

本専修課程の教員は、それぞれが関係諸学会（日本心理学会・日本基礎心理学会・日本動物心理学会・日本視覚学会・日本生理学会・日本神経科学学会・日本認知心理学会・日本認知科学会など）に所属して活動している。研究成果は、各専門分野の国際的学会誌に掲載され、公開されている。国内外で開催される学会等に積極的に参加するのみならず、シンポジウム等で特別講演を依頼されることも多い。本学の他研究科や他大学・研究所とも交流があり、共同研究等も活発に行われている。2010年度からは、第一線で活躍する著名な研究者を招いて公開の講演会を毎年数回開催し、アウトリーチならびに研究者と学生の交流促進を図っている。

心理学研究室には認知科学研究室が併置されている。これは、1946年の本学航空研究所の廃止に伴いその航空心理部門が文学部に移管されたもので、当初は能率研究室と称し、心理学研究室の教官1名が兼任し助手1名と共に作業適性や職務分析を中心とした応用心理学の研究を行っていた。1954年に助手の定員割り当てがなくなり、以後、心理学研究室の内部組織として運営されてきた。心理学研究室は、実験心理学を心理学の基礎領域として教育・研究の中心に据えてきたが、やがて周辺科学との学際的交流が深まり、基礎と応用を対立的に捉える考え方は次第に廃れていった。さらに1960年代以降、心理学では情報処理アプローチが興隆し、認知心理学という分野が成立した。この流れの中で心理学は、コンピューター・サイエンス、神経科学、言語学、哲学などと共に認知科学と呼ばれる新たな学際領域を形成し、心理学研究室の教育・研究活動も認知科学と密接な関連を持つようになった。そのため能率研究室は1992年に認知科学研究室と改称され、現在に至っている。心理学研究室に所属する教員は、認知心理学を専門とする2名を含め、全員が認知科学と深い研究上の関連を持っており、認知科学の他領域とも連携をとりながら教育・研究活動を行っている。認知科学研究室の担う役割も大きなものになってきていると言えよう。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

佐藤 隆夫

専門分野 知覚心理学

在職期間 1995年5月～ 大学院人文社会系研究科助教授
1996年12月～現在 同 教授

高野 陽太郎

専門分野 認知心理学

在職期間 1990年4月～ 文学部助教授
2003年4月～現在 大学院人文社会系研究科教授

立花 政夫

専門分野 視覚神経科学

在職期間 1988年10月～ 文学部助教授
1994年1月～ 同 教授
1995年4月～現在 大学院人文社会系研究科教授

横澤 一彦

専門分野 統合的認知の心理学

在職期間 1998年10月～ 大学院人文社会系研究科助教授
2006年4月～現在 同 教授

(2) 助教の活動

瀬山 淳一郎

専門分野 知覚心理学

在職期間 1998年4月～2011年3月

主要業績 Seyama, J., & Nagayama, R. S. (2011). Photorealism aftereffect. *Psychological Research*, 75, 179-187.

新美 亮輔

専門分野 実験心理学

在職期間 2011年4月～現在

主要業績 Saneyoshi, A., Niimi, R., Suetsugu, T., Kaminaga, T., & Yokosawa, K. (2011). Iconic memory and parietofrontal network: fMRI study using temporal integration. *Neuroreport*, 22, 515-519.

Niimi, R., Saneyoshi, A., Abe, R., Kaminaga, T., & Yokosawa, K. (2011). Parietal and frontal object areas underlie perception of object orientation in depth. *Neuroscience Letters*, 496, 35-39.

他機関での講義：武蔵野大学大学院非常勤講師（通信教育部「認知心理学特講」）2010年4月～

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- 「カエル視蓋ニューロンの光刺激依存性応答の解析」
- 「因果認識と基準率無視の関係性」
- 「不安感情が運動知覚に与える影響」
- 「和声進行における旋律知覚に対し声部の違いが与える影響について」
- 「アンカリング効果の思考過程の研究」
- 「ラット網膜における ON 型方向選択性神経節細胞の応答解析」
- 「網膜双極細胞軸索終末部への抑制性シナプス入力の解析」
- 「情報処理方略への気分の効果に状況因が与える影響」
- 「高周波刺激に対する視覚誘発電位の反応」
- 「応報的動機に関係する不適切情報が、量刑判断に及ぼす影響」
- 「距離知覚・大きさ知覚におけるばけ分布の利用」
- 「他視点取得が攻撃語認知に与える影響」
- 「配色嗜好の決定要因の検討」
- 「色残像の見えにおける時間的側面の検討」
- 「基準率錯誤の生じる原因の実験的研究」
- 「両眼視野闘争における知覚意識の生成を決定づける運動座標系」
- 「外国語使用による思考力低下に関する研究—類推的問題解決事態での検討—」
- 「要素運動間の距離が Motion Binding に与える影響」
- 「色残効に対する参照枠の効果」
- 「量刑判断にはたらく応報的動機の自動性に関する実験的検討」
- 「量刑判断にはたらく応報的動機の抑制に関する実験的検討」
- 「手がかりの呈示時間とワーキングメモリ容量が注意分割に及ぼす影響」
- 「ラバーハンド錯覚が温度感覚に与える影響」
- 「運動対象の表象保持に関与する低次運動機構の特性」

2011 年度

- 「周辺視野間提示に於ける仮現運動の検討」
- 「視点依存効果における見えのカテゴリ化の影響」
- 「運動軌跡錯視の見えが運動透明視知覚に及ぼす影響」
- 「複数呈示医療画像における視覚探索特性」
- 「仮名に対する共感覚色の決定要因」
- 「刺激の時間的動機が Crowding 効果に与える影響」
- 「変化の見落としにおける情景文脈の影響」
- 「エピソード記憶における固定化と再固定化の相互作用」
- 「マジックにおける誤誘導の生起要因」
- 「基準率無視と因果推論」
- 「アンカリング効果の生起プロセスを分ける要因の検討」
- 「ぼけの対比がミニチュア効果におよぼす影響」
- 「言語化が空間認知に与える影響について」
- 「鏡映反転 認知プロセスの検証」
- 「ラバーハンド錯覚の生起要因に関する検討」
- 「潜在レベルの応報的動機の活性化が、量刑判断に影響する条件に関する検討」
- 「網膜内網状層における抑制機構の解析」
- 「モナリザ効果における奥行き知覚の影響」
- 「複数顔の視聴覚対呈示における音源定位特性」
- 「キンギョ 網膜神経節細胞の形態と応答特性」
- 「顔認知における相対・絶対的空間周波数の役割」
- 「等確率性仮定が生じない状況における確率判断課題の推論方式の検討」
- 「付加情報による公正世界観の操作が量刑判断に与える影響」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

金谷翔子「視聴覚刺激の認知的整合性が腹話術効果に与える影響」〈指導教員〉横澤一彦

2011 年度

伊藤言「脅威刺激（死の脅威）が価値観や判断に影響を与える過程の心理学的検討」〈指導教員〉高野陽太郎

篠原優「集団で嘘をつく規範が連帯感に及ぼす影響」〈指導教員〉高野陽太郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

(甲)

荒井格「網膜双極細胞ネットワークによる側方情報伝達の解析」

〈主査〉立花政夫 〈副査〉高野陽太郎・佐藤隆夫・岡 良隆・村上郁也

中島亮一「持続的注意時の視覚表象に関する実験心理学的研究」

〈主査〉横澤一彦 〈副査〉佐藤隆夫・立花政夫・高野陽太郎・伊東裕司

松寄直幸「表情知覚における運動の効果に関する研究」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・高野陽太郎・横澤一彦・北崎充晃

植月美希「実験者ペース読文法による日本語文処理の時間特性の検討」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・横澤一彦・伊藤たかね・玉岡賀津雄

(乙)

なし

2011 年度

(甲)

分部利紘「エピソード記憶の検索過程—手がかりと無関連な記憶の活性化と想起—」

〈主査〉高野陽太郎 〈副査〉佐藤隆夫・横澤一彦・太田信夫・伊東裕司

中嶋豊「運動統合に基づく物体の一体感の成立条件」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・高野陽太郎・横澤一彦・本吉 勇

谿雄祐「カフェウォール錯視における空間周波数統合に関する研究」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・高野陽太郎・横澤一彦・竹内龍人

温文「空間知識の学習過程及び個人差に対する心理学的検討」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・横澤一彦・石川徹・北崎充晃

小泉愛「情動的競合処理における個人差の研究」

〈主査〉佐藤隆夫 〈副査〉立花政夫・横澤一彦・長谷川壽一・柏野牧夫

(乙)

なし

09a 日本語日本文学（国語学）

1. 研究室活動の概要

東京大学における本格的な日本語研究は、明治中期、帝国大学文科大学に上田万年が「国語研究室」を開設したのに始まったと言ってよい。1897年に設けられた「国語研究室」は、わが国における研究室制度の始まりと言われ、わが研究室は1997年9月に開設百周年をむかえたのであるが、開設当初は、単に大学内の一研究室という立場にとどまらず、広く日本の言葉の実情を調査し、そのあるべき未来像を研究する国家の研究機関という性格を帯びていた。日本の国語を研究する国家的な機関という性格から「国語研究室」と称したものであって、学問名、専修課程名に対応させて言うなら「国語学研究室」「日本語学研究室」と言ってもよいところを、現在でもあえて「国語研究室」と称しているのは、設立当初のこの事情に由るものである。

教育組織としても、明治初期の和漢文学科、和文学科以来、国文学科、国語国文学専修課程と名前を変えて続けてきたものが、1975年に国語学専修課程と国文学専修課程に分かれた。その後、わが国語研究室、国語学専修課程は、従来の国語学国文学第一講座（国語学担当）のほか、日本語を軸として日本の文化を考える日本語文化講座、日本語による情報伝達のメカニズムを研究する日本語解析講座を加えて、日本語の構造と歴史を多面的、総合的に研究、教育する体制を整えた。

1995年の大学院化への過渡的措置として1994年に文学部の大講座化という組織替えがあり、その際、国文学専修課程とともに「日本語日本文学専修課程」という共通看板を掲げることになったが、それぞれの研究目的、方法の差によって、また学生に課すべき訓練内容の差によって、その後も「国語学」として独立した教育、研究室体制を維持している。なお、大学院の教育組織としては、従来から国文学研究室とともに「日本語日本文学専門分野」を形成している。

国語学の研究分野としては、日本語の言語体系を構成する各領域に対応して、文法論・意味論・語彙論・音韻論・文字論などがあり、言語の広い意味での使用をめぐって、談話分析（文章論）・社会言語学（言語生活論）などがある。また、これらの諸分野の一部または全体を、時間的・空間的な展望において扱う国語史学、方言学がある。また、これらの成果の上に立って、日本語情報処理のための理論的研究や外国人への日本語教育という観点からの研究などもある。

研究組織としては、国文学研究室とともに東京大学国語国文学会を運営し、学会誌『国語と国文学』を広く全国の研究者にも開放して刊行している。国語研究室独自の活動としては『日本語学論集』を刊行し、主として大学院生等の論文を公表している。

また、全国の国語学研究者の学術情報の集積伝達の場として、当研究室には全国のほとんどの研究雑誌のバックナンバーがそろっており、多数の古写本、古刊本とともに、希望者の閲覧に供している。

国際交流の状況としては、現在、大学院生4名、大学院研究生1名、計5名の外国人留学生在本専修課程に在籍しており、日本人大学院生と活発に交流を行っている。また、海外の日本語研究者が2名、文学部外国人研究員として本研究室に在籍し、研究に従事している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

尾上 圭介	教授	日本語文法論	1989年4月～2012年3月
月本 雅幸	教授	日本語史	1992年4月～現在
井島 正博	准教授	日本語文法論	1998年4月～現在
肥爪 周二	准教授	日本語史	2003年4月～現在

(2) 外国人研究員・内地研究員

アルベリッツィ・ヴァレリオ・ルイジ	研究題目：漢文訓読語に関する文体史的研究
（受入教員：月本雅幸）	研究期間：2009年4月～2011年3月

李丞宰（受入教員：月本雅幸）	現職：ソウル大学校教授
	研究題目：古代日韓における漢文訓読の比較研究
	研究期間：2009年9月～2010年8月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「疑問文における「ウ（ヨウ）・ダロウ」の働きについて」

「疑問文の文型に関する研究—文型ごとの意味の広がり注目して—」

2011年度

「平安時代男性貴族の名に関する研究」

「言語的反応要求表現に関する一考察」

「意思に関わる副詞の意味分析」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

なし

2011年度

金昇鉉「文鏡秘府論古訓点本の国語学的研究」〈指導教員〉月本雅幸

田中草大「変体漢文の語彙と文体についての一試論」〈指導教員〉月本雅幸

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

なし

(乙)

鈴木泰「古代日本語時間表現の形態論的研究」

〈主査〉尾上圭介 〈副査〉野村剛史・重藤実・月本雅幸・西村義樹

2011年度

(甲)

なし

(乙)

川村大「古代語ラル形述語文の研究」

〈主査〉尾上圭介 〈副査〉坂原茂・野村剛史・月本雅幸・井島正博

09b 日本語日本文学（国文学）

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、明治20年(1887)和文学科として発足したが、大正8年(1919)に国文学科と改称、昭和38年(1963)に国語国文学専修課程となり、昭和50年(1975)には国語学と国文学に専修課程を分かった。平成6年(1994)、再び日本語日本文学専修課程となり、今日に至っている。ただし、実際の教育研究活動は、国語学とは独立しておこなっている。長い歴史のなかで学界に多大の貢献を成し遂げ、広い分野を活動範囲にしつつ、数多くの人材を送り出している。平成23年(2011)4月現在の教員数は教授5名・助教1名であるが、学外から毎年非常勤講師を招聘して開講科目の充実をはかっている。

教養学部からの進学は、年度によって変化はあるがおおよそ15～30名の範囲におさまるのが通例である。専攻は様々な時代・ジャンルにわたっており、それぞれの関心に従って学習・研究を行っているが、同時に個別の時代やジャンルにとらわれない、広い展望を持つことを心がけるよう指導している。

日常の研究教育活動のほか、年に一度、教員と大学院学生・学部学生がともに参加する研究調査旅行を行い、資料の実地調査に努めている。

学会としては、国文学科時代以来の卒業生を中心に組織されている東京大学国語国文学会があり、毎年、評議員会と大会の開催、会報の発行、月刊研究誌「国語と国文学」の編集などの事業を国語研究室と共同で行なっている。また研究室の研究誌「東京大学国文学論集」を毎年刊行し、その内容はUTリポジトリで公開している。

現在、国文学研究室には、大学院学生46名(内、外国人留学生13名)・学部学生52名(内、外国人留学生2名)が在籍し、その他、大学院研究生11名(内、外国人留学生10名)・日本学術振興会特別研究員1名が在籍している。また多くの外国人研究員を受け入れ、教員が海外の学会の招待講演を引き受けるなど、国際交流に積極的に協力している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

多田 一臣	教授	日本古代文学
長島 弘明	教授	日本近世文学
藤原 克己	教授	平安朝文学
渡部 泰明	教授	日本中世文学・和歌文学
安藤 宏	教授	日本近代文学

(2) 助教の活動

原田 敦史

在職期間 2010年4月～2012年3月

研究領域 日本中世文学

主要業績

「屋代本『平家物語』における維盛関連記事の形成」、東京大学国文学論集、第6号、31-48頁、2011.3

「『平家物語』語り本の形成—巻六の叙述を中心に—」、国語と国文学、第88巻第6号、31-48頁、2011.6

「屋代本『平家物語』(大原御幸)の生成」、平家物語の多角的研究、ひつじ書房、139-155頁、2011.11

学外活動 青山学院大学非常勤講師(2010・2011年度)

(3) 内地研修員・外国人研究員

内地研修員

なし

外国人研究員

2010年度

李 宇玲(受入教員:藤原克己) 中国 同済大学教員

エヴリン・オドリ(受入教員:長島弘明) フランス

グエン・ティ・ハイン・トゥック(受入教員:長島弘明) ベトナム ホーチミン市外国語情報科学大学
教員

2011年度

エドアルド・ジェルリーニ（受入教員：藤原克巳） イタリア

李 昌秀（受入教員：長島弘明） 韓国 慶熙大学教員

日本学術振興会特別研究員

2010年度

岡田 万里子（受入教員：長島弘明） RPD

一戸 渉（受入教員：長島弘明） PD

2011年度

岡田 万里子（受入教員：長島弘明） RPD

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「宇野浩二「蔵の中」論 不能のロマンス、ロマンスの不能」

「『三四郎』論」

「中勘助「菩提樹の蔭」論」

「源氏物語—薫大将論」

「江島其磧『世間娘気質』について」

「内田百閒『冥途』の研究」

「太宰治『富嶽百景』論」

「賀陽院水閣歌合の和歌表現」

「和歌の擬人法」

「森鷗外の国体観」

「古代詩歌論」

「太宰治と聖書」

「徒然草論」

「太宰治「正義と微笑」におけるキリスト教」

「芥川龍之介『偷盗』の構造」

「王朝和歌史における『古今和歌六帖』」

「徒然草と清貧」

「平家物語論」

「枕草子論」

「谷崎潤一郎論—『文章読本』を手がかりに—」

「遠藤周作論—「病院もの」における神の存在性を巡って—」

「八代集における冬の月の和歌について」

2011年度

「志賀直哉研究～「暗夜行路」を中心に」

「崇徳院歌壇における古典撰取表現—古今集を中心に—」

「鴨長明論」

「菊池寛の小説における仇討の意義—『仇討三態』を中心に—」

「『東関紀行』に見える中世的精神」

「『豊饒の海』と三島由紀夫の人生」

「源氏物語の翻訳研究～葵巻を題材に～」

「『平家物語』における女性の出家とその意味」

「『堤中納言物語』研究—「虫めづる姫君」を中心に—」

「女坂論」

「山東京伝と白話小説—『忠臣水滸伝』を中心に—」

「川端康成『眠れる美女』論」

「椎名麟三論—手記形式の効果」

「ちりめん本の誕生背景及びその外国語訳について」
「葛西善蔵「哀しき父」から「子をつれて」まで」
「源氏物語第二部における光源氏と紫上」
「西鶴の主題—町人物を中心に」
「『晩年』論」
「源氏物語における浮舟の悲劇性について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

山川陽子「歌舞伎における清玄桜姫物研究—『桜姫東文章』と『清水清玄庵室曙』を中心に—」〈指導教員〉長島弘明
渋谷百合絵「宮澤賢治《童話》論」〈指導教員〉安藤宏
東海林壽朗「『徒然草』の研究」〈指導教員〉渡部泰明
長濱祥子「阿仏尼の研究」〈指導教員〉渡部泰明
山崎健太「『仁徳記』歌謡論—古事記歌謡論への足掛りとして—」〈指導教員〉多田一臣
佐賀一哲「遠藤周作『スキヤンダル』論—背信行為としての私小説—」〈指導教員〉安藤宏
日置貴之「明治期上方歌舞伎の研究—大阪劇壇と東京劇壇の交流を中心に—」〈指導教員〉長島弘明
金美眞「柳亭種彦の合巻と考証趣味—文化・文政期を中心に—」〈指導教員〉長島弘明
洪晟準「馬琴史伝物読本の研究—摸索期の作品を中心に—」〈指導教員〉長島弘明

2011年度

伊佐治嘉章「堀辰雄研究—初期作品を中心に—」〈指導教員〉安藤宏
板野みずえ「藤原良経論」〈指導教員〉渡部泰明
岡本茜「源氏物語試論—結婚における愛情と処遇をめぐって—」〈指導教員〉藤原克巳
柴田恵里「藤原俊成の『法華経二十八品歌』について」〈指導教員〉渡部泰明
長井勇磨「『古事記』神名の諸相と世界観」〈指導教員〉多田一臣
藤田佑「三島由紀夫研究—小説の方法—」〈指導教員〉安藤宏
丸山薫代「源氏物語正篇の構造—時間の分析を手がかりに—」〈指導教員〉藤原克巳
石井悠加「亀山殿文学史論」〈指導教員〉渡部泰明
谷正俊「香川景樹研究—注釈と歌論を中心に—」〈指導教員〉長島弘明

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

原田敦史「『平家物語』の構造と展開」
〈主査〉渡部泰明・〈副査〉多田一臣・長島弘明・藤原克巳・松尾葦江
塩沢一平「田辺福麻呂の研究」
〈主査〉多田一臣〈副査〉長島弘明・渡部泰明・月本雅幸・森朝男
梶尾文武「三島由紀夫論—イロニーとしての文体—」
〈主査〉安藤宏〈副査〉多田一臣・長島弘明・渡部泰明・竹内整一
木下華子「鴨長明の研究」
〈主査〉渡部泰明〈副査〉多田一臣・藤原克巳・安藤宏・小島孝之
神田祥子「夏目漱石研究—初期「文学」概念の可能性—」
〈主査〉安藤宏〈副査〉藤原克巳・長島弘明・井島正博・松村友視
名木橋忠大「立原道造研究」
〈主査〉安藤宏〈副査〉塚本昌則・藤原克巳・渡部泰明・長島弘明
合山林太郎「幕末・明治期の漢文学の研究」
〈主査〉長島弘明〈副査〉多田一臣・藤原克巳・安藤宏・ロバート・キャンベル
高柳（今井）祐子「中世和歌の史的研究」
〈主査〉渡部泰明〈副査〉藤原克巳・安藤宏・肥爪周二・田島公

(乙)

村尾誠一「中世和歌史論 新古今和歌集以後」
〈主査〉渡部泰明〈副査〉長島弘明・藤原克巳・肥爪周二・市川裕

板坂則子「曲亭馬琴の世界 戯作とその周縁」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉多田一臣・藤原克巳・安藤宏・古井戸秀夫

2011 年度

(甲)

高野奈未「賀茂真淵の研究」

〈主査〉長島弘明 〈副査〉多田一臣・藤原克巳・渡部泰明・菅野寛明

(乙)

矢島泉（筆名 矢嶋泉）「古事記の文字世界」

〈主査〉多田一臣 〈副査〉藤原克巳・渡部泰明・佐藤信・沖森卓也

高田信敬「源氏物語考証稿」

〈主査〉藤原克巳 〈副査〉多田一臣・長島弘明・月本雅幸・池田和臣

三角洋一「宇治十帖と仏教」

〈主査〉藤原克巳 〈副査〉多田一臣・渡部泰明・長島弘明・高田祐彦

10 日本史学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1889年、帝国大学文科大学に国史科がおかれて以来の長い歴史をもつ。文献史料を中心とする実証的学風を伝統としてきたが、近来では、これを基礎としながらも、歴史学の新しい動向を積極的にうけとめ、とりあつかう史料の範囲を意識的に拡張し、隣接諸分野—考古学・民俗学・経済学・法制史・政治学・社会学・美術史・国文学・建築史など—の成果を旺盛にとりいれて、多彩な研究方法の開拓を試みている。1994年に名称を「国史学専修課程」から現行のものに改めた。

現在の教員数は、教授5名、准教授2名、助教1名で、古代・中世・近世・近現代のそれぞれに、原則として2名ずつの教員（助教を除く）を配置してきた。それに加え、多彩な非常勤講師の方々のご協力をえて、日本史の諸時代・諸分野を広くカバーし、教育・研究にとりくんでいる。また、大学院人文社会系研究科日本文化研究専攻・日本史コースにおいては、史料編纂所をはじめ、大学院総合文化研究科、経済学研究科、法学政治学研究科の教員のご協力をえて、多様なカリキュラムを編成しており、多分野交流演習等にも参加している。なお、急増する研究室事務を処理するため、副手2名を雇用している。

教養学部からの進学生は毎年25名内外で、卒業時には約3分の2が就職し、約3分の1が大学院に進学する。学生や大学院生が専攻する時代・分野は、各自の関心に応じて自由に選ぶことができる。

本研究室は、独自に『東京大学日本史学研究叢書』（1994年創刊、6冊まで刊行）と『東京大学日本史学研究室紀要』（1996年創刊、現在16号まで刊行）を企画・出版している。『研究叢書』は、課程博士論文の成果をひろく公表するものであり、『研究室紀要』は、おもに研究室の教員・大学院生による調査・研究成果の発表の場となっている。

本研究室が、歴史文化学科の他の研究室とともに担っている学会として、史学会がある。教員の何人かは、理事として学会運営に参加し、編集委員として『史学雑誌』の編集に携わっている。また、毎年11月の史学会大会において、日本史関係のシンポジウムや各時代別部会を組織するなどの活動を行っている。

近年、日本史学の専攻を希望する海外からの留学生が増加している。2011年度においては、韓国・中国を中心に、大学院に9名、研究生に4名が在籍していた。

最後に、研究室におけるハラスメントを許さない体制づくりに、意識的にとりくんでいることを強調しておきたい。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

吉田伸之 教授	日本近世史
村井章介 教授	日本中世史
佐藤 信 教授	日本古代史
野島（加藤）陽子 教授	近代日本政治史
大津 透 教授	日本古代史
鈴木 淳 准教授	日本近代史
牧原 成征 准教授	日本近世史

(2) 助教の活動

有富 純也

研究領域 日本古代史・宗教史

主要業績 「疫病と古代国家」（『歴史評論』728）

「平安時代における清涼殿の出入方法」（武光誠編『古代国家と天皇』同成社）

「軍団と郡家」（『明治大学古代学研究所紀要』15）

「近世後期の信濃国一宮神楽殿再建」（『清内路—その歴史と文化』3）など

(3) 外国人研究員・内地研究員

(1) 人文社会系研究科研究員

2010年度 木下 聡

2011年度 若月 剛史

戸森 麻衣子

(2)特別研究員

2010・2011年度 官田 光史

2011年度 坂口 正彦

(3)外国人特別研究員

2011年度 オラー・チャバ

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- 「近世信濃における煙草生産とその流通―信州清内路村を中心に―」
- 「明治初期の東京における警察制度～番人から巡査へ～」
- 「日清戦争におけるコレラ流行」
- 「明治20-30年代東京市における区会と市会」
- 「儒教思想の受容にみる古代日本文化の特質」
- 「岩倉具視と能楽」
- 「東京市における方面委員制度」
- 「春日社信仰の諸相について」
- 「関東祈祷所の研究」
- 「戦国期都市の様相と楽市楽座」
- 「足利直義裁許状の事書について」
- 「「三井のドル買い」についての考察」
- 「一九三〇年代における思想犯保護事業」
- 「林遠里の稲作理論の生成過程とその特徴―扁農から第二回内国勸業博覧会までを中心に―」
- 「町村制下の町村財政と協議費」
- 「初期神奈川県会と三部経済性」
- 「一休宗純の思想的展開―大応派との関係を巡って―」
- 「戦国後期の島津氏権力」
- 「近世後期、多摩川下流の川普請と周辺農村」
- 「府官公廨について」
- 「近世江戸の「道」と支配システム」
- 「戦国期大内氏と中央政権」
- 「梅北国兼の反乱に関する一考察」

2011年度

- 「近世後期能楽師とその存立状況」
- 「近世下伊那の木地師と村々」
- 「1900年恐慌時の金利の変動について」
- 「平安時代の施行にみる非人の源流」
- 「第一次大戦後の恐慌期における麦酒産業」
- 「昭和初期における財界の形成」
- 「戦国期安東氏の性格と活動―周辺地域との交流を中心に―」
- 「日本古代の家産と国家―光明子の経済基盤の検討―」
- 「埼玉県における地方銀行の役割とその変化」
- 「小早川氏の「氏寺」」
- 「日光山と鎌倉幕府」
- 「八世紀における政変と軍事力」
- 「江戸の常湊における請負制度―神田川常湊を題材として―」
- 「東京府の風致協会」
- 「中世後期における京都法華宗の諸動向」
- 「古代国家における神火―地方官の考察をもとに―」

「慶応四年の「幕府」と「海軍」」
「セミナーヨの教育活動に関する考察」
「20世紀初頭の台湾銀行」
「戦国大名北条氏伊豆郡代清水氏の研究—戦国期の南伊豆—」
「聖武天皇の遷都と複都制」
「村内小集団と近世の村運営」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

西本哲也「地方官人からみた古代官僚制—律令郡司制度の検討から—」〈指導教員〉佐藤信
浅尾拓哉「九州探題と初期室町幕府権力」〈指導教員〉村井章介
柿沼亮介「日本古代の外交と対外交—八世紀日羅関係と古代国家—」〈指導教員〉佐藤信
国分航士「明治立憲制の展開と大正政治史」〈指導教員〉野島陽子
林友里江「平安時代の政務と実務官人」〈指導教員〉佐藤信
山田俊幸「尾張藩諸廻船と熱田湊」〈指導教員〉吉田伸之
渡邊宏明「大正末期の政党政治—普通選挙法制定前後における「党組織」の変容過程」〈指導教員〉野島陽子
朴完「第一次世界大戦後の田中義一の陸軍軍政—軍民関係を中心として」〈指導教員〉野島陽子

2011年度

小野歩実「近世における幕領預所の支配と地域社会」〈指導教員〉吉田伸之
角和裕子「彦根藩世田谷領と江戸屋敷」〈指導教員〉吉田伸之
團藤充己「台湾出兵における新聞報道—政論新聞化の起点として—」〈指導教員〉野島陽子
中西啓太「日露戦後地方行政の変革と実態—町村条例と監督行政の分析から—」〈指導教員〉鈴木淳
樋口真魚「連盟脱退後における多国間交渉—有田外交への注目—」〈指導教員〉野島陽子
堀川康史「室町幕府体制の展開と在地社会」〈指導教員〉村井章介
宮崎正博「中近世移行期における日本海海運と若狭湾～初期豪商道川氏と組屋氏を中心に～」〈指導教員〉村井章介
曹承美「十八世紀後期青蓮院名目金貸付と幕府経済政策」〈指導教員〉吉田伸之

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

小倉真紀子「日本古代における田制と財政の研究」
〈主査〉佐藤信 〈副査〉多田一臣・早乙女雅博・山口英男・加藤友康
小林延人「明治維新期の貨幣経済」
〈主査〉鈴木淳 〈副査〉野島陽子・吉田伸之・井川克彦・神山恒雄

(乙)

西田友広「中世の検断と国制」
〈主査〉村井章介 〈副査〉小島毅・近藤成一・桜井英治・五味文彦

2011年度

(甲)

佐藤雄基「日本中世初期の文書機能と訴訟の研究」
〈主査〉村井章介 〈副査〉新田一郎・久留島典子・近藤成一・五味文彦
呉座勇一「日本中世の地域社会における集団統合原理の研究」
〈主査〉村井章介 〈副査〉深澤克己・桜井英治・久留島典子・榎原雅治
吉永匡史「律令軍事構造の研究」
〈主査〉大津透 〈副査〉佐藤信・橋場弦・佐川英治・榎本淳一
竹ノ内雅人「近世の神社と都市社会」
〈主査〉吉田伸之 〈副査〉牧原成征・伊藤毅・吉田ゆり子・岩淵令治
三ツ松誠「維新时期国学者の思想史的研究」
〈主査〉吉田伸之 〈副査〉牧原成征・島蘭進・小野将・宮地正人
彭浩(PENG HAO)「近世日清通商関係の研究」
〈主査〉吉田伸之 〈副査〉牧原成征・松井洋子・岩井茂樹・藤田寛

(乙)

浅見雅一「キリシタン時代の偶像崇拜」

〈主査〉村井章介 〈副査〉黒住真・山本博文・神田千里・川村信三

村瀬信一「明治立憲制と内閣」

〈主査〉野島(加藤)陽子 〈副査〉鳥海靖・鈴木淳・広瀬順皓・坂本一登

大隅清陽「律令官制と礼秩序の研究」

〈主査〉大津透 〈副査〉佐藤信・小島毅・坂上康俊・李成市

1 1 中国語中国文学

1. 研究室活動の概要

中国語中国文学研究室（通称、中文研究室）は、1877年東京大学設立に際し創設された和漢文学科に始まる。その後、和漢両文学の分離などを経て、1904年漢学科が支那哲学、支那文学に分かれた。途中一時期支那哲学支那文学科として合併された時期はあるものの、哲学科、文学科が独立の学科となった時点から数えても、今日まで100年を越す歴史をもっている。

研究領域は、中国語学と中国文学の2分野に大別され、さらに、中国語学は古漢語（古典中国語）と現代中国語、中国文学は古典文学と近現代文学の領域にそれぞれ分かれる。語学の研究対象には、文字学、音韻学、意味論、文法論、語用論などが含まれ、文学の研究対象には詩詞、散文、小説、演劇のほか、台湾文学、香港文学、中国の少数民族文学、さらに最近では映画、テレビ・ドラマなどが含まれる。ほぼ3000年の間に作られたすべての言語テキストが研究の対象である。教員数は、教授3名、准教授1名、助教1名であるが、大学院人文社会系研究科における中国語中国文学専門分野においては、東洋文化研究所の教員2名が教育に参加している。学生数は、学部学生5名、大学院修士課程13名、博士課程20名、研究生1名で多様な研究テーマに取り組んでいる。近年留学生の数も増加し、上記のうち中国大陆からの留学生11名、台湾からの留学生5名、合計16名にのぼっている。留学生の増加は、授業のあり方にも影響を与え、それぞれに異なる文化的背景を持った学生が自由に意見を交換しつつ、ともに学ぶ環境が実現している。

国際交流は極めて盛んで、20数年来、専任の外国人教員として北京大学・復旦大学などから著名な学者を迎え、中国語のみによる授業が行われてきた。日本人学生の中国・台湾・香港・シンガポール・アメリカへの留学も多く、ほとんどの学生が中国政府奨学金による長期の留学や私費による短期留学を経験している。教員も短期長期で中国語圏のみならず韓国、欧米へ出向き、調査研究や学会活動を行っている。諸外国からも毎年多くの訪問客を迎えるほか、常に数名の外国人研究員が滞在し、様々な研究に従事している。研究室では、これら外国からの客人による講演や研究報告がしばしば催され、学生との交流が活発に行われている。

また、海外から多くの研究者を招き、国際シンポジウムやワークショップを開催することも少なくない。最近の主要な催しに国際ワークショップ「東アジアにおける魯迅「阿Q」像の系譜」ワークショップ（2010年12月2-4日、韓国ソウル市・東国大学中文系と共催、2011年17-19日台湾台北市・台湾大学台湾文学研究所と共催）などがある。

中文研究室では、1998年に研究室紀要を創刊した。そこには教員・学生による最新の研究成果とともに、留学生を交えた共同研究の報告や、外国人研究者との交流の記録が掲載されている。紀要は2011年度第14号をUT Repositoryで公開している（<http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#12-0>）。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

戸倉英美教授（中国古典詩、中国古典小説、中国古典文学理論）

藤井省三教授（中国近代文学、台湾・香港文学、日中比較文学）

木村英樹教授（現代中国語文法論・意味論）

大西克也准教授（中国古典文法、文字学）

大野公賀助教（2009年4月～2010年9月。東大東洋文化研究所准教授として転出）

前田真砂美助教（2011年4月～現在）

(2) 助教の活動

大野公賀

在職期間：2009年4月～2010年9月

研究領域：中国現代文学

前田真砂美

在職期間：2011年4月～現在

研究領域：現代中国語学

当該期間の主要業績

論文：「副詞“更”の意味—さらに>の含意をめぐって」、『中国語学』257号、127-146頁、2010.11

「比字句」における“還”と“更”―「差」と「たとえ」の表現―、『東京大学中国語中国文学研究室紀要』、第14号、118-134頁、2011.11

(3) 外国人教員の活動

常森（中国・北京大学中文系副教授）

在職期間：2009年10月～2011年9月

研究領域：中国古典文学

当該期間の主要業績

論文：「論楚辞文化研究の問題：以蕭兵〈楚辞的文化破訳〉為考查中心」、『中国詩歌研究』第6輯、中華書局、2010.5

「簡帛〈五行〉篇与〈尚書〉之学」、香港中文大学中国語言及文学系、中国文化研究所中国古籍研究中心主編『先秦兩漢古籍國際學術研討會論文集』、社会科学文献出版社、2011.1

「中国寓言研究反思及傳統寓言視野」、『文学遺產』第1期、2011.1

「論屈原詩歌的比体芸術」、『北京大学学報(哲学社会科学版)』第5期、2011.9（《高等学校文学科学術文摘》第6期、上海師範大学、2011.11）

共著「論《詩經原始》在《詩經》学史上的進展及其保守性」、『學術交流』第8期、2011.8

当該期間の教育活動：

2010年

学部講義「先秦諸子研究」（通年4単位）

学部演習「中国語文表現実践」（通年4単位）

大学院講義「學術中国語文実践」（通年4単位）

大学院演習「屈原及其詩歌研究」（通年4単位）

2011年前期

学部講義「先秦諸子研究」（前期2単位）

学部演習「中国語文表現実践」（前期2単位）

大学院講義「學術中国語文実践」（前期2単位）

大学院演習「『詩經』学的核心問題」（前期2単位）

(4) 外国人研究員・内地研究員

Faye Kleeman：コロラド大学副教授（アメリカ）

研究題目—日台比較文学研究

研究期間—2009年9月1日～2010年7月31日

吳真：南海大学中文系専任講師（中国）

研究題目—道教儀礼と明清小説

研究期間—2009年11月30日～2011年11月29日

張明敏：清雲科技大学助理教授（台湾）

研究題目—台湾における村上春樹と吉本バナーの「文化翻訳」的受容

研究期間—2010年7月2日～2010年7月15日

王昇遠：上海師範大学外国語学院講師（中国）

研究題目—中日戦争期における日本知識人の北京体験

研究期間—2010年9月1日～2011年8月31日

Chan Waikueng（陳 偉強）：香港浸会大学中文系副教授（オーストラリア）

研究題目—初期道教經典に対する文学的研究

研究題目—2010年7月13日～2010年7月26日

葉長海：上海戯劇学院教授（中国）

研究題目—日本における中国戯曲史研究の歴史と現状に関する調査研究

研究期間—2011年1月11日～2011年1月24日

敖玉敏：上海東華大学講師（中国）

研究題目—元雜劇「竇娥冤」の研究

研究期間—2011年9月1日～2012年8月31日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「蘇軾の自称表現」

2011年度

「『聊齋志異』研究—狐妖と人間の関係について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

吉原小百合「中国語の名詞述語文“NP了”構文の意味と構造」〈指導教員〉木村英樹

笠見弥生「三言」「二拍」における道教〈指導教員〉大木康

佐高春音「『水滸傳』における人物の形容表現について」〈指導教員〉大木康

2011年度

八木はるな「映像による白先勇文学再創造—35年後の「孤恋花」、ポスト民主化の台湾で—」〈指導教員〉藤井省三

徐子怡「中国における「村上チルドレン」及び「村上春樹ファッション」～「70後」「80後」作家群・書き込みサイト読者を中心に～」〈指導教員〉藤井省三

田家綾「侯孝賢映画における空間イデオロギーの再構築」〈指導教員〉藤井省三

楊冠穹「「八〇後」と現代中国出版市場の変容～韓寒を中心に」〈指導教員〉藤井省三

白石将人「渋川春海の分野説に就いて」〈指導教員〉大西克也

武井遥香「中国古典小説における女性の「侠」の変遷について—唐代から明代まで—」〈指導教員〉戸倉英美

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

林桂如(LIN KUEI JO)「余象斗の小説と日用類書」

〈主査〉大木康 〈副査〉大西克也・尾崎文昭・高見澤磨・横手裕

田中智行「『金瓶梅』の創作手法論的研究」

〈主査〉大木康 〈副査〉戸倉英美・尾崎文昭・浦一章・小松謙

(乙)

なし

2011年度

(甲)

王俊文(WANG JUNWEN)「武田泰淳における中国—「阿Q」と「秋瑾」の系譜を中心として—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉安藤宏・尾崎文昭・伊藤徳也・長堀祐造

王姿雯(WANG TZU-WEN)「日本統治期日台文学交流史の研究—佐藤春夫・葉山嘉樹から張文環・翁鬧まで—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉河原功・山口守・垂水千恵・星名宏修

白井澄世「近代中国におけるロシア文学の受容—李大釗・魯迅・瞿秋白ら五四期知識人を中心に—」

〈主査〉藤井省三 〈副査〉沼野充義・尾崎文昭・伊藤徳也・長堀祐造

(乙)

なし

1 2 東洋史学

1. 研究室活動の概要

1904年に漢学科から独立した支那史学科は中国以外の東洋も研究対象とする実情にあわせて、1910年に「東洋史学科」と改称された。支那史学科の時代から数えれば、本専修課程は100年以上の歴史をもつ。当初は中国およびその周辺の西域・北アジア史が中心であったが、次第にその対象は東南アジア、南アジア、西アジア、中央アジアに広がっている。現在（2010年度）本専修課程の授業を担当するのは、教授2名・准教授3名・助教1名と複数の非常勤講師であり、東は中国から東南アジア・インドをへて西は北アフリカに至る広い範囲をカバーしている。

本研究室の教員は、1995年4月の大学院部局化により、東アジアコース、南アジア・東南アジア・仏教コース、西アジア・イスラム学コース、の三コースに分かれ、それぞれの「歴史社会」専門分野へと再編されたが、より広い視野でのアジア研究者の育成を目指し、2009年に「アジア史」として歴史部門の再再編がなされた。現在では、韓国朝鮮文化研究専攻、東洋文化研究所、総合文化研究科等に所属する教員の協力を得て、多彩なカリキュラムの編成を行っている。

各教員による通常の研究・教育活動のほか、研究室全体として関わっている活動としては、史学会の運営があげられる。歴史文化学科の他専修課程と共に、理事として運営に参加し、『史学雑誌』その他の出版物の編集にたずさわるほか、史学大会においてアジア史関係のシンポジウムを組織するなどの活動を行っている。

他には、東洋学・アジア研究連絡研究会議、東方学会や東洋文庫のように広域かつ多分野にわたる学会・研究所での活動にたずさわり、また個別적으로는、中国社会文化学会、南アジア学会、日本オリエント学会、日本中東学会、内陸アジア史学会をはじめとする諸学会に加わり、それらの運営で中心的な役割を果たしている。

本研究室の特色のひとつは、留学生の存在であり、学生レベルの国際交流が自然な形で行われている。また、大学院博士課程の学生は、殆どが留学中ないしは長期の留学経験者であることも重要な特色であろう。個々の教員は、様々な形で海外の研究者と密接な関係を持ちながら研究交流をおこなっており、研究室は狭義の歴史研究にとどまらないアジア理解の場として、活況を呈している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

- 教授 小松 久男（中央アジア史）（1995年～現在）
- 教授 水島 司（南アジア史）（1997年10月～現在）
- 准教授 吉澤 誠一郎（中国近現代史）（2001年4月～現在）
- 准教授 大稔 哲也（西アジア史）（2007年4月～現在）
- 准教授 佐川 英治（中国古代史）（2010年4月～現在）

(2) 助教の活動

助教 北川 香子

在職期間 2010年4月～現在

専門分野 東南アジア史

主要業績

論文

「スロック・チャムカーの人と地図—フランス国立海外公文書センター所蔵文書INDO-RSC-00271の分析」、『東南アジア—歴史と文化』、39、86-108頁、2010.6

「ナーガとインドラーカンボジア王朝年代記「伝説部分」、『南方文化』、37、183-212頁、2010.12

「コムポン・チャームの賭博事件—プノム・ペン国立公文書館所蔵文書No. 9454の分析」、『東南アジア—歴史と文化—』、40、145-164頁、2011.6

他機関での講義等

非常勤講師、立教大学、「史学講義」、2010.4～2010.9

非常勤講師、学習院大学、「東洋史特殊講義」、2010.4～2010.9

非常勤講師、学習院大学、「東洋史特殊講義」、2011.4～2011.9

非常勤講師、法政大学、「東南アジアの文化」、2011.10～2012.3

(3) 外国人研究員・内地研究員

バフティヤール・ババジヤノフ Bakhtiyar Babadjanov (ウズベキスタン) 2009年11月5日～2010年4月30日
易青 (中国) 2011年9月～2013年8月
呂文利 (中国) 2011年10月～2012年9月
アフタンディル・エルキノフ Aftandil Erkinov (ウズベキスタン) 2011年11月2日～2011年12月30日

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「商鞅変法と阡陌について」
「大正期、台湾における先住民政策」
「前漢時代の経済政策」
「ガダル運動の国際的展開に関する一考察—日本外務省記録を中心に」
「満州国における農業—農事協同組合運動の勃興の可能性—」
「中華人民国臨時約法と袁世凱期の政治」
「ソビエト期中央アジアにおける工業政策—1920～30年代ウズベキスタンの綿工業」
「上海における五四運動—人々の職業と参加の在り方の関係について」
「唐王朝・皇后不在の時代」
「1930年代、晏陽初による郷村建設実験」
「後期マムルーク朝カイロにおける隊商宿」
「雑誌『中国婦女』にみる戦国中国の家庭生活」
「16世紀エルサレムにおける、諸宗教信徒の共存に関する考察」
「黒龍江オイラートを中心に見た清朝の多民族統治」

2011年度

「清朝における選秀女制度」
「阮朝における手工業に対する税制と統制—嘉隆、明命帝期を中心に—」
「鄭阮政権と清朝」
「カザフ人の反乱と草原社会—ケネサルの反乱と1916年反乱を通して—」
「黄帝に見る『史記』の思想」
「回教研究會機関誌『回教』に見る日本人ムスリム川村狂堂についての—考察—戦前日本におけるイスラーム研究史批判の観点から—」
「印ソ関係—71年平和友好援助条約を中心に—」
「両大戦間期におけるインドの企業」
「東学思想の中のナショナリズム」
「満州国初頭歴史教育に見られる国家像」
「百済の対倭関係と南方領域の変遷—五世紀後半を中心に—」
「康有為の金融政策論—「理財救国論」を中心に—」
「インド鉄鋼業と保護政策の関連性」
「新経済政策前後のインド・ケーララ州における雇用機会と教育水準の相関について」
「朝貢品目の変遷に見える琉清関係について—『歴代宝案』を中心に—」
「姦通殺人・傷害事件における清律適用の実態」
「独立前マドラス州政府の綿業政策—コインバトルでの綿業と関連して—」
「日中戦争初期における国民政府の農業政策—奥地における食料増産政策を中心に—」
「婚姻関係から見る唐代前半社会における弘農楊氏」
「劉氏政権における君臣関係」
「孫呉王権と江南文化—祥瑞の分析を中心に—」
「北宋初期の市舶制度と専売制」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

植田暁「フェルガナ地方のクルグズ遊牧民と1916年反乱」〈指導教員〉小松久男
久保茉莉子「1920年代・1930年代の中国における刑法学」〈指導教員〉吉澤誠一郎

2011年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

豊岡康史「清代中期の対外政策決定過程とその叙法—乾隆・嘉慶期の海賊問題を中心に—」
〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉六反田豊・黒田明伸・松原健太郎・岸本美緒
加島潤「中国社会主義経済体制における地方政府と企業—上海市を事例として」
〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉田嶋俊雄・黒田明伸・田原史起・奥村哲
陳永福 (CHEN Yongfu) 「明末清初における党争と文社—江南太倉州太原王氏を中心に—」
〈主査〉吉澤誠一郎 〈副査〉小島毅・佐川英治・黒田明伸・岸本美緒
澤井一彰「16世紀後半の東地中海世界における穀物問題とオスマン社会—イスタンブルへの食糧供給を中心に—」
〈主査〉鈴木董 〈副査〉小松久男・深澤克己・羽田正・林佳世子
鈴木英明「19世紀インド洋西海域世界と「近代」—奴隷交易に携わる人々の変容—」
〈主査〉羽田正 〈副査〉大稔哲也・薮勇造・後藤春美・森山工

(乙)

なし

2011年度

(甲)

村村史穂「計画経済期中国における食糧政策の展開」
〈主査〉黒田明伸 〈副査〉田嶋俊雄・高見澤磨・佐川英治・田原史起
村上正和「明清期中国における演劇と社会—演劇政策の展開と社会関係—」
〈主査〉黒田明伸 〈副査〉大木康・佐川英治・吉澤誠一郎・岸本美緒
富永泰代「カルティニの虚像と実像—1987年編カルティニ書簡集の研究—」
〈主査〉古田元夫 〈副査〉加納啓良・水島司・桜井由躬雄・鈴木恒之
佐々木紳「近代オスマン帝国の立憲運動と議会論—ナームク・ケマルと新オスマン人運動—」
〈主査〉小松久男 〈副査〉大稔哲也・吉澤誠一郎・鈴木董・新井政美
長谷部圭彦「近代オスマン帝国における教育改革—教育行政と学校教育—」
〈主査〉鈴木董 〈副査〉小松久男・羽田正・江川ひかり・新保教子
塩谷哲史「中央アジア灌漑史研究序説—ラウザン運河とヒヴァ・ハン国の興亡—」
〈主査〉小松久男 〈副査〉石井規衛・吉澤誠一郎・羽田正・堀川徹

(乙)

村上衛「近代福建人世界の変容—社会・経済制度の再編とイギリス・清朝」
〈主査〉黒田明伸 〈副査〉水島司・安富歩・吉澤誠一郎・岸本美緒

1 3 中国思想文化学

1. 研究室活動の概要

中国思想文化学専修課程の学科としての淵源は、明治 10 年の本学の創立時にまでさかのぼることができる。専修課程としては、当初の「支那哲学」から、「中国哲学」、「中国思想文化学」と 2 度の名称変更を経て現在に至っている。平成 7 年に大学院が部局化されると、人文社会系研究科の「アジア文化研究」専攻「東アジア」コース「東アジア思想文化」専門分野と一体のものとして、文学部の中国思想文化学研究室が存在する形態となった。なお、大学院のほうは、平成 21 年からは「アジア文化研究」専攻「アジア文化」コース「東アジア思想文化」専門分野という位置付けとなっている。

研究の分野は、中国の殷周時代～中華人民共和国に至る思想史で、方法的には哲学・哲学史的研究だけでなく、社会史を背景にした思想史的研究、中国文化と他文化との比較文化論的研究、など多岐にわたっている。平成 23 年度の教員は、教授 1 名、准教授 2 名、助教 1 名であり、他に非常勤講師を 3 名委嘱した。また、本学部次世代人文学開発センターの特任教員や中国語担当外国人教員にも、学生の教育に携わってもらっている。大学院は、基幹講座としての文学部の本研究室と、協力講座としての東洋文化研究所東アジア思想・宗教分野とからなり、他に教養学部（総合文化研究科）などから若干名の教員の協力を仰いでいる。平成 4 年度より毎年 2 名のティーチング・アシスタントを大学院生から募り、学部学生の手ほどきをしてもらっている。なお、助手 1 名体制にともない、平成 8 年度からは嘱託 1 名を委嘱している。

外国人研究員については、毎年数名を受け入れている。留学生も積極的に受け入れており、平成 23 年度後期の時点では、東アジアを中心に 4 名（博士課程 2 名、修士課程 2 名）が在籍（ほかに研究生が 3 名）、チューター制度もうまく噛みあって学生間の国際交流が盛んである。日本人大学院生は、博士課程進学後に大部分の者が海外に留学する。平成 23 年度後期の時点では、2 名が留学中である。また、博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員に選ばれる事例も多い。後掲のように、大学院満期退学後に博士論文を提出する者が毎年 2～3 名いる。

研究室全体で支えている学会として中国社会学文化学会があり、役員として運営に参加している。また、大学院生を中心に「中国哲学研究会」（昭和 48 年～）が組織されて月例会を開いており、平成 2 年より雑誌『中国哲学研究』を発行して助手・助教・大学院生の研究発表の場としている。

本研究室では、漢籍の語句用例検索ソフト導入など、従来から研究・教育活動におけるコンピュータの利用を積極的に図ってきた。技術の日進月歩にあわせて検索環境を随時整備し、従来の書冊漢籍の活用とともに教育の高度化を図っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

川原秀城 教授	専門分野 東アジア思想史・中国朝鮮科学史
小島 毅 准教授	専門分野 儒教史・東アジア王権論
横手 裕 准教授	専門分野 道教史・中国三教交渉史

(2) 助教の活動

水口拓寿 助教 専門分野 東アジア思想史・人類学

在職期間 2007 年 4 月～2011 年 3 月

主要業績

(論文) 「四庫全書における術数学の地位——その構成原理と存在意義について」、『東方宗教』、第 115 号、日本道教学会、24-43 頁、2010.5 (第 11 回日本道教学会賞受賞)

「論臺灣一八六八至一九七〇年の「祭孔禮樂之改進」、台北市孔廟管理委員会編、『「世界的孔子——孔廟與祀典」國際學術研討會論文集』、台北市孔廟管理委員会、2010.12

「孔子廟の礼楽に投影される「中華」と「本土」——台北市孔廟の弘道祠入祀典禮と春季祭礼をめぐって」、鈴木正崇編、『東アジアにおける宗教文化の再構築』、風響社、389-418 頁、2010.12

「名墓の風水に「便乗」する者たち——中国寧波・東銭湖墓群の事例から」、『比較日本学教育研究センター研究年報』、第 7 号、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター、45-56 頁、2011.3

(口頭発表) 国内、「名墓の風水に「便乗」する者たち——中国寧波・東銭湖墓群の事例から」、第 12 回国際日本学シンポジウム「都市・建築・空間の国際日本学」、お茶の水女子大学、2010.7.3

国内、「宋明知識人による風水思想の「発見」について——朱熹を焦点とする検討」、中国社会文化学会
2011年度大会、東京大学本郷キャンパス、2010.7.10

国内、「風水思想の発見・批判・改造——宋学は風水に何を求めたか」、慶應義塾大学言語文化研究所公開
講座「天・神々・祖先——中国人の思想と信仰」、慶應義塾大学三田キャンパス、2010.10.23

国内、「吉林省長春文廟與其祭孔活動的「復興」、国際ワークショップ「現代中国における儒教復興——
フィールドからの調査報告」、東京大学駒場キャンパス、2010.12.3

国外、「通過《發微論》探討「地理與人事不遠」之風水思想」、「身體、權力與認同」国際学術検討会、国
立政治大学（台湾台北市）、2010.12.11

国内、「戦後台湾の孔子祭祀儀礼に見る「中華文化」のありか」、2011年度第1回武蔵大学人文学会研究
会、武蔵大学、2011.7.28

国外、「簡述宋明理學家對風水的關心」、第4届世界儒学大会、孔子研究院（中国山東省曲阜市）、2011.9.28
(予稿・会議録) 国際会議、「通過《發微論》探討「地理與人事不遠」之風水思想」、「身體、權力與認同」国際
学術検討会、国立政治大学（台湾台北市）、2010.12.11

国際会議、「簡述宋明理學家對風水的關心」、第4届世界儒学大会、孔子研究院（中国山東省曲阜市）、
2011.9.28

(訳注)『『發微論』四庫全書本及び関連資料の訳注——風水思想と「儒理」の接点をめぐって』、『中国哲学研
究』、第25号、東京大学中国哲学研究会、106-163頁、2012.2

(翻訳) 劉祥光、「宋代卜算書籍の流通」、「宋代における卜算書籍の流通」、『中国——社会と文化』、第25号、
50-99頁、2010.7

(他機関での講義等) 非常勤講師、武蔵大学人文学部、「東アジアの地理と環境1・2」「中国語」、2010.4-2011.3
評議員、日本道教学会、2010.4-

共同研究員、国際日本文化研究センター、2011.4-

委員長、松下国際スカラシップフォーラム委員会（現・松下幸之助国際スカラシップフォーラム委員
会）、2010.4-

小野泰教 助教 専門分野 中国近代思想史

在職期間 2011年4月～現在

主要業績

(著書) 共著、鄭大華ほか主編、『戊戌変法与晚清思想文化転型』、社会科学文献出版社、2010.4

(論文) 「咸豊期郭嵩燾の軍費対策——仁政、西洋との関連から見た——」、『中国——社会と文化』、第26号、
124-139頁、2011.7

「郭嵩燾の『莊子』解釈——郭象「自得」「独化」への批判とその背景」、『日本中国学会 第一回若手シ
ンポジウム論文集 中国学の新局面』、1、217-231頁、2012.3

「清末士大夫の見た西洋議會制——いかにして理想の君民関係を築くか」、『アジア遊学 東アジアの王
権と宗教』、151、157-168頁、2012.3

(口頭発表) 国内、「咸豊期郭嵩燾の軍事費対策——士大夫意識、西洋体験との関連から見た」、中国社会文化
学会 2010年度大会、東京大学本郷キャンパス、2010.7.10

国際、「咸豊後期郭嵩燾の釐金政策与其歴史背景——進歩与保守之間」、第三届中国近代思想史国際学術
研討会、中国・洛陽・洛陽師範学院、2010.8.16

国内、「清末における西学と学会——郭嵩燾（1818-1891）を起点として」、国際ワークショップ「17
～19世紀東アジアにおける西学を受容と展開」、東京大学本郷キャンパス、2010.10.2

国内、「清末期官僚郭嵩燾（1818-1891）の『莊子』解釈——その政治秩序観を中心に」、日本中国学会
第一回若手シンポジウム「中国学の新局面」、東京大学本郷キャンパス、2011.3.26

国際、「致知与誠意之間の關係：以郭嵩燾《大学章句質疑》為例」、儒道仏三家的哲学論辯国際学術研
討会、台湾大学哲学系、2011.11.12

国内、「郭嵩燾『中庸章句質疑』の清末思想上における位置」、孫文研究会 冬季研究例会、兵庫県・
神戸市・中華会館、2012.1.9

(予稿・会議録) 国際会議、「咸豊後期郭嵩燾の釐金政策与其歴史背景——進歩与保守之間」、第三届中国近代
思想史国際学術研討会、中国・洛陽・洛陽師範学院、2010.8.16

『第三届中国近代思想史国際学術研討会論文集』、上冊、197-202頁、2010.8

国内会議、「清末における西学と学会——郭嵩燾(1818-1891)を起点として」、国際ワークショップ「17～19世紀東アジアにおける西学の受容と展開」、東京大学本郷キャンパス、2010.10.2

『国際ワークショップ「17～19世紀東アジアにおける西学の受容と展開」予稿集』、2-17頁、2010.10

国際会議、「致知与誠意之間の關係：以郭嵩燾『大学章句質疑』為例」、儒道仏三家の哲学論辯国際學術研討会、台湾・台北・台湾大学哲学系、2011.11.12

『儒道仏三家の哲学論辯国際學術研討会 會議論文(一)』、(10-3)-(10-9)頁、2011.11

(翻訳) 湯志鈞、「家系、研究、そして著述(上)」(原題「家世、治学、撰述」)、『中国——社会と文化』、第25号、2010.7

湯志鈞、「家系、研究、そして著述(下)」(原題「家世、治学、撰述」)、『中国——社会と文化』、第26号、2011.7

章清、「公共輿論」——中国自由主義の表現と実践(原題「公共輿論：中国自由主義的「表達」与「實踐」)、村田雄二郎編『リベラリズムの中国』、有志舎、2011.9

(他機関での講義等) 非常勤講師、専修大学 ネットワーク情報学部、「中国語中級総合ⅠⅡ」、2011.4～2012.3
非常勤講師、専修大学 ネットワーク情報学部、「中国語初級構造ⅠⅡ」、2011.4～2012.3

(3) 外国人教員の活動

廖肇亨 准教授 専門分野 近世東アジア仏教、東アジア漢文学、中国古典文学理論

在職期間 2011年10月～現在

主要業績

(著書) 共著、石守謙、廖肇亨主編、『東亞文化意象の形塑』、台北市：允晨出版社、2011.1

(論文) 「清代中葉古典海洋詩歌釐探：以嘉慶五年琉球冊封使趙文楷、李鼎元的海洋體驗為中心的考察」、『海洋文化學刊』、台灣海洋大學、第8期、31-63頁、2010.6

「從「清涼聖境」到「金陵懷古」：從尚詩風習側探晚明清初華嚴學南方系之精神圖景」、『中央研究院中國文哲研究集刊』、第37期、51-94頁、2010.9

「從《琉球百問》看清代中葉琉球貴族的疾病與社會生活」、『浙江工商大學學報』、第6期、39-43頁、2010.11

「今釋滄歸之文藝觀與詩詞創作析論」、『武漢大學學報』、第63卷第6期、697-704頁、2010.11

「從「搜奇獵異」到「休明之化」——由朱之蕃看晚明中韓使節文化書寫的世界圖像」、『漢學研究』、第29卷第2期、53-80頁、2011.6

「詩法即其兵法——明代中後期武將詩學義蘊探詮」、『明代研究』、第16期、2011年6月、29-56頁、2011.6

「脫軌・錯位・歸返：《醒世姻緣傳》中的讖罪書寫與河川文化的相互投影」、『文與哲』、高雄：國立中山大學中文系、515-546頁、2011.6

「若為大水所漂：漂海書寫的類型與精神系譜探析」、『域外漢籍研究集刊』、北京：中華書局、第7輯、435-455頁、2011.11

(予稿・會議錄)

「脫軌・錯位・歸返——《醒世姻緣傳》中的讖罪書寫與河川文化的相互投影」、中研院文哲所宗教學術研究室主辦「眾生病。故我病：罪悔、療癒與中國文化書寫」、台北、2010.9.9-9.10。

「若為大水所漂：東亞漂海書寫的類型特徵與精神系譜探析」、中研院文哲所主辦「東亞的思想與文化：海洋文化」國際學術研討會、台北、2010.9.29-10.1。

「從「清涼聖境」到「金陵懷古」：從尚詩風習側探晚明清初華嚴學南方系之精神圖景」、中研院文哲所、香港中文大學宗教與文化系主辦「中外宗教與文學裡的他界書寫」國際學術會議、香港、2010.12.8-12.10。

「明清佛教在順化：石濂大汕《海外紀事》一書中世界觀的再省思」、越南佛學學院與國家大學聯合主辦「匡越國僧與越南佛教在早期獨立紀元的概況」國際學術討論會、河內、2011.3.18-3.19。

「明清之際曹洞宗壽昌派在東亞的流行傳佈：石濂大汕《海外紀事》一書世界圖像的再省思」、香港理工大學中國文化學系、香港珠海學院亞洲研究中心聯合主辦「明史認識與近代中國歷史走向」國際學術討論會、香港、2011.4.11-4.12。

「百川倒流：日本臨濟五山禪林海洋論述義蘊試詮」、河北省社會科學院、河北省民族宗教廳、河北省佛教協會主辦、河北省民族與宗教研究會、石家莊市民族宗教局、臨濟寺協辦、河北省社會科學院哲

學所、河北禪學研究所、柏林禪寺承辦「首屆河北趙州禪・臨濟禪・生活禪學術論壇」、河北省石家莊市、2011.5.13-5.16。

(4) 外国人研究員・内地研究員

2010年度 外国人研究員

張 玉清 (河南中医学院)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「『淮南子』にみる運命論

「洪沢栄一「道德經濟合一説」の形成過程について」

2011年度

「現代中国の民事法について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

文盛載「マテオ・リッチの宣教活動の変異—公教要理書を中心に—」(指導教員)川原秀城

2011年度

竹本公彦「明末思想史の研究—王陽明心学と天台心学—」(指導教員)丘山新

山本健太郎「咸淳『臨安志』の思想史的研究」(指導教員)小島毅

商兆琦「明治日本における田中正造と鉅毒事件」(指導教員)小島毅

NIE JING「鄭注月令と唐月令との差異をめぐって」(指導教員)川原秀城

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

竹元規人「1930年前後中国における歴史学の思想と制度：「中国」の構想と「學術社会」の構築」

〈主査〉小島毅 〈副査〉佐藤慎一・吉澤誠一郎・村田雄二郎・石井剛

森平崇文「独脚戯、滑稽戯と上海」

〈主査〉小島毅 〈副査〉佐藤慎一・大木康・松浦恆雄・飯塚容

黄崇修 (HUANG Chung-hsiu)「欲と鬱の間 儒医朱丹溪鬱説の展開における宋代道学の受容」

〈主査〉川原秀城 〈副査〉小島毅・横手裕・林克・長谷部英一

(乙)

なし

2011年度

(甲)

尹相洙(YOUN SANGSOO)「科挙の学から経史の学へ—黄宗羲からみた明末清初の学術転換の様相—」

〈主査〉小島毅 〈副査〉川原秀城・横手裕・大木康・伊東貴之

倉本尚徳「北朝造像銘研究—華北地域社会における仏教の実践と信仰」

〈主査〉横手裕 〈副査〉襄輪頭量・小島毅・佐川英治・末木文美士

(乙)

なし

14 インド語インド文学

1. 研究室活動の概要

インド亜大陸では3千年来数多くの言語が用いられ、それらの言語によって伝えられた文献も多様を極めている。そのうち、本専修課程（略称「印文」）では、明治34（1901）年に「梵文学講座」が開設されて以来（梵語学の開講は、明治18（1885）年に遡る）、古典サンスクリット語を中軸とする古期・中期インド・アリア語をもって著された文献の研究がなされてきた。サンスクリット語はインドの雅語として古典時代の宗教、文学、哲学、科学などあらゆる分野の文献に用いられたものであり、古典インド文化の精華はサンスクリット語によって伝えられたといっても過言ではない。本専修課程でサンスクリット語の学習を必須とするのもこのためである。他方、平成8年（1996）度より、ドラヴィダ系のタミル語タミル文学の講座も設けられ、これにより、専門的なドラヴィダ系語学文学の研究に携わることが可能となった。タミル語も紀元前に遡る文献をそなえ、その文学は長い歴史と豊かな内容を誇るものである。

本専修課程は、これらの言語をはじめとするインド諸語の十分な知識とインド古典籍の精密な読解の基礎に立って、広くアジア諸地域に伝播してゆくインド古典文化を考究することを目標としている。したがって、専修課程名の一部ともなるインド文学とは、詩歌・戯曲・説話など狭義の文学作品だけでなく、ヴェーダ聖典、マヌ法典・実利論などの学術論書、仏教・ジャイナ教・ヒンドゥー教などの宗教文献なども含むものである。

なお、本専修課程と密接な関係にあるインド哲学仏教学専修課程とは、学部レベルでは別々の専修課程をなすが、大学院レベルではインド文学・インド哲学・仏教学専門分野として単一のコースを形成し、さまざまな行事を共同で行っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

土田龍太郎（サンスクリット文学）

高橋孝信（タミル語学文学）

非常勤：矢島道彦、松村淳子

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

なし

15 インド哲学仏教学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は、1879年、和漢文学科に「仏教典籍」の講義が設けられたことを源流とし、1916年に「印度哲学」の講座が誕生したことに端を発する。以来、現インド語インド文学専修課程と密接な関係を保ちつつ、現在に至っている。本専修課程では、インドの哲学・宗教思想、およびインドにおいて成立・展開し、またアジア諸地域に伝播してそれぞれに独自の展開を遂げてきた仏教の研究・教育が、包括的・有機的な展望のもとに行われている。2011年度現在、教員は教授4名である。

大学院人文社会系研究科においては、本専修課程は、アジア文化研究専攻の中のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野（南アジア・東南アジア・仏教コース）に対応し、その一部を構成する。ここでは、インド語インド文学専修課程や東洋文化研究所の関連部門などと連携しながら、より広い視座に立って、インドの諸思想及び仏教についての専門的な研究・教育が進められている。

本専修課程への教養学部からの進学者は、毎年3～5名ほどであり、学士入学者も1～2名ほどいる。学部卒業生の多くは、大学院のインド文学・インド哲学・仏教学専門分野に進学する。また、他専修課程や他大学（外国の諸大学を含む）を卒業して同専門分野に入ってくるものも稀ではない。教育上は、学生たちがそれぞれに、サンスクリット語・パーリ語・チベット語・古典中国語などの修得を基礎として、関心を持つ問題を主体的に追求していくことを基本方針としているから、結果的には、本専修課程および当該専門分野において取り扱われる研究対象や研究方法は極めて広範囲に亘る。しかし、研究方法に関して文献学的な厳密さが要求されるという点は、共通である。そのために、卒業論文の代わりに特別演習を取って卒業することも認めている。これは教員の指導の下に指定された基本的な原典を自ら読解し、基本的な読解力を養おうというものである。

本専修課程は、インド語インド文学専修課程と共同で、年に数回研究例会を開催している。ここでは、大学院の博士課程在学などによる研究発表、国際会議等で海外に出張した教員による帰朝報告、海外留学者の体験報告などが行われており、研究・教育上の意義は大きい。また、本研究室における諸研究を公表する媒体として、1993年以来、原則として年に1回、『インド哲学仏教学研究』が刊行され、好評を得ている。

本専修課程が関わるインド哲学研究ならびに仏教学は、それ自体が高度の国際性を帯びていることもあって、研究者間の国際交流は極めて活発である。また、多くの留学生を海外に送り出すとともに、海外から多くの留学生を迎えている。さらに、内外の所学会との繋がりも緊密である。中でも、海外にも多数の会員を持つ日本印度学仏教学会は、1951年の創立当初より本研究室との関係が深く、事実上、学会運営においても中核的役割を担い続けて今日に至っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 丸井 浩	専門分野	インド哲学	在職期間	1992年4月より現在に至る
教授 斎藤 明	専門分野	インド仏教	在職期間	2000年4月より現在に至る
教授 下田 正弘	専門分野	インド仏教	在職期間	1994年10月より現在に至る
教授 蓑輪 顕量	専門分野	日本仏教	在職期間	2010年4月より現在に至る

(2) 外国人研究員・内地研究員

2010年度： Mark Blum（アメリカ）

2011年度： 何歆歆（中国）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「真如について—永遠の生—」

「ブータン仏教について」

2011年度

「インド哲学・仏教学とサステナビリティ」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

新作慶明「『中辺分別論』における grahya・grahaka」〈指導教員〉斎藤明

2011年度

中村晃朗「prapanca と prapancopasama—『中論』注釈書 Prasannapada を中心に—」〈指導教員〉斎藤明

GIGLIO EMANUELE DAVIDE「『諸法実相抄』の研究」〈指導教員〉蓑輪顕量

韓尚希「Pali 仏典における七聖人の研究—Kitagiri Sutta を中心に—」〈指導教員〉下田正弘

源川宗城「『富楼那問経』の大乗仏説論」〈指導教員〉下田正弘

木村利和「法蔵における「信」の問題—その宗教性と思想的意義—」〈指導教員〉丘山新

若林正晃「チャンドラキールティの縁起解釈」〈指導教員〉斎藤明

鄭祥教「『入中論』におけるチャンドラキールティの人無我説—プドガラ論批判を中心として—」〈指導教員〉斎藤明

YOKOTA SAMUEL YHUBUN「パーリ文『ミリンダ王の問い』前分の研究—質疑応答の形態および連続性の問題から—」〈指導教員〉下田正弘

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

加藤弘二郎「解深密経」における西(テンパンマ)系写本の研究(副題:第七章「無自性相品」の東西両系統のテキスト比較考察を通して)」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉丸井浩・下田正弘・佐久間秀範・福田洋一

金京南(KIM, KYUNG NAM)「『十地経論』研究—六相および唯心説を中心として—」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉下田正弘・蓑輪顕量・丘山新・木村清孝

宮崎展昌「『阿闍世王経』の研究」

〈主査〉下田正弘 〈副査〉斎藤明・丘山新・渡辺章悟・山部能宜

八尾史「『根本説一切有部律』「菓事」の研究—経典「引用」を中心に—

〈主査〉下田正弘 〈副査〉斎藤明・永ノ尾信悟・佐々木閑・シェーン・クラーク

(乙)

なし

2011年度

(甲)

西沢史仁「チベット仏教論理学の形成と展開—認識手段論の歴史的変遷を中心として—」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉丸井浩・下田正弘・福田洋一・吉水千鶴子

石上和敬「『悲華経』の研究—釈迦五百誓願を中心として—」

〈主査〉下田正弘 〈副査〉斎藤明・蓑輪顕量・渡辺章悟・山部能宜

(乙)

丸井浩「ジャヤンタ研究—中世カシミールの文人が語るニヤヤ哲学—」

〈主査〉斎藤明 〈副査〉土田龍太郎・下田正弘・桂紹隆・和田壽弘

16 イスラム学

1. 研究室活動の概要

イスラム学専修課程は、イスラム地域の思想・文化を研究する独立した学科として、1982年わが国で初めて設置された。一口にイスラム学といってもその対象範囲は広い。地理的には、中近東はもちろん東は中央アジア、インド亜大陸、東南アジア、東アジア、西は北アフリカ、スペインまでにも及び、時代的にはイスラム発生期から現代のイスラム思想の動向までも含んでいる。現在の教員数は、教授2名、助教1名。それぞれ近代より前の古典期イスラム思想文献研究を専門にしているが、それに加え古典研究をもとにした現代イスラム理解を念頭に置きつつ研究をすすめている。上記の広大な研究領域をカバーし、また歴史分野や現代研究との共同研究の可能性を探るために、初期アラブ史研究、現代アラブ政治、近現代イラン研究、アラビア語、の領域に関して学外教員および非常勤講師の協力を仰いでいる。

本専修課程に対応する大学院人文社会系研究科の専門分野はアジア文化研究専攻（西アジア・イスラム学）イスラム学専門分野である。大学院では特に同じコースに属する西アジア歴史社会専門分野と連携しつつ、さらには東洋文化研究所ならびに駒場大学院総合文化研究科の教員2名の協力を得て、より包括的なイスラム理解を求め研究・教育活動が行われている。

教養課程から進学する学生は例年2～3名前後で、現在の在籍数は10名である。他大学から学士入学してくる事例も過去にはあった。授業は基本的にアラビア語・ペルシア語の文献読解を通じて、神秘主義・法学・神学・哲学などの学問分野の理解を深めるという方向で行われる。だが、その枠組みにとらわれず学生が主体的にイスラム理解の視座を新たに設定し研究することが奨励されており、言語にかぎっても、必ずしもアラビア語・ペルシア語に自らのフィールドを限定する必要はない。また近年、イランやパキスタンなどからの研究生を受け入れ、より広い範囲での教育活動を目指している。

本専修課程から大学院人文社会系研究科イスラム学専門分野に進む学生は毎年、1、2名程度。それ以外にも他大学からの入学希望者もいる。現在、大学院生は9名在籍している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 竹下政孝 専門分野 イスラーム神秘主義

教授 柳橋博之 専門分野 イスラーム法

助教 吉田京子 専門分野 シーア派思想

(2) 助教の活動

吉田京子

在職期間 2010年4月～現在

研究領域 12イマーム・シーア派のイマーム論に関する初期伝統の分析および成立過程の考察

主要業績 (論文) 『諸光の大海 *Bihar al-anwar*』—12イマーム・シーア派における知の形態の一例として『イスラームにおける知の構造と変容—思想史・科学史・社会史の視点から—』早稲田大学イスラーム地域研究機構、2011年、273-282頁

(非常勤講師) 神田外国語大学非常勤講師、2010.4～

(3) 外国人研究員・内地研究員

2010年9月より2011年3月まで タイバ・アンワル (パキスタン)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「『鳩の頸飾り』における魂の高貴さについて」

「イスラーム世界の盤上遊戯シャトランジュに関する考察」

「イブン・イドーリスの思想研究」

2011年度

「中東の春と、ソーシャルネットワークの果たした役割」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

井上貴恵『神秘の薔薇園 Gulshan-i raz』とその注釈とに見られる思想的差異についての考察〈指導教員〉竹下政孝

狩野希望「ラーギブ・イスファハーニー(al-Raghib al-Isfahani)『法的美質への手立て(al-Dhari'ahila makarim al-ahari'ah)』における正義・愛・友情」〈指導教員〉竹下政孝

澤田萌「ナフス・ルーフ論、社会的美徳論、稼得論からみるニーシャープール・スーフィズムの特徴～スーフィー理論書比較を通して～」〈指導教員〉竹下政孝

2011年度

なし

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲) (乙)

なし

2011年度

(甲)

小野仁美「イスラーム法の子育て観—法学者間のイフティラーフからみたマーリク派の特徴」

〈主査〉柳橋博之 〈副査〉竹下政孝・姫岡とし子・鎌田繁・小林寧子

(乙)

なし

17 西洋古典学

1. 研究室活動の概要

西洋古典学はギリシャ語・ラテン語でしるされた文献全体を対象とする。のみならず古典古代世界の全容の把握をもめざす学問である。欧米では広範な領域を対象として永い伝統を誇る総合的学問であるが、本専修課程ではギリシャ語・ラテン語双方の基礎を固め（大学院の入試段階ですでに両古典語を必須とする）、諸ジャンルの文献に親しんだ上で、徐々に視野を拡大していく方針をとっている。

広範な対象にくらべ講義・演習をもつ専任教員の数は2人とあまりに少ないものの、非常勤講師の援助を受け、毎年、ギリシャ語／ラテン語・韻文／散文いずれをもおおえるように努めている。また全国他大学ならびに諸外国の研究者にも随時、講演をお願いしている。2011年度末（2012年2月）、南アフリカ大学レーナ・ファン・デン・ベルク教授（Professor Rena van den Bergh, University of South Africa）を招いて、Aulus Gellius に関する講演会を開催した。

研究室紀要（査読つき）を年1回発刊している。2010年9月に第6号、2011年9月に第7号を刊行した。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

片山 英男 古典文献学史・古典修辞学

（助手）1977年度～1983年度 （助教授）1983年度～1993年度 （教授）1993年度～2011年度

葛西 康徳 ギリシア・ローマ法とその普及・法廷弁論・ギリシア宗教

（教授）2011年度～

(2) 助教の活動

小池 登

在職期間 2008年度～

研究領域 ギリシャ語韻文

主要業績 (単著)『ピンドロス祝勝歌研究』、知泉書館、2010年

(共編著)大芝芳弘・小池登(編)、『西洋古典学の明日へ—逸身喜一郎教授退職記念論文集』、知泉書館、2010年

非常勤講師引き受け状況 共立女子大学(2004年度～)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「プロペルティウス第1巻16番をめぐって」

「Fidesに関する一考察—Plautus 作品をもとに—」

「ギリシア悲劇の音楽」

2011年度

「キケロー論」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

平野智晴「ソフォクレス悲劇におけるコロスについて」(指導教員)片山英男

小町悦未「『フェイドロス』におけるリュシアスの演説について」(指導教員)片山英男

齋藤優香「「スキーピオの夢」と中世夢物語詩」(指導教員)片山英男

和田ありす「『書簡』の観点からホラーティウス『書簡集』第1巻を考察」(指導教員)片山英男

2011年度

千葉慎太郎「『ギリシア詞華集(Anthologia Palatina)』5巻の解釈:詩の内容分析から見るケパラーズの編集方針」

(指導教員)片山英男

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

なし

18 フランス語フランス文学

1. 研究室活動の概要

本研究室は、テキストの綿密な読解を出発点とした、フランス語・フランス文学に関する教育・研究を担当している。ここでいう「フランス文学」が含意する作品の範囲は、言語および文学が社会の根幹に深く根ざしているフランスの伝統に即して、ひとり詩や小説にとどまらず、思想、宗教、歴史記述など、きわめて多岐にわたる。さらに近年ではテキストという概念の拡張ともなっており、映画のシナリオや時事雑誌の記事など、研究対象は多様化の傾向にある。フランス語学研究についても、本研究室ではこうした文学研究の流れを受け、たんに文法的な側面ばかりでなく、文化的な諸状況における運用という側面からこれを捉える傾向にある。

研究室の専任スタッフは、教授3名、准教授1名、外国人教師（准教授）1名、助教1名であり、これに加えて毎年数名の非常勤講師を委嘱し、中世文学から現代フランス文学まで、また理論的なフランス語学研究からフランス人スタッフによる実際的な語学訓練まで、フランス語フランス文学のほぼ全領域をカバーする授業を提供している。

2011年度の大学院学生数は、修士課程14名、博士課程26名。近年の傾向として研究テーマには現代文学・思想を掲げる学生が増加している。大半は博士課程においてフランスやスイスの大学に留学し、博士論文提出資格（Master II）を取得。さらに博士論文を提出して博士号を取得する学生も少なくない。その一方、本研究科で課程博士論文を提出する学生も増加し、毎年2、3名が博士号を取得している。また専門的知識を生かし、修士課程修了後に新聞社、出版社等に就職する学生も増加している。

学部の段階では教養学部からの進学生は毎年10名程度で、2011年度の学部在学学生は28名。前期課程教育の大綱化にともなうフランス語の必修単位の減少に配慮し、ティーチング・アシスタントの協力を得たヒアリング訓練の授業を設け、また他専修課程・他学部の学生に対しては「原典を読む」の枠内で講読授業を提供している。さらにフランス人スタッフによるフランス語授業は、週に大学院3コマ（「アカデミック・ライティング」を含む）、学部3コマ（非常勤講師担当の1コマを含む）が用意され、実践的なフランス語運用能力の向上を望む学生の求めに応じている。

研究面については、研究室スタッフが、日本フランス語フランス文学会をはじめとする各種の関連学会・研究会の組織・運営に積極的に関与している。研究室が運営の主体となる研究誌『仏語仏文学研究』は、年2回のペースで刊行されている。

国際交流については、パリとリヨンのエコール・ノルマル・シュペリウール（高等師範学校）およびジュネーヴ大学との間に学術交流協定を結び、それぞれ毎年1名の大学院学生の交換を続けている。ジュネーヴ大学とは2009年度より毎年1名の学部生交換も始まった。研究者の交流も盛んで、フランスのみならず各国からの研究者が研究室を訪問し、講義やセミナーをおこなっている。それらは他大学の研究者や大学院生、一般聴衆にも公開され、本研究室は日本におけるフランス文学研究のセンターの一つとしての責任を十分に担っている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授 月村辰雄（フランス中世文学）
中地義和（ランボー、フランス近代詩）
塚本昌則（ヴァレリー、フランス20世紀文学）
准教授 野崎 勲（ネルヴァル、フランス19世紀文学）

(2) 助教の活動

2010年度

畑 浩一郎（ハタ コウイチロウ）1970年6月10日生まれ

略 歴 1994年3月 東京大学文学部フランス語フランス文学専修課程卒業
1994年4月 同 大学院人文科学研究科修士課程入学（仏語仏文学）
1996年3月 同 大学院人文社会系研究科修了
1996年4月 同 大学院人文社会系研究科博士課程進学（仏語仏文学）
2002年3月 同 単位取得満期退学

この間、1997年10月より1年間、大学間交流協定交換生としてパリ・エコール・ノルマル・シュペリウールに留学、パリ第3大学にてDEA（博士論文提出資格）を取得（98年9月）。

2002年10月～2004年9月フランス政府給費留学生としてパリ第4大学博士課程在籍。

2005年5月 パリ第4大学にて博士学位取得(文学博士)
2008年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教
2011年4月 聖心女子大学専任講師

研究対象 19世紀フランス文学、特にロマン主義時代のオリエン特旅行記

主要業績 (著書) *Voyageurs romantiques en Orient – étude sur la perception de l'autre*, L'Harmattan, coll. « Critiques Littéraires », 2008 [2009年度「地中海学会ヘレンド賞」受賞]
(論文) 「自分を語る旅行者 シャトーブリアン『パリからエルサレムへの旅程』、『仏語仏文学研究』、2009年、第39号、p. 25-44
「ゼトネビーとゼイナブ —— 女主人公の名前をめぐる」、『ネルヴァル手帖』、2008年12月、第5号、p. 123-143
(学会発表) 「他者との邂逅 —— フランス・ロマン主義時代のオリエン特旅行記をめぐる」、地中海学会定例研究会、2008年12月13日、東京大学本郷キャンパス
« Vingt ans de remaniement, Jean Potocki, *Manuscrit trouvé à Saragosse* », Colloque international, Balzac et alii, génétiques croisées. Histoires d'éditions, l'Université Paris VII (Denis-Diderot), le 4 juin 2010.

2011年度

本田貴久(ホンダタカヒサ)

略歴 1999年3月 東京大学文学部言語文化学科フランス語フランス文学専修卒業
2001年3月 大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻仏語仏文学専門分野修士課程修了
この間2001年より1年間大学間交流協定交換生としてジュネーブ大学文学部に留学、DEA(博士論文提出資格)を取得(2002年11月)
2008年3月 大学院人文社会系研究科欧米系文化研究専攻博士課程単位取得満期退学
2011年2月 大学院人文社会系研究科にて博士(文学)学位取得
2011年4月 東京大学大学院人文社会系研究科助教

研究対象 20世紀フランス文学(特にミシェル・レリス作品研究)

主要業績(論文) 「ミシェル・レリス作品に見られる“編集”的技術について——『ゲームの規則』を中心に」(博士学位論文、東京大学大学院人文社会系研究科、2011年2月1日)

(3) 外国人教員の活動

マリアンヌ・シモン=及川(Marianne SIMON-OIKAWA)

略歴

1989年9月 国立高等師範学校(エコール・ノルマル・シュペリユール)およびパリ第七大学入学
1990年9月 同大学にて仏文(現代文学)学士号、英文学士号取得
1991年9月 同大学にて修士号取得(現代文学)
1992年7月 大学教育教授資格(アグレガシオン)取得
1993年9月 パリ第七大学にてDEA(PhD)取得(現代文学)
1993年9月-1995年8月 東京大学研究生
1995年9月-1998年9月 リール大学講師(現代文学)
1996年9月 パリ第七大学にて日本語学士号取得
1997年9月 同大学にて日本語修士号取得
1999年12月 パリ大七大学にて文学博士号取得(現代文学)
1999年4月-2005年4月 早稲田大学非常勤講師(フランス文学)
2000年9月-2005年9月 慶應義塾大学訪問講師(フランス文学)
2000年4月-2008年8月 日仏会館客員研究員
2006年10月 東京大学准教授

研究対象 フランス文学と絵画; 日仏両文化における視覚詩の伝統

主要業績

(著書) - (avec Annie Renonciat) Marianne Simon-Oikawa (dir.), *La Pédagogie par l'image en France et au Japon*, Presses universitaires de Rennes, 2009.
- マリアンヌ・シモン=及川(他3名)、『日本の文字文化を探る—日仏の視点から』、勉誠出版、2010年2月。
(論文) - « La poésie idéographique de Pierre Albert-Birot », *RiLune*, n° 8, p. 145-164, en ligne sur : http://www.rilune.org/ENGLISH/mono8/13_Simon-Oikawa.pdf
- « Le temps codé: les calendriers en images (*egoyomi*) au Japon », *Extrême-Orient Extrême-Occident*, n° 30 (« Du bon usage des images: autour des codes visuels en Chine et au Japon », sous la direction de Claire-Akiko Brisset), 2008, p. 117-142.

- « Le Roman d'un regard : Bernard Noël dans l'atelier de Michel Mousseau », *Traversée*, Calliopées, 2009, p. 221-230.
- « Du divertissement à l'enseignement : les usages pédagogiques des images en écriture (moji-e) au Japon, dans Annie Renonciat et Marianne Simon-Oikawa (dir.), *La Pédagogie par l'image en France et au Japon*, Presses universitaires de Rennes, 2009, p. 39-53.
- « La coquille aux mirages », *Le Frisson esthétique*, n° 7, janvier 2009, p. 32-33.
- « L'arbre aux feuilles d'or », *Le Frisson esthétique*, n° 8, automne-hiver 2009-2010, p. 52-54.
- 「葛飾北斎と文字絵の世界」、『日本の文字文化を探る一日仏の視点から』、勉誠出版、2010年、p. 329-352。
- 「『日本の文字文化を探る』の出版にあたって」、*勉誠通信*、18号、2010年、p. 13-15。
- (書評) - (en collaboration avec Pascal Griolet) : ouvrage d'Annick Horiuchi (dir.), *L'Éducation en Chine et au Japon*, Les Indes savantes / Université Paris 7 – Diderot GreJa, coll. « Etudes japonaises », compte rendu dans *Cipango*, n° 15, 2008, p. 258-262.
- ouvrage d'Anne Kerlan-Stephens et Cécile Sakai (dir.), *Du visible au lisible. Texte et image en Chine et au Japon*, compte rendu en ligne sur le site Internet *fabula.org* : <http://www.fabula.org/actualites/article16511.php>
- ouvrage de Claude Debon : *Calligrammes* » dans *tous ses états, Édition critique de Guillaume Apollinaire*, Éditions Calliopées, 2009, compte rendu dans *Apollinaire*, n°5, 2009.
- (翻訳) - Iwamoto Kenji, « Lanterne magique et pédagogie dans le Japon de Meiji : thèmes, images, discours », dans Annie Renonciat et Marianne Simon-Oikawa (dir.), *La Pédagogie par l'image en France et au Japon*, Presses universitaires de Rennes, 2009, p. 128-141.
- (学会発表) - « Pouvoir de l'image, puissance de l'écriture : formes d'efficacité du sacré en Extrême-Orient » (en collaboration avec Claire-Akiko Brisset, Université Paris 7, GreJa et CEED, atelier organisé lors du 8^e congrès international du IAWIS (Association internationale pour l'étude des rapports entre texte et image) portant sur le thème de l'« Efficacité », section « Actions rituelles », Institut national d'histoire de l'art, 7-11 juillet 2008.
- « Voir la poésie - La poésie visuelle en France et au Japon », Bibliothèque de Saint-Aubin-sur-mer, Calvados, 6 août 2009.

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- フランス語の数量表現について
- ファブリオ研究
- テオフィル・ゴーチエ論
- ユイスマンス論
- コレット『シェリ』研究
- エドモン・ロスタン『シラノ・ド・ベルジュラック』論
- ポール・ヴァレリー論——「若きパルク」における意識の劇
- Paul Valéry 論
- ジョルジュ・バタイユ『空の青』研究
- アルベール・カミュ『転落』論
- カミュ論
- サルトル『嘔吐』論
- ミラン・クンデラ『存在の耐えられない軽さ』論

2011年度

- ルソー『人間不平等起源論』と『言語起源論』における憐れみのジレンマ
- バルザック『ウジェニー・グラन्द』研究
- ネルヴァル『シルヴィ』論——各部の対応構造について
- 旅の可能性の探究——『八十日間世界一周』を題材に
- トリスタン・コルビエール論——*Les Amours jaunes* から読み解く、その考え方
- ジャン・コクトー『オルフェ』三部作論
- ジョルジュ・バタイユ『C 神父』研究
- 「空の青み」における3人の女について
- 『うたかたの日々』における主体性の問題
- ポール・ニザン研究

サルトル『嘔吐』論

ロラン・バルトにおける自伝と演劇の問題

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

下川恵理子「ジョルジュ・サンド『コンシュエロ』論—作品に見る役の諸相—」(指導教員)野崎敏

湯田一葉「ジャン・ジュネ研究—〈包むもの〉の役割」(指導教員)中地義和

大山祐美子「ジョルジュ・サンド『ジャンヌ』における主人公像の構築」(指導教員)月村辰雄

金坂直亮「アルチュール・ランボー『イルユミナシオン』における終末思想の諸相」(指導教員)中地義和

鈴木和彦「ボードレールの詩学における芸術および芸術家に関する研究—「英雄的な死」をめぐる—」(指導教員)中地義和

清家麻央「マルグリット・ユルスナール研究 『敬虔な思い出』における「私」の考察」(指導教員)塚本昌則

長谷川蔵人「ディオロ研究—『ラモーの甥』におけるアイデアと予言について」(指導教員)月村辰雄

2011年度

神山紗良「ルソー『言語起源論』における「恋」」(指導教員)月村辰雄

浜永和希「ランボー『地獄の一季節』における重層的な背理」(指導教員)中地義和

山松勇太「ボードレールにおける想像力『1845年のサロン』から『哀れなるベルギー!』まで」(指導教員)中地義和

嶋田聡「ルイ＝フェルディナン・セリヌ『リゴドン』における音楽—生命、嘲笑、爆撃」(指導教員)野崎敏

清水さやか「サミュエル・ベケット『マローヌは死ぬ』(Malone meurt)における〈暴力〉」(指導教員)塚本昌則

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

倉方健作「『歌詞のない恋歌(ロマンス)』 ポール・ヴェルレーヌにおける非人称的叙情」

〈主査〉中地義和 〈副査〉月村辰雄・塚本昌則・野崎敏・川瀬武夫

本田貴久「ミシェル・レリスの作品にみられる「編集」的技術について—『ゲームの規則』を中心に—」

〈主査〉塚本昌則 〈副査〉月村辰雄・中地義和・野崎敏・千葉文夫

鈴木哲平「サミュエル・ベケットの〈切断〉の詩学—1940年代における〈メディア的思考〉—」

〈主査〉塚本昌則 〈副査〉月村辰雄・中地義和・野崎敏・田尻芳樹

新田昌英「アランの情念論 第三共和政下フランスにおける哲学と実験心理学」

〈主査〉塚本昌則 〈副査〉塩川徹也・月村辰雄・野崎敏・澤田直

(外国の大学に提出された論文)

鈴木隆美、*La notion de croyance chez Proust* (ストラスブール大学)

2011年度

(外国の大学に提出された論文)

寺島美雪、*Le discours de "l'intime" dans Les Rougon-Macquart* (パリ第3大学)

内藤真奈、*Univers d'intimité: Écrits autobiographiques d'Hervé Guibert* (パリ第8大学)

滝沢明子、*Mise en œuvre de Roland Barthes - La présence de la vie et l'absence du roman* (パリ第7大学)

19 南欧語南欧文学

1. 研究室活動の概要

本専修課程は1979年4月にイタリア語イタリア文学専修課程として発足、文学部の大講座制への移行に伴い、1994年4月より専修課程名が現在のものに改められた。さらに大学院の機構改革に伴って、本専修課程に直結する大学院レベルの専門分野名も1995年度以降、従来のイタリア語イタリア文学から南欧語南欧文学へと改称された。こうした一連の改称は、これまでのイタリア語イタリア文学の研究・教育に加え、南仏やイベリア半島・中南米のラテン系諸言語およびその文学をも、本専修課程ならびに大学院課程の専門分野における研究・教育の対象に取り込もうとする意図の現われにほかならない。目下のところ、新たに加わった分野を専ら担当する専任教員はいないが、94年度から学外非常勤講師によるスペイン語スペイン文学関連の授業が開設され、専任教員によるロマンス語学の授業(学部・大学院共通)も年度により開講されている。また、2001年度からは中世オック語およびトゥルバドール文学がカリキュラムに加えられている。

2010～2011年度に本研究室に所属した専任教員は下記のように5名であるが、このほか毎年、学部および大学院の授業担当者として学内外から非常勤講師を数名招き、開設科目の充実を図っている。授業の中心をなすのは、旧専修課程時代以来、イタリア語イタリア文学であり、イタリア語の構造と歴史について、また中世から現代に至る様々な時代、様々なジャンルのイタリア文学についての講義・演習がなされるよう意を用いている。また、1994年以降、専任教員と博士課程在籍者を中心にして、研究室の紀要『イタリア語イタリア文学』を刊行している。

学生の専攻分野は古典文学、近現代文学、語学と様々である。本研究室の学生は、学部生のときから、夏期休暇などを利用してイタリア各地で開かれる語学研修に参加する者が多い。大学院在籍者の多くはイタリア留学中ないしは留学経験者である。

通常の研究・教育活動のほか、本研究室ではローマ大学ラ・サピエンツァ、フィレンツェ大学、ピサ高等師範学校、パドヴァ大学など東京大学と学術交流協定を締結しているイタリアの教育研究機関に所属する研究者等との交流も継続的に行なっている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授：長神 悟 (イタリア語史・ロマンス語学)

准教授：浦 一章 (イタリア13・14世紀文学)

准教授：Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート) (イタリア15世紀文学)

外国人教師：Luigi Cerantola (ルイジ・チェラントラ) (イタリア語韻律学)

助教：長野 徹 (イタリア近現代文学・イタリア児童文学)

(2) 助教の活動

長野 徹

在職期間 1997年10月～現在

研究領域 イタリア近現代文学・イタリア児童文学

主要業績

(論文) 「コッローディの物語世界を借りてーアルベルト・チョーチの三部作について」、『イタリア語イタリア文学』、第5号、2010

「シルヴァーナ・ガンドルフィのファンタジー」、『日伊文化研究』、第50号、2012.3

(書評) ヴァンバ、『ジャン・ブラスカの日記』、平凡社、『日伊文化研究』、48号、2010.3

(他機関での講義等) 非常勤講師、共立女子大学国際学部、「基礎イタリア語(入門)」、2010.4～2012.3

(学会) 国内、イタリア学会、編集委員、2010.4～2011.7

(3) 外国人教員の活動

Luigi Cerantola (ルイジ・チェラントラ)

研究領域 イタリア文学(とくに韻文)、韻律学

在職期間 2002年4月～2011年3月

主要業績

著書 LX, De Bastiani, 2009

Tre Arie cristologiche, Matteo, 2009

Lorenzo Amato (ロレンツォ・アマート)

研究領域 15世紀のフィレンツェの文学、ヨーロッパへの印刷術の導入と文化変容

在職期間 2011年4月～現在

主要業績

(著書)

共著、Dal manoscritto al libro stampato. Atti del Convegno internazionale (Roma, Villa Lante al Gianicolo, 9-11 dicembre 2009)、CISAM、2010

共著、2010. Annuario mondiale della poesia、Bandedchi & Vivaldi、2011

(論文)

Interpres、《Faustino da Treozio e Firenze》、29、pp.7-42、2010

La volgare ragioneria della letteratura、《Roma nel Rinascimento》、pp. 20-50、2010

(書評)

R.E. Kritzer: 'Renaissance Rome Descriptions in Comparison' in 'Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance', 72、《Roma nel Rinascimento》、pp.113-125、2010

E. Lonnrot, Kalevala: Poema nazionale finlandese、Ed. Mediterranee、《Semicerchio》、43、pp.85-86、2011.1

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「アントニオ・タブッキ作品研究—『水平線のすじ』を中心に」

2011年度

「記号論的分析の限界—Umberto Ecoの隠喩分析を例に—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

なし

2011年度

清野佳奈絵「古イタリヤ語における部分冠詞について」(指導教員)長神悟

高雄有希「大量生産時代におけるウンベルト・エーコの「小説」の美学」(指導教員)浦一章

森田華奈子「ピエトロ・ベンボ研究—Prose della volgar linguaにおける動詞の扱いについて—」(指導教員)長神悟

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

土屋美子「ポリツィアーノ俗語作品研究—15世紀における俗語の再生と革新—」

(主査)長神悟 (副査)浦一章・村松真理子・伊藤博明・鈴木信五

(乙)

なし

2011年度

(甲) (乙)

なし

20 英語英米文学

1. 研究室活動の概要

本学に英文学科が設置されたのは1887年であり、1893年には「英吉利語学英吉利文学」として講座化された。1962年にはこれに「アメリカ文学講座」が加わり、三講座となったが、1995年4月の改組に伴い「広域英語圏言語文化」大講座となった。100年の伝統をもった学科として、英語学と英米を中心とする英語圏文学（小説・詩・演劇など）の研究と教育にあたっており、そのカバーする領域は、イギリス中世から20世紀末の英語圏作品まで幅広い。現在、専任教員は教授4名、准教授3名、外国人客員教授1名、助教1名で、学内外から常時（「英語後期」や「アカデミック・ライティング」を含み）10名以上の非常勤講師を招いて、専任教員では扱いきれない分野を補っている。

毎年4月に教養課程から英語英米文学専修課程に進学してくる学部学生、2年間の専門教育を踏まえ、大学生活4年間の総決算として、英語で30枚程度の卒業論文を執筆する。授業以外に、TAの大学院生、外国人客員教授および英語の非常勤講師の協力を得て、学部3年生を主に対象とした「英語漬け」の1日を体験する「イングリッシュ・キャンプ」も毎年開催されている。また、個別のテーマや作家に関する読書会・研究会は、学部生・大学院生いろいろなレベルで常時複数行われており、専任教員による自主授業的なプログラムもある。本専修課程で最近特に注目される傾向は、研究職を目指して大学院に進学する学生と並んで、英語力を活かし、出版やマスコミ等だけでなく、金融、製造など一般企業に就職する学生も多くなっていることである。

大学院の修士課程には他大学からの志望者も多く、厳しい試験を経て入学し、本学出身者とともに博士論文研究に向け日々研鑽に励んでいる。大学院には専門に応じて、専任教員および学外の専門家をレフリーとする学術研究誌として、『Linguistic Research』（英語学）、『Reading』（イギリス系文学）、『Strata』（アメリカ文学）が、それぞれ年に1～2回ずつ刊行され、おおむね英語によって書かれた研究論文が掲載されている。

学会活動は、日本英文学会、日本アメリカ文学会、日本英語学会を中心に行われており、日本における英語学・英米文学研究の発展に中心的役割を果たしている。また、同窓会と卒業生の研鑽の場を兼ねた「東大英文学会」が古くから組織され、年1回の総会・講演会・懇親会が現在でも続いており、発行されている名簿の筆頭卒業生は夏目漱石である。

海外との研究交流も積極的に行なわれており、英米その他の大学の研究者の来日に際しては、他大学の研究者にも公開された講演会、セミナー等を開催することが多く、本学の教員・学生・院生が積極的に参加し、活発に討議を行い、日本の英語圏言語文化研究拠点として研究交流活動を行っている。近年では、大学院学生、特に博士課程在籍者がさまざまな団体からの奨学金を得るなどして英米の大学に留学し、MA、MPhil、PhDなどの学位を取得することが多く、すでにPhDの学位の取得者を20名以上は輩出している。わが国で教職につくものが大半であるが、中にはそのまま留学先の英米において職を得ているものもある。ここ数年中国などからの外国人留学生・研究生も増えており、海外の大学との交流が活発になり、国際化した環境のもとで、教育・研究活動が展開されている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授	平石 貴樹	HIRAIISHI, Takaki	(アメリカ文学)
教授	高橋 和久	TAKAHASHI, Kazuhisa	(イギリス文学)
教授	今西 典子	IMANISHI, Noriko	(英語学)
教授	大橋 洋一	OHASHI, Yoichi	(イギリス文学)
准教授	渡邊 明	WATANABE, Akira	(英語学)
准教授	阿部 公彦	ABE, Masahiko	(イギリス文学)
准教授	諏訪部 浩一	SUWABE, Koichi	(アメリカ文学)
客員教授	CLARK, Stephen		(イギリス文学)
助教	侘美 真理	TAKUMI, Mari	(イギリス文学)

(2) 助教の活動

侘美 真理

論文

「ギャスケルのゴシック短篇における『身体』について」、『エリザベス・ギャスケルとイギリス文学の伝統』、

2010.9

学会発表

国内、『嵐が丘』とギヤスケルのゴシック短篇小説、日本ブロンテ協会 2010 年大会シンポジウム、
2010.10.16

国内、「The Lifted Veil」における『感性』と『物質性』、日本ジョージ・エリオット協会第 15 回全国大会、2011.12.3

他機関での講義等

非常勤講師、お茶の水女子大学 文教育学部

(3) 外国人教員の活動

Stephen Clark

講演・学会発表

'Something's lost but Something's Gained: Joni Mitchell and Post-Colonial Lyric' 'Get Away from Me': Canadian Popular Music on American Culture, Sophia University (2011)

'Ana-calyptic Coleridge' Coleridge, Romanticism and the Orient: Cultural Negotiations, Kobe Conference Centre (2011)

編著書

Blake 2.0: William Blake in Twentieth-Century Art, Music and Culture (Palgrave 2012), co-edited with Tristanne Connolly and Jason Whittaker

論文

'"Only the Wings of his Heels" Blake and Dylan' (co-written with James Keery), *Blake 2.0: William Blake in Twentieth-Century Art, Music and Culture* (2012)

'"Visionary Forms Dramatic" in Blake and Baillie', 『揺るぎなき信念 イギリス・ロマン主義論集』(2012)

'Forward', *Philip Larkin's Dichotomies* (2012)

書評

review of Sally Bushell, *Text as Process: Creative Composition in Wordsworth, Tennyson, and Dickinson* 『イギリス・ロマン派研究』第 36 号 (2012)

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010 年度

Abnormality and Irony: A Study of Shakespeare's *The Taming of the Shrew*— (異常さと皮肉 シェイクスピア『じゃじゃ馬馴らし』研究)

The Frame of Entropic Perspective: Thomas Pynchon's "Entropy", *V.* and *The Crying of Lot 49* (エントロピー的世界観の構造: トマス・ピンチオン「エントロピー」『V.』『競売ナンバー49の叫び』)

Why Are the English articles difficult for Japanese learners? (なぜ英語の冠詞は英語を学ぶ日本人にとって難解であるか)

A Study of Opacity in *Pride and Prejudice*. (「高慢と偏見」における不透明性の研究)

For Children or for Adults? The Implied Reader in the Fiction of Roald Dahl (Roald Dahl のフィクションにおける想定された読者)

Walt Whitman During the Civil War: His Poems Dedicated to Abraham Lincoln (ウォルト・ホイットマンと南北戦争—アブラハム・リンカーンに捧げられた詩)

A Study of Mercutio's Role in *Romeo and Juliet* (『ロミオとジュリエット』におけるマーキュリオ研究)

Anonymous Dylan: On the Singer and His Songs (ボブ・ディラン及び彼の歌についての匿名性)

Where Does Happiness Lie?: A Study of *Silas Marner* (幸福はどこにあるのか: サイラス・マーナー研究)

The Decline of the Father: Dick Diver in F. Scott Fitzgerald's *Tender Is the Night* (F.スコット・フィッツジェラルド『夜はやさし』における「父」の崩壊)

The Hidden Meaning of Plath's Poetry (プラスの詩に隠された意味)

Transformed Perspective: A Reading of *An Artist of the Floating World* and *The Remains of the Day* (価値観の変容—『浮世の画家』『日の名残り』読解)

Food and Class in Raymond Carver's Short Stories (レイモンド・カーヴァーの短編小説における食物と階級
の関係)

2011 年度

Dolls in Steven Millhauer's Works (スティーヴン・ミルハウザー作品における人形)

A Mechanism of a Laugh in Chaplin's Comedies (チャップリン喜劇における笑いのメカニズム)

"Her Thoughts Were a Tangle of Vague Outlines": Isabel's Inconsequence and Insensibility in *The Portrait of a Lady* (「彼女の心はぼんやりとした大要のもつれでしかなかった」: 『ある婦人の肖像』におけるイザベルの非論理性と無神経さ)

Between Individual and Community: Eudora Welty's Image of the Individual in *Delta Wedding* (個人と共同体との間で—『デルタの結婚式』においてユードラ・ウェルティの呈示する個人像)

Critical Studies on Salman Rushdie's *Midnight Children* (サルマン・ラシュディ『真夜中の子供達』の批評的研究)

The Story of Walter's Success Publicized as an Editor: A Reading of *The Woman in White* (編集者として公表されたウォルターの成功物語: 『白衣の女』論)

The False Face of Walt Whitman: A Study of *Leaves of Grass* and Other Writings (ホイットマンの虚像: 「草の葉」とその他文献の研究)

Ralph Touchett in *The Portrait of a Lady*: How He Sees Isabel Archer (『ある婦人の肖像』におけるラルフ・タッチェット—ラルフはいかにイザベルを「見る」か—)

Capitalism, Racism, and Law: A Study of *The Merchant of Venice* (資本主義、人種差別と法—『ヴェニスの商人』研究—)

Received Values Reconsidered: A Comparative Study of *Macbeth* and *The Vampires* (既存の価値の再考『マクベス』と『バンパイア』の比較研究)

Madness in *Alice's Adventures in Wonderland* (『不思議の国のアリス』における狂気)

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

杉村篤志 “Moral Half-Breed”: Mark Twain's South and the American Indian (指導教員) 平石貴樹

木村明日香 A Study of the Representation of Windows in Early Modern English Drama (指導教員) 大橋洋一

木村慧 Joining in “The Long Procession of Men”: Grotesque, Masculinity, and Relativism in *Winesburg, Ohio* (指導教員) 平石貴樹

高橋留美 Edgar Allan Poe's Duality of “Voice”: Destroying Self to Survive in Society (指導教員) 平石貴樹

有井巴 Japanese-speaking Children's Interpretation of Measure Phrases Accompanying an Adjective (指導教員) 今西典子

伊藤祐輝 Syntax and Semantics of Long-Distance Reflexives: An Overt Movement Analysis (指導教員) 渡辺明

三山美緒子 The Japanese Copula (指導教員) 渡辺明

2011 年度

中村麻美 Ruins of Hope: Dystopian Novels in the Twentieth Century (指導教員) 大橋洋一

平繁佳織 James Joyce's Spatial Awareness: “Two Gallants” of *Dubliners* and “Wandering Rocks” of *Ulysses* (指導教員) 高橋和久

稲岡憲吾 A Study of Ghosts in Shakespeare's Plays (指導教員) 大橋洋一

大岡洋 Commodification and Wealth in *Tender Is the Night* (指導教員) 平石貴樹

大橋千暁 The Aesthetic Challenge of Mary Elizabeth Braddon's Sensationalism in *Lady Audley's Secret* and *The Doctor's Wife* (指導教員) 高橋和久

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

(甲)

戦海燕(ZHAN Haiyan) Dramatization of Tea Scenes in British Novels 1890s-1950s: Subversion of the Polite(19世紀末から第二次大戦後間のイギリス小説における喫茶表象の研究—社交性の転覆—)
(主査) 高橋和久 (副査) Stephen Clark・大橋洋一・阿部公彦・海老根宏

(乙)

なし

2011年度

(甲) (乙)

なし

21 ドイツ語ドイツ文学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

ドイツ語ドイツ文学研究室では、中世から今日までの、ドイツ語圏の叙事詩、抒情詩、散文作品、演劇、批評、文芸学、思想等のテキストを対象とする研究・教育、および、ドイツ語学（歴史文法と現代言語学）の研究・教育をおこなっている。

(2) 専攻としての活動

両年度の大学院兼任・非常勤教員による講義・演習・特殊研究のテーマは、次のとおりである。

[2010年度]

「ヴァルター・ベンヤミンと現代のフランクフルト学派」

「20世紀のドイツ散文」

「多和田葉子の文学講義"Verwandlungen"を読む」

「ドイツ近代抒情詩研究」

[2011年度]

「Menninghaus の"Das Versprechen der Schönheit"を読む」

「クリスタ・ヴォルフ『天使の街』を読む」

「ドイツ文学講読—トーマス・マンの小説を読む」

「ドイツ近代抒情詩研究」

また各教員による通常の研究・教育活動のほか、専任スタッフと博士課程の学生全員が参加する博士課程コロキウムの時間をもうけ、博士課程の学生の研究発表と討論を行なっている。

(3) 研究室としての活動

研究論文誌として年2号発行している『詩・言語』は、2010年度には73号・74号が、2011年度には75号・76号が発行された。

科学研究費補助金関係では、2009年度から3年間にわたり交付を受けた研究「ドイツ語史における開始相表現の変化」（基盤研究（C）、研究代表者重藤美）が、2011年度で研究を終了した。2010年度から3年間にわたり交付を受けている研究「ヒューマン・プロジェクト：人間学の文化史的視点からの再構築」（基盤研究（B）、研究代表者大宮勘一郎）は、2011年度に研究代表者大宮勘一郎が慶應義塾大学から東京大学へ移籍したことにより、本研究室を基盤に研究を継続している。「初期資料から見るルターの思想構造」（基盤研究（C）、研究代表者松浦純）は、2011年度から3年間の予定で研究を開始した。

専門学会である日本独文学会には、専任スタッフの何人かが理事会や機関誌編集委員会などに加わるのが通例となっている。2011年度には、宮田眞治が理事・機関誌編集委員およびドイツ文化ゼミナール実行委員長をつとめた。また宮田眞治は2008年度より引き続き日本シェリング協会理事・機関誌編集長の任にある。

(4) 国際交流の状況

国際交流としては、各教員の海外出張のほか、例年ドイツ語圏の作家や研究者を招いて講演会を開催している。これらの講演会や研究会は、他大学の学生や研究者にも公開している。

2010年度

Paul Michael Lützel 教授(Washington University in St. Louis) : "Hermann Broch und die moderne Kunst" (2010年6月3日)

2011年度

Christine Ivanovic ウィーン大学非常勤講師: "Das Mass der Hoffnung. Das engagierte Schreiben Ilse Aichingers"(2011年11月2日)

Sybille Krämer ベルリン自由大学教授 : "Schriftbildlichkeit: Reflexion über die Schrift zwischen Sprache und Bild" (2012年3月21日)

また大学院の学生の多くがドイツ、オーストリア、スイスへ留学している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授： 松浦 純 中近世ドイツ語ドイツ文学

教授： 重藤 実 ドイツ語学

教授： 大宮勘一郎 近現代ドイツ文学 (2011年4月より)

准教授： 宮田 眞治 近現代ドイツ文学

客員教授 (外国人教師) : Christine Ivanović 近現代ドイツ文学 (2011年9月まで)

(2) 外国人教員の活動

客員教授 (外国人教師) Christine Ivanović

在職期間 2003年10月1日～2011年9月30日

主要業績

(編集)

– Yoko Tawada. *Poetik der Transformation. Beiträge zum Gesamtwerk. Mit dem Stück „Sancho Pansa“ von Yoko Tawada.* Tübingen: Stauffenburg, 2010. 528 S.

– (zusammen mit Hiroshi Yamamoto): *Übersetzung – Transformation. Umformungsprozesse in/von Texten, Medien, Kulturen.* Würzburg: Königshausen & Neumann, 2010. 241 S.

(論文)

– *Historische Analyse und >rettende Kritik<. Karl Löwiths Appell >an den japanischen Leser< . In: Caspar Battegay, Alfred Bodenheimer, Barbara Breysach, ed. Abschied von Europa. Schriften der Gesellschaft für europäisch-jüdische Literaturstudien. Band 3. München: edition Text + Kritik, 2010. S. 142-171.*

– *Im Zwischen-Raum der Geschichte. Reisen in Texten von Heine, Freud, Celan, Aichinger. In: Klaus Hödl, Gerald Lamprecht, Petra Ernst, eds. Jewish Spaces. Graz: Studienreihe des Centrums für Jüdische Studien, 2010. S. 191-215.*

– *Auslandsgermanistik und Internationalisierung. Jahrbuch der Deutschen Schiller-Gesellschaft 54 (2010): 526-530.*

– „Meine Sprache und Ich“. *Ilse Aichingers Zwiesprache im Vergleich mit Derridas „Le monolinguisme de l'autre“.* arcadia 45/1 (2010): 94-119.

– *Yoko Tawadas exophone Celan-Lektüren. Celan-Studien N° 12. Hrsg. von der Japanischen Paul Celan Gesellschaft. Nagaoka, 2010. S. 89-101.*

– *Exophonie und Kulturanalyse. Tawadas Transformationen Benjamins. In: Christine Ivanovic (Hrsg.) Yoko Tawada. Poetik der Transformation. Beiträge zum Gesamtwerk. Mit dem Stück „Sancho Pansa“ von Yoko Tawada. Tübingen: Stauffenburg, 2010. S. 171-206.*

– *Vorwort. In: Christine Ivanovic (Hrsg.) Yoko Tawada. Poetik der Transformation. Beiträge zum Gesamtwerk. Mit dem Stück „Sancho Pansa“ von Yoko Tawada. Tübingen: Stauffenburg, 2010. S. 9-15.*

– *Im Schattenreich der Weltliteratur: Erich Frieds Hörspiel „Izanagi und Izanami“ als Übersetzung in ein Original. In: Christine Ivanovic, Hiroshi Yamamoto, eds. Übersetzung – Transformation. Würzburg: Königshausen & Neumann, 2010. 228-237.*

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「ドイツ語の与格と日本語の「に」の対照研究」

「『ニーベルンゲンの歌』歌章名の研究—主要諸写本の比較」

「E.カフカ:『判決』の翻訳をめぐる」

「イルゼ・アイヒンガーの『狼と七匹の子ヤギ』について」

2011年度

なし

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

野尻哲朗「ヴァーグナーにおけるドイツ的なもの」〈指導教員〉宮田眞治

藤田教子「フランツ・カフカの『失踪者』における〈承認〉をめぐる考察」〈指導教員〉宮田眞治

2011年度

葛西敬之「ギュンター・グラスの物語と想起」〈指導教員〉大宮勘一郎

小池麻里子「bekommen-受動の文法化」〈指導教員〉重藤実

高田梓「KriseとBildung—クリスティアン・クラハト『ファーザーラント』から見る教養小説の出発点と到着点—」〈指導教員〉大宮勘一郎

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

山本潤「記憶」の変容—「ニーベルングンの歌」および「哀歌」に見る口承文芸と書記文芸の交差—

〈主査〉松浦純 〈副査〉重藤実・宮田眞治・一條麻美子・香田芳樹

吉中俊貴「シュニッツラーの詩学」

〈主査〉宮田眞治 〈副査〉松浦純・重藤実・赤司英一郎・深堀建二郎

(乙)

なし

2011年度

(甲)

山崎泰孝「内面性の彼方へ—後期作品における呼びかけへと至るリルケ作品の発展」

〈主査〉宮田眞治 〈副査〉松浦純・重藤実・平野嘉彦・鍛冶哲郎

(乙)

なし

2 2 スラヴ語スラヴ文学

1. 研究室活動の概要

東京大学文学部にロシア語ロシア文学講座が設けられたのは1972年（昭和47年）、東京大学が創設されてのち約100年後のことである。まだ比較的若い専修課程であるが、それまで東京外国語大学、早稲田大学など限られた大学でしか行われていなかったロシア研究に新風を吹き込んだ。大学院の修士課程・博士課程は1974年度に設置されたが、すでに32名の課程博士を世に送り出している。1994年度から学部はスラヴ語スラヴ文学専修課程に、また1995年度の大学院の部局化にともない、大学院も欧米系文化研究専攻スラヴ語スラヴ語圏言語文化専門分野に改称された。主にロシアの言語、文学、文化に関する研究・教育を発展させることを課題とし、また現在はロシア以外のスラヴ語圏言語文化の研究、紹介にも積極的に取り組んでいる。

現在の教員数は教授2、助教1である。その他、他専門分野教員、総合文化研究科教員と非常勤講師の協力も得て、現代ロシア語学、ロシア語史、18世紀以降のロシア文学（詩、小説、演劇、批評）、ロシア思想、日露交渉史等の諸分野、ロシアのほかポーランド、チェコ、ブルガリア、クロアチア等の諸地域に関する研究・教育が行われている。今後、時代、分野、地域についてはいっそう拡充して行くつもりである。

現在、学部学生3名、大学院修士課程院生5名、博士課程院生9名が在籍しており、うち3名がロシアに留学中である。

研究室では研究年報『SLAVISTIKA』を発行しており、2010年度と2011年度にはそれぞれ第26号と第27号が刊行された。これは教員、大学院生および学部学生の日頃の研究勉強成果を発表する場であるが、社会の様々な分野で活動する卒業生と研究室を結ぶ場としての役割も果たしている。

東京大学スラヴ研究室は毎年多くの若い専門家たちを国内外の学会、研究会活動に参加させており、日本のロシア学、スラヴ学の一翼を担ってきた。それらの活動の運営に関しても積極的な役割を果たしているといえるだろう。また現在、東京大学はポーランドのワルシャワ大学、ロシアのモスクワ大学、国立ロシア人文大学と交流協定を結んでいるが、本研究室はそうした諸大学との交流事業においても中心的な役割を担っている。いずれにしても、特にここ数年、大学と研究室の枠を超えて国内外の他の研究機関と協力し、広く社会と交流する中で研究成果の意味を問い直すような姿勢が強まってきているのが感じられる。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

長谷見一雄	ロシア・ポーランド文学
金沢美知子	ロシア文学・ロシア文化
沼野充義	ロシア・ポーランド文学

(2) 助教の活動

乗松亨平

在職期間 2010年4月～現在

研究領域 ロシア文学・思想

主要業績 「ユーリー・ロトマンの文化記号論における「ロシア」の単数性と複数性」、『ロシア語ロシア文学研究』第43号、日本ロシア文学会、2011、35-42頁

「真実は人の数だけある？：ロシア・メディアのなかのチェチェン戦争」、野中進、三浦清美、ヴァレリー・グレチュコ、井上まどか編『ロシア文化の方舟：ソ連崩壊から二〇年』、東洋書店、2011、283-290頁

(翻訳) レフ・トルストイ『コサック：1852年のコーカサス物語』、光文社、2012、全377頁

(学会発表) 国際、「ロシア」の「曖昧」な境界をどう論じるか、ロシアの国内植民地化、パッサウ大学（ドイツ）、2010.3.23

国際、「ロシア作家のコーカサス物語における改宗」、中東欧研究国際評議会、ストックホルム市会議センター（スウェーデン）、2010.7.27

国内、「ユーリー・ロトマンの記号論における「ロシア・ソヴィエト」」、日本ロシア文学会、熊本学園大学、2010.11.6

- 国際、「バフチン、ロトマン、ロシアのポスト記号論派における多言語主義の場所」、文化的多言語主義、タルトゥ大学（エストニア）、2012.2.29
- (受賞) 国内、表象文化論学会奨励賞、表象文化論学会、2010
- 国内、日本ロシア文学会賞、日本ロシア文学会、2011
- (他機関での講義等) 非常勤講師、首都大学東京、「ロシア語Ⅰ・ロシア語Ⅱ」、2010.4～
- 非常勤講師、千葉大学、「人文科学の現在4」、2010.4～2010.9

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- 「ゴーゴリ『ネフスキイ大通り』の円環」
- 「『眠らない男』のユートピア」
- 「19世紀都市の生活 アンナカレーニナより」

2011年度

- 「レフ・トルストイ『イワンのばか』について」
- 「バザーロフについて」
- 「チャーホフ『サハリン島』第6章『エゴールの物語』に見る目的意識について」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

- 池田正久「チャーホフとユダヤ人—『泥沼』を中心に—」(指導教員)長谷見一雄
- 関岳彦「プロツキー初期作品の研究」(指導教員)長谷見一雄
- 奈倉有里「サーシャ・ソコロフ『ばかの学校』への道」(指導教員)長谷見一雄

2011年度

- 金沢友緒「トゥルゲーネフ『ファウスト』にみる物語の方法—実験者と観察者の狭間で」(指導教員)長谷見一雄
- 中村秀隣「ドストエフスキーのリアリズムにおけるモデルの問題」(指導教員)金沢美知子
- 東和徳「変容する幼子—アンドレイ・ベールィ『コーチク・レターエフ』試論—」(指導教員)長谷見一雄

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

- 伊藤友計「革命と詩人 帝政末期からソヴェト初期の文芸論争とB. パステルナーク」
- 〈主査〉沼野充義 〈副査〉長谷見一雄・金沢美知子・安岡治子・前田和泉
- 平野恵美子「バレエ《火の鳥》の起源：20世紀初頭ロシア文化と帝室劇場」
- 〈主査〉沼野充義 〈副査〉長谷見一雄・金沢美知子・浦雅春・片岡康子・鈴木晶

(乙)

なし

2011年度

(甲)

- 野町素己「スラヴ諸語における所有文—その構造と派生的構文の比較・類型論的研究—」
- 〈主査〉沼野充義 〈副査〉長谷見一雄・西村義樹・中島由美・Romuald Huszcza

(乙)

なし

2 3 現代文芸論

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

現代文芸論専修課程（略称「現文」）は、2006年度まで存在した「西洋近代語近代文学専修課程」（略称「西近」）を発展的に引継ぎ、新たな研究室として2007年度に発足した。「西近」は、ひとつの言語・国の枠内にとどまることなく、西洋の近代文学・語学を広く学ぶことを奨励するとともに義務付けた専修課程であったが、「現文」はその精神を受け継いでいる。

初年度は専任教員2名と助教による体制でスタートし、「西近」時代にはなかった専用の共同研究室を確保するとともに、事務補佐員を採用して事務・運営体制を整えた。また学部課程に加えて大学院課程が新たに設けられ、学部での研究をさらに発展させ深めることが可能になった。

西洋近代の文学・語学を広く学ぶという基本姿勢のいわば裏返しとして、留学生が西洋のバックグラウンドから日本語・日本文学を研究することも奨励した結果、2007年からまさにそのような目的を持つ留学生が大学院に入学していることは注目に値する。また外国人研究員、外国人研究生も積極的に受け入れている。

専任教員および助教は、広域英語圏、広域スペイン語圏、ロシア東欧、現代日本などの様々な領域の研究・教育に従事しており、世界の文学を幅広くカバーしているが、研究・教育は地域的なアプローチに限定せず、むしろ様々な地域間を越境・横断するような「世界文学」「翻訳」「批評」などの視点に重点を置いて、教員や研究者、大学院生・学生などの間の意見交換、討論、交流を活発に行っている。また、専任教員の論文の他、研究活動に関わる若手研究者・大学院生などの寄稿を得て現代文芸論研究室論集『れにくさ』を刊行している（2009年創刊、ほぼ年刊で発行。2011年には第3号「特集 世界文学へ／世界文学から」を発行した）。

非常勤講師による授業も、イディッシュ語、ポーランド語などの外国語をはじめ、表象文化、言語理論、幻想文学など、現代文芸論の理念にそった多彩な内容を提供し、当専修課程以外の学生も多数受講している。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2007年の創設時にスタートした大学院は、その後学内外から順調に学生を集め、毎年平均して修士課程に6名程度、博士課程に3～4名程度の大学院生が入学している。また外国からの留学生も積極的に受け入れている（国費留学生を含む）。これらの学生のバックグラウンドは多様であり、出身国はロシア、ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ブルガリア、アメリカ合衆国、イギリス、ベネズエラ、中国、韓国、シンガポール、カザフスタンなど、多岐にわたる。そのことも刺激となって、学生相互の交流はきわめて盛んである。

(3) 研究室としての活動・国際交流活動

科研費研究「グローバル化時代における文化的アイデンティティと新たな世界文学カノンの形成」（基盤B、平成20年度～24年度）は、現代文芸論研究室の専任スタッフ全員が参加する研究プロジェクトであり、当研究室の研究活動の中心に位置づけられる。この資金を活用して、一連のシンポジウムや特別講義などを行ってきた。

研究室が主催・共催してきた主なイベントとしては、2010年度は、「ベトナム文化人との懇話会」（4月6日、国際交流基金協力）、Michael Finke氏特別講義（5月12日）、マリア・コダマ氏特別講演「記憶について」（5月20日）、講演会「ロシアの名優カリーギン、チャーホフとロシア演劇について語る」（6月11日）、国際ペン東京大会2010協賛・特別講演シリーズ（9月27日～29日、「サスーン+レヴィツカ特別ジョイント講演会」「アンドレイ・ビートフ、ロシア文学の現在を語る」「ミハイル・シーシキン特別講演」「ヴラジミール・ピシュタロフ×山崎佳代子講演・朗読会」）、オリガ・ペトローヴァ講演会「ウクライナ・バロックとペンゼル」（11月12日）、「多和田葉子+高瀬アキ 言葉と音のパフォーマンス」（表象文化論研究室と共催、11月26日）、国際シンポジウム「社会制度としてのロシア文学—レイトブラット氏を迎えて」（スラヴ文学研究室と共催、12月17日）、「ユーラシア世界研究会」（5回にわたって開催）、2011年度は、エヴァ・バワシュ＝ルトコフスカ博士（ワルシャワ大学）特別講義（6月14日）、ノーベル賞作家マリオ・バルガス＝リョサ氏講演会（6月22日、文学部主催企画に企画協力）、講演と詩の夕べ「バイリンガル詩人 ゲンナジイ・アイギをめぐって」（6月27日）、国際シンポジウム「世界文学とは何か？」（ゲスト：ダムロッシュ、池澤夏樹、11月12日）、特別講義「リベラトゥラー—新しい文学ジャンル」（ゲスト：バザルニク、ファイフェル、12月2日）、松浦寿輝教授東京大学退官記念講演（1月16日）などがある。

その他の国際交流に関して言えば、東京大学と学術交流協定を結んでいるマンチェスター大学およびワルシャワ大学との交流（学生の交換など）は、現代文芸論研究室の教員が世話役となって実施している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

教授：野谷文昭（ラテンアメリカ文学、広域スペイン語圏文学）

教授：柴田元幸（アメリカ文学、広域英語圏文学、翻訳論）

教授：沼野充義（ロシア東欧文学、世界文学へのアプローチ）

(2) 助教の活動

加藤有子

在職期間 2010年4月～

研究領域 ポーランド文学・文化、表象文化論

主要業績

著書

共著、Wiera Meniok (ed.)、『Inspiracje Schulzowskie w literaturze: Materiały naukowe IV Międzynarodowego Festiwalu Brunona Schulza w Drohobyczu』、2010

共著、Małgorzata Kitowska-Lysiak (ed.)、『Białe plamy w schulzologii』、Lublin: Wydawnictwo KUL、2010.6

論文

「イメージ、テキスト、書物—ブルーノ・シュルツの『砂時計の下のサナトリウム』の挿絵と『偶像賛美の書』」、『スラブ研究』、57号、1-25頁、2010

「ブルーノ・シュルツ『偶像賛美の書』とザッヘル=マゾッホ『毛皮を着たヴィーナス』—マゾヒストの身振り、あるいは創作の作法」、『わにくさ』、2号、62-85頁、2010.12

「物語／歴史と祖型—ブルーノ・シュルツの小説にみられるドイツ語圏の同時代作家の「影響」再考（マン、カフカ、ロート、クービン）」、『西スラヴ学論集』、第14号、89-124頁、2011.6

解説

「ミウオシュのいたクラクフ」、『現代詩手帖』、11月号、122-123頁、2011.11

学会発表

国際、「Księga jako topos pisania i rysowania. Ilustracje Brunona Schulza do *Sanatorium pod klepsydrą*」、IV International Bruno Schulz Festival, The Ark of Bruno Schulz's Imagination、Drohobycz (Ukraine)、2010.5.27

国内、「目から手へ—ブルーノ・シュルツの短編「天才的な時代」と目、手、足」、西スラヴ学研究会、立教大学、2011.6

国際、「Dialogues with ‘Authorities’ in the Prose of Bruno Schulz」、ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies)、Washington DC、2011.11

マスコミ

「追悼シンボルスカ」、『読売新聞』、2012.2.14

翻訳

個人訳、『ピンゼル』、未知谷、2011.10

個人訳、Clare Cavanagh、"Mieszko and Dostoevsky's Russia"、『倒錯的な快感—ドストエフスキーを読むミウオシュ』、『現代詩手帖』、11月号、112-121頁、2011.10

共訳、Czesław Miłosz、"To,ほか"、関口時正・沼野充義（監訳）、加藤有子ほか、『チェスワフ・ミウオシュ詩集』、2011.11

(3) 外国人研究員・内地研究員

外国人研究員

ローランド・ケルツ（ジャーナリスト）、研究題目「現代日本・アメリカ文化における異文化交流」2010年4月～2012年3月。

アルベナ・トドロヴァ（ソフィア大学博士候補・講師、国際交流基金日本研究フェロー）、研究題目「トルストイと有島武郎」2010年8月～2011年9月。

キム・ジンヨン（延世大学教授）、研究題目「日本におけるロシア文学の初期受容」2011年1月20日～3月12日。

ユン・セラ（ウルサン国立科学技術大学助教授）、研究題目「ロシア文学におけるノヴゴロドのイメージ」2011年1月24日～2月23日。

ユン・セラ（ウルサン国立科学技術大学助教授）、研究題目「トルストイ『アンナ・カレニナ』の詩学」、2012年2月13日～2月29日。

内地研究員

2010年度 堀真理子（青山学院大学）

2011年度 内山加奈枝（日本女子大学）

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「ル・クレジオにおける物語への回帰—『アンゴリ・マーラ』をめぐって」

「児童文学翻訳者としての石井桃子」

「別役とベケット—日本の六〇年代演劇」

「自分ということ—ジョン・アーヴィング『熊を放つ』論—」

「夏目漱石『行人』研究—英訳 "The Wayfarer" をめぐって—」

「C・S・ルイス『ナルニア国ものがたり』の翻訳論—瀬田貞二訳を中心に—」

「北島の詩作に見るガルシア＝ロルカの影響」

「フランコ・モレットの文学史概念とレトリックについて」

「モダンと希望—プルーストとフォークナーの希望学—」

Between Now-Here and Nowhere: The Destruction of Dichotomy and Its Reconstruction in *Fire and Hemlock* (今—ここどこでもないの間で: 『九年目の魔法』における二項対立の解体と再構築)

Eternal Verities: On James Tiptree, Jr.'s Utopia (永遠の真実: ジェイムズ・ティプトソージュニアの描いたユートピア)

On Kazuo Ishiguro's *The Remains of the Day* and *Never Let Me Go*: What Has Changed and What Has Not (カズオ・イシグロの『日の名残り』と『わたしを離さないで』: 変化したこととしないこと)

American Immobilization: From Theodore Dreiser to Bret Easton Ellis (アメリカの不動化—セオドア・ドライサーからブレット・イーストン・エリスへ)

「「事実」を装う序文—デフォーとホーソーンを中心に—」

2011年度

「三崎とイシグロ—この無慈悲で、残酷な世界でも—」

「文学に見る「名づけ」—スターン、ゴーゴリ、ラヒリ、井上—」

Ambiguous Boundaries: Dualism in Thomas Pynchon's *V* (曖昧な境界—トマス・ピンチオン『V』における二元性)

「ゼーガース「ハイチの婚礼」をめぐって—人種を軸とした他者表象—」

Wandering, Home and Death in Samuel Beckett's Early Work: A Study of *More Pricks Than Kicks* and *Murphy* (サミュエル・ベケットの初期作品における「さまよい」と「住みか」と「死」—『マーフィ』および『蹴り損の棘もうけ』に関する研究)

「倫理の崩壊—『ブラッド・メリディアン』と『枯木灘』における暴力の背景—」

「児童文学における「生きている」人形について」

「ピンターとムロジェックにおける"Absurd"の演劇」

「明治期の翻案歌舞伎—『人間万事金世中』をめぐって—」

「アルゲダスの小説作品における二つの世界の葛藤—初期短編から『深い川』に至るまで—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

鄭麗英「戦争文学における「こども」—抑圧と解放の狭間で」(指導教員) 柴田元幸

高橋知之「夢のかたち—若きドストエフスキーとユートピア夢想」(指導教員) 沼野充義

坪野圭介「人工性の幻想—スティーヴン・ミルハウザーと現代」(指導教員) 柴田元幸

見田悠子「死から孤独へ—ガブリエル・ガルシア＝マルケスにみるオブセッションからの解放」(指導教員) 野谷文昭

2011 年度

今井亮一「トラウマと物語化—現代西欧文学・映像作品を通して—」(指導教員) 柴田元幸

棚瀬あずさ「ルベン・ダリオの詩と詩論：詩人の使命、反逆、探求」(指導教員) 野谷文昭

柳田大造「ホセ・レサマニリマ『オッピアーノ・リカリオ』における死の形態学」(指導教員) 野谷文昭

AZUAJE, ALAMO MANUEL「共鳴する世界文学へ：村上春樹の『ねじまき鳥クロニクル』とロベルト・ボラーニョの『2666』における暴力と性と夢の描写」(指導教員) 野谷文昭

BOYD, DAVID GABRIEL「Puraibashi: A Lexicon of the *After the Banquet Trial*」(指導教員) 柴田元幸

三田紗央里「歴史・トラウマ・物語化—現代西欧の文学・映像作品を通して—」(指導教員) 大橋洋一

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

(甲) (乙)

なし

2011 年度

(甲) (乙)

なし

2 4 西洋史学

1. 研究室活動の概要

西洋史学研究室は1887年に史学科として発足した後、1919年に西洋史学科として独立、講座の増設や制度の改変を経て、現在の専修課程に至っている。おもにヨーロッパ史に関する研究および教育に従事している。この間、多数の指導的研究者・教育者を輩出し、また中等教育や出版・マスコミ、広告、通信、金融、製造など、さまざまな企業にも有為の卒業生を送りだしてきた。

西洋史学は地理的には、ヨーロッパはもちろん、周辺地域、さらに南北アメリカ大陸までも視野に入れ、時代的には古代から現代に至る、実に数千年を対象としている。また伝統的に人文地理学もその対象としてきた。これら広範にわたる分野をカバーして教育・研究にあたる専任教員は、2010年度、2011年度は教授6名、助教1名で構成された。さらに多様な視点を提供し、教育を充実させるため、大学院演習に関しては総合文化研究科の教授2名から、学部講義に関しては学外の多彩な非常勤講師陣（2010年度4名、2011年度5名）から協力を得ている。

学部の専修課程は、毎年ほぼ定数25名程度の進学者を迎え、在籍学生数は2010年度60名、2011年度67名である。学部生に対しては、西洋史学特殊講義や西洋史学演習などを開講し、授業以外でも卒業論文作成の指導にあたっている。またティーチング・アシスタントを務める大学院生（博士課程）がサブゼミを運営し、卒業論文作成を支援している。大学院（欧米系文化研究専攻西洋史学専門分野）では毎年、博士課程3名程度、修士課程5名程度の入進学者を迎えており、在籍者は2010年度35名、2011年度34名である。授業は演習を中心としており、指導教員は時間外にも学位論文の作成指導を行っている。博士課程在籍中、多くの大学院生がイギリス・ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・スイス・北欧・ロシア・アメリカなどに留学して現地の研究機関で研修し、博士論文の準備をおこなう。伝統的な政治史、経済史に留まらず、社会史、さらに異文化接触や公共圏の問題など、国際情勢、研究動向の変化にも対応した、多様なテーマで教育、研究が行われている。

また学会活動への参与も精力的である。日本西洋史学会大会運営理事校を務め、また他の研究室とともに、財団法人史学会に理事、評議員、編集委員を送り、『史学雑誌』の編集や大会開催などの業務を遂行している。その他、ほとんどの教員、大学院生は日本ばかりでなく、各国の学会・研究会に理事・評議員・会員として関与している。また『国際歴史科学文献目録IBHS』（本部ローマ）、『国際中世学文献目録IMB』（本部リーズ（英国））をはじめ、国際的な文献目録の編集協力を研究室として引き受けている。さらに各教員は、自ら海外で研究発表・雑誌編集・博論審査を行うとともに、海外の研究者と連携して、国内外で国際会議や講演会を定期的に行い、その成果を邦語（翻訳）や欧語で公刊している。これらの会議、講演会には教員の他、大学院生、学部学生も報告者、あるいは準備運営委員として積極的に参加している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

近藤和彦	教授	近代イギリス史
石井規衛	教授	現代ロシア史
深澤克己	教授	近代フランス史
姫岡とし子	教授	近現代ドイツ史
高山博	教授	西洋中世史
橋場弦	准教授（2010.10より教授）	古代ギリシア史

(2) 助教の活動

佐藤昇	1973年10月16日生
在職期間	2009年4月1日～現在 助教
研究領域	古代ギリシア史
業績	
（著書）	共著、I. Worthington et al.、『Brill's New Jacoby』、Leiden [Brill Online]、2010 共著、大芝芳弘、小池登編、『西洋古典学の明日へ』、知泉書館、2010.3 共著、桜井万里子・師尾晶子編、『古代地中海世界のダイナミズム』、山川出版社、2010.5 訳書、ロビン・オズボン『ギリシアの古代：歴史はどのように創られるか』、刀水書房、2011.7
（論文）	「回顧と展望：古代ギリシア」、『史学雑誌』、119-5、2010.5

- 「Antigonos (no. 775)」、『I. Worthington et al. (eds.) Brill's New Jacoby, Leiden』、2011.4
 (学会発表) 国内、「Guo Xialing 報告へのコメント：民主政の形成と拡散」、古代世界研究会サマーセミナー、
 東洋大学 (東京)、2010.9.26
 国際、「A Comment on Che Jayoung: Gortyn Code and Women's right」、日中韓西洋古代史シンポジ
 ウム、ソウル大学 (ソウル)、2010.10.23
 国内、「古典期アテナイの政治家—外交と社会変動」、第9回古代史研究会大会、京都大学 (京都)、
 2010.12.19
 (啓蒙) 「翻訳：アイリン・ポリンスカヤ「共通聖域と他所 (よそ) の神々」、『クリオ』、24、2010.5
 「翻訳：ロバート・C・T・パーカー「古代ギリシアの供犠：大問題」、『クリオ』25、2011.5
 (研究テーマ) 文部科学省科学研究費補助金、研究代表者、「古代東地中海世界国際関係におけるエリート間の紐帯に
 関する研究」、「Studies on the Elites' Relationships in the Ancient Eastern Mediterranean
 World」、2010～
 (他機関での講義等) 非常勤講師、東京女子大学、「世界の文化 (A) ヨーロッパ「古代ギリシアと近代ヨーロッパ」、
 2010.4～2010.8
 非常勤講師、東京女子大学、「西洋史演習 (古代) A1」「3年次特殊演習 (史学)」「西洋古代史研究
 (大学院)」「西洋史学演習」、2011.4～2012.3

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- 「古典期アテナイの穀物供給」
- 「ゲルツェンの思想と行動ロンドン亡命中の出版活動を中心として」
- 「フルシチョフ農政に関する一研究 —1958年のMTS解散について—」
- 「戦間期イギリスにおける経済政策」
- 「ジョージ・ケナンと対ソ封じ込め政策」
- 「穀物法廃止語のイギリスにおける農業生産について」
- 「20世紀初頭のイギリス海軍政策とドイツ海軍の「脅威」」
- 「九世紀末から十世紀初期におけるマーシア」
- 「古典期アテナイの穀物供給殺人訴訟における法手続きの柔軟性 (procedural flexibility) について—
 apagoge/endeixis の分析を中心として—」
- 「「近代郵便の父」ローランド・ヒルの再評価」
- 「1930年代後半のソ連政治に関する研究」
- 「1917年のロシア革命と飢餓」
- 「第一次五ヵ年計画と社会主義・スターリズム」
- 「スペイン内戦におけるスペイン共産党の政治路線の分析」
- 「17世紀メキシコの異端審問とユダヤ人」
- 「ヴァイマル共和国期の平和主義」
- 「エリザベス1世の神格化について」
- 「14—15世紀フランスにおける王権と諸侯」
- 「イギリス都市ルネサンス期の都市改良」

2011年度

- 「19世紀から20世紀への転換期におけるウェールズのナショナリズムとその運動」
- 「紀元前1～2世紀共和政ローマにおけるムニキピウム」
- 「19世紀ロシア帝国の近代化と農民関係」
- 「中世ヨーロッパ都市の女性とベギン運動」
- 「戦間期から第二次世界大戦期のイギリスにおける左翼知識人のソ連・共産主義へのまなざし」
- 「インド総督リットン (1876-80) の再評価」
- 「オーストリア・ハンガリー帝国軍隊の超民族性」
- 「中世紀北イタリアの教育と社会」

「十字軍国家における支配階級の構造」
 「18世紀ロンドンにおける治安維持」
 「古典期アテナイにおける三段襜褕奉仕役と役人」
 「スペイン内戦と軍事技術」
 「19世紀イングランドにおける労働者階級の私営学校」
 「スティーヴン治世の「アングロ＝ノルマン王国」」
 「神聖ローマ帝国におけるタクシス家の郵便経営—1630年代前半の崩壊の原因について、16世紀後半～17世紀前半を中心に—」
 「12・13世紀スコットランドにおけるストラサーン伯と伯領」
 「19世紀前半パリにおける社交組織の展開—「セルクル」の事例研究を中心に」
 「中世初期アイルランドにおける修道院制度」
 「民族と安全保障：戦後東西パワーバランスの下におけるオーストリア共和国のアイデンティティ確立について」
 「中世イタリア都市の教育について—フィレンツェを中心に—」
 「王と二つの言説：オーストリア継承戦争をめぐるプロイセン王フリードリヒ2世の言行の「矛盾」と実際」
 「『歴史とは何か』改訂版に向けて—1961年以降のE.H.カーの思索—」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

小林祐門「アテナイにおける私的宗教団体の変遷」〈指導教員〉橋場弦
 西村千枝「17世紀初頭ラ・ロシュエルの市政と改革派宗派」〈指導教員〉深澤克己
 内田康太「共和政末期ローマにおけるコンティオの利用に関する考察」〈指導教員〉橋場弦
 小山内孝夫「16・17世紀イングランドにおけるバルト海貿易—ハルを中心に—」〈指導教員〉近藤和彦

2011年度

関沼耕平「第一回十字軍における南仏聖俗諸侯」〈指導教員〉高山博
 仲田公輔「軍事書『タクティカ』とレオン6世治世期(886-912年)のビザンツ帝国東方辺境」〈指導教員〉高山博
 木谷明人「アルフォンソ10世期のムルシア王国における征服地社会の構造」〈指導教員〉高山博
 森本光「国王宮廷への伺候について：フリードリヒ1世治世におけるバーベンベルガーを例に」〈指導教員〉高山博

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

青島陽子「19世紀中葉「大改革」期ロシアにおける一般教育制度改革—教育専門職者の登場と教養層の拡大—」
 〈主査〉石井規衛 〈副査〉姫岡とし子・鈴木淳・和田春樹・橋本伸也
 阿部俊大「バルセロナ伯領における征服と植民：フロンテラ（辺境）における統治構造・社会発展・異文化並存の一事例（12世紀—13世紀初頭）」
 〈主査〉高山博 〈副査〉深澤克己・橋場弦・大稔哲也・池上俊一
 田中創「帝国統治と弁論—後期ローマ帝国下の東地中海都市」
 〈主査〉橋場弦 〈副査〉高山博・佐藤信・桜井万里子・木村凌二
 小野寺拓也「イデオロギーと「主体性」—第二次大戦末期ドイツ国防軍兵士の野戦郵便—」
 〈主査〉姫岡とし子 〈副査〉近藤和彦・野島陽子・石田勇治・木村靖二

(乙)

なし

2011年度

(甲)

藤崎衛「十三世紀における教皇庁役人および教皇家人に関する研究」
 〈主査〉高山博 〈副査〉深澤克己・橋場弦・大稔哲也・池上俊一
 工藤晶人「境域の形成—フランス植民地期アルジェリアにおける学知と空間編成 1830—1914」
 〈主査〉深澤克己 〈副査〉姫岡とし子・近藤和彦・柳橋博之・平野千果子

(乙)

なし

25 社会学

1. 研究室活動の概要

東京大学における社会学の歴史は古い。社会学が「世態学」という名で初めて講じられたのは1881（明治14）年のことである。そして、1886（明治19）年には「社会学」の名で独立の学科目となり、外山正一や建部遯吾らに支えられて大きく発展した。1919（大正8）年には社会学科となり、翌1920（大正9）年には2講座になった。その後、戸田貞三のもとで社会調査を取り入れた経験科学がめざされた。

1961（昭和36）年に3講座となり、1960年代には産業社会学、農村社会学、知識社会学、実験社会学（小集団論）、政治社会学、経済社会学にわたって教授陣が整えられ、現代社会を社会学の観点から包括的に教育研究する基礎が築かれた。そして、これをもとに社会学は、文化人類学などと協力しつつ文学部から独立して一つの学部となることをめざしたが、1960年代末に起こった大学闘争の嵐の中でその構想は立ち消えとなった。

1974（昭和49）年に社会心理学専修課程の創設に協力し、1983（昭和58）年以降は大学院総合文化研究科の創設に協力した。1987（昭和62）年から、社会心理学および新聞研究所と協力してふたたび学部となることをめざしたが、新聞研究所の社会情報研究所への改組により、また、東京大学全体として大学院に重点をおいて改革を進めることになったため、1990（平成2）年以降は社会学研究科の部局化に向けて努力がなされた。

しかし、1993（平成5）年になって、人文科学研究科と協議して合同で1つの研究科として部局化することがめざされ、1995（平成7）年度からは、社会学と社会心理学は社会情報研究所の大学院部分とともに、人文社会系研究科の専攻のひとつとして社会文化研究専攻を構成し、その中の社会学専門分野を担当する研究室として今日に至っている。

2010年現在の教員数は、教授5名、准教授2名、助教1名であり、カバーする領域は主として学説・理論、家族、ジェンダー、セクシュアリティ、世代、人口、計量、階層、社会意識、文化、計画、福祉、技術、環境などである。

毎年前期課程から進学してくる学部学生は50名、また学士入学で定員10名の学生を受け入れている。進学してくる学生の関心は多様であり、卒業論文のテーマも広い範囲におよんでいる。必修科目、演習、特殊講義をつうじて、系統的で体系的な教育に力をいれている。

学部生の卒業後の進路は、これまで新聞、放送、出版などマスコミ関係に3分の1程度の学生が就職していたが、最近では金融やメーカーに就職する者や、国家公務員・地方公務員になる者も増えてきた。さらに学部卒業生の約1割程度は、社会学その他の大学院に進学している。大学院修士課程入学者は外国人留学生を含めて10名前後である。修士課程入学者はこれまでほとんどが博士課程に進学していたが、修士号取得後、国家公務員になったり研究所研究員、あるいは民間企業に就職する者もでてきた。院生総数は60名ほどであり、研究テーマもきわめて多様である。部局化とともに博士号取得のための指導にも力をいれており、論文博士に加えて、課程博士を輩出している。

研究室全体でかかわっている活動としては日本社会学会の活動がある。教員全員と多数の大学院生が会員として毎年大会などで活躍しており、機関誌『社会学評論』の発行に大きく貢献してきている。このほか、各種の社会学関連の学会や研究会の運営や活動に教員や大学院生がそれぞれ深くかかわってきている。また、大学院生が中心になって、若手社会学者向けの雑誌『ソシオロゴス』を毎年編集・発行している。

本研究室にも留学生は多い。もっとも多いのは韓国からの留学生であり、研究生として1~2年過したあと大学院にはいり、社会学の博士号をとって本国に戻って活躍している人がすでに数名でてきている。ついで多いのは中国からの留学生である。このほか、他のアジア諸国や欧米からの留学生もいる。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

盛山和夫

専門分野 階層論

在職期間 1985年4月~2012年3月

上野千鶴子

専門分野 性・世代・家族の社会学

在職期間 1993年4月~2011年3月

松本三和夫

専門分野 科学社会学
在職期間 1996年4月～現在

武川正吾

専門分野 社会政策
在職期間 1993年4月～現在

佐藤健二

専門分野 歴史社会学
在職期間 1994年10月～現在

白波瀬佐和子

専門分野 人口の社会学
在職期間 2006年4月～現在

赤川学

専門分野 社会問題の社会学
在職期間 2006年4月～現在

出口剛司

専門分野 理論社会学・社会学史研究
在職期間 2011年4月～現在

(2) 助教の活動

常松淳

在職期間 2010年4月～現在

研究領域 責任の社会学

主要業績 『責任と社会——不法行為責任の意味をめぐる争い』(2009年, 勁草書房)

教育実績 2005年度～2011年度 学習院大学非常勤講師

2009年度～2011年度 東京女子大学大学非常勤講師

(3) 外国人研究員・内地研究員

2010年度 李蓮花

ORTABASI, MELEK

李潤熙

2011年度 李蓮花

李潤熙

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

「インストゥルメンタルの社会学」

「スポーツ振興政策に対する日本サッカー文化の可能性」

「秋葉原に見る新しいまちづくりの萌芽」

「一学説史的展開と測定手法に関する考察を中心として」

「インターナショナルスクール生のファッションアイデンティティ —ベルギーメ校を事例として—」

「経営コンサルタントの専門性とビジネス書の能力観」

「広島市の平和教育は現代の大学生にどのように受容されているか。」

「産婦人科臨床における未成年女性の性的自己決定権について」

「「同じ女性として」—私のFGM批判は正当化されるのか」

「組織論の展開—企業組織を題材として—」

「主婦向け実用雑誌における料理のイメージ」

「テレビゲームが育むもの」

「ニューカマーの子どもたちの現状から多様性を求める社会のあり方をさぐる」

「芸術家のキャリア形成」

「地球温暖化対策の変遷」

「新しいインフラストラクチャーとしてのインターネットと情報革命の意義」
「監視カメラの増加とそれに関する社会の変化」
「アルコール問題における社会と個人—酒に対する許容と規制の歴史からの考察—」
「環境配慮行動の動機に対する社会学的考察」
「臓器移植法改訂再考」
「子どもたちのこころの健康を支える人々」
「全体主義の勃興の本質と要因」
「現代音楽文化と消費社会」
「メディア文化財のコモンズ問題に関する考察」
「キリスト教会立リースクールの「居場所」としての機能とその宗教性との関連—神奈川県「チャーチスクール」事例研究—」
「常盤平団地における住民運動」
「精神障害者の地域生活支援—精神保健福祉士の課題と展望—」
「地球の温暖化・寒冷化に関する考察と分析」
「組織事故に対する安全管理」
「「日本人」であるという意識はどのように形成されるのか。」
「ドイツ介護制度におけるツイヴィルディーンストの役割 ツイヴィルディーンスト…良心的兵役拒否者による社会奉仕活動」
「都市空間における公共性について」
「歴史的環境問題からみた生活環境主義の批判的検討」
「CSR 導入による、企業の環境・社会貢献活動の変容」
「「ボラバイト」とは何か」
「女性誌にみる理想の女性像の変遷」
「インターネットにおける情報信頼性判断力と「カリスマ」の出現」
「現代日本における社会運動と社会問題」
「男子学生寮における「教理」の衰退に対する考察」
「ウォーラーステインの近代世界システム論に基づく今後のヘゲモニー国家の考察」
「ユーザーからみた再生可能エネルギー」
「ニュータウン・団地の未来」
「新型インフルエンザのリスクを「売り込む」プロセスの研究」
「ソーシャルメディアによる社会関係資本の形成と変容—大学生の Twitter 利用を事例として」
「東京都条例「非実在青少年」問題を考える」
「現代日本人の食と身体に関する社会学的考察」
「デイズニープリンセスとジェンダー—女子大学生の女性像—」
「教育における地域格差の時系列的分析」
「日本の高齢者と孤独死」
「仮想アイテムにおける価値観」
「歴史的商業地域の変化—京都錦市場から考える—」
「エコテロリズム」
「法曹人口問題のゆくえ」
「女子大学—その成立と展開—」
「土地の公共性—公共財としての土地の利益配分と住民参加」

2011 年度

「日本の高齢者福祉の現状と課題」
「名勝保護論の社会学」
「在日韓国人の地方参政権に関する考察」
「地域における障害者福祉の在り方」
「「氷点」の社会学」
「いじめ対策の効果測定研究のシステマティック・レビュー —いじめに有効な対策は何か—」
「消費に関する「CO2 の可視化」についての考察」

「科学技術と政策に関する社会問題—集団予防接種での肝炎感染問題を事例として—」
「「非実在青少年」をめぐる攻防—東京と性施用年条例改正案「6月否決」のレトリック分析」
「日本のリバースモーゲージ制度」
「アニメ「聖地巡礼」におけるインターネットの役割」
「中華人民共和国における新聞制度と都市報の発展」
「インターネットと表現」
「日本の生活保護制度と自立支援制度について」
「災害時における流言・デマの分析—3.11 東日本大震災を事例に—」
「2011 年度施行の新学習指導要領の効果—文部科学省の意図と小学校現場教育の一貫性—」
「東大生は 50 年間でどのように変化したか」
「生殖補助医療規制の検討—代理懐胎を中心に—」
「家族形態の変化と社会学」
「BOP ビジネスと女性のエンパイクメントの可能性」
「浮気と本気—大学生の恋愛観—」
「日本文化のガラパゴス化」
「日本の原発輸出を考える」
「死刑制度の犯罪抑止力」
「超高齢社会における地域コミュニティのあり方」
「年金制度の改正における社会的背景の考察」
「ダイオキシン報道と福島原発放射能報道の比較研究」
「都市再開発問題の構造—下北沢再開発問題に着目して—」
「インターネット時代のアイデンティティ—ネットユーザーは自己一貫性の規範から自由なのか—」
「ヒト胚研究に対する公的規制の特徴とその社会的背景」
「女子は本当に働きたい？」
「科学技術と市民の関係深化を目指す」
「「いじめ」言説の変容の歴史」
「日本語を母語としない人への情報伝達—緊急時の現状と問題点—」
「現代社会における児童虐待問題の構図」
「日本におけるベーシック・インカム論と同構想の原理的問題点に関する考察」
「多文化主義の展開と将来—オーストラリアの事例から—」
「高齢者虐待の背後にある高齢期の親子関係」
「現代日本における大卒の社会的意義に対する考察」
「日本の高齢者介護における在宅ケアの概要と今後の課題について」
「教育から労働市場へのスムーズな移行に関する展望」
「電子ペーパー技術の不可能性」
「大学新卒の就職活動早期化とゲーム理論」
「若者の消費行動への視線—「消費しない若者」は悪か」
「日本の唱歌教育と校歌—校歌の始まりに焦点を当てて—」
「アパルトヘイトと南アフリカ社会」
「J-Pop の社会学的分析—日本化する「英語」に焦点を当てて—」
「フィギュアスケートの報道に対するネットユーザーの反応」
「婚圧—「婚活」時代の配偶者選択戦略に見る新たな婚姻規範」
「高学歴女性のライフコース」
「現代のタバコ規制—受動喫煙防止条例を例に—」
「雇用システムの日米独比較—若年雇用に着目して—」
「衝突安全基準はどのように生まれたか」
「『弱者』の社会学」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

河村賢「社会的現実の存在論と認識論—ジョン・サール「社会の哲学」の批判的検討」（指導教員）盛山和夫

税所真也「専門職後見人による支援の社会学的研究」〈指導教員〉武川正吾
申慧晶「日本の日雇い派遣という働き方に関する探索的研究—日雇い派遣労働者にとって日雇い派遣はいかなる働き方か」〈指導教員〉盛山和夫
富永京子「抗議イベントとしての2008年洞爺湖サミット反対運動—参加者のキャリアに及ぼす影響を中心に—」〈指導教員〉佐藤健二
羅一等「格差関連新聞報道の計量テキスト分析—1980年代から2009年までの3大新聞を対象に—」〈指導教員〉盛山和夫

2011年度

XIE XIN「90年代以降中国の高等教育規模拡大に伴う教育機会の階層間格差に関する要因分析」〈指導教員〉武川正吾
張継元「隔世家族に関する社会学的考察—家族戦略の視点から—」〈指導教員〉武川正吾
LIN WEI「在日中国人に対する寛容性を規定する要因—家族戦略の視点から—」〈指導教員〉赤川学
天谷力蔵「『若年層向けの就労促進型福祉支援についての検討』」〈指導教員〉武川正吾
小林孝子「2000年少年法改正過程の分析」〈指導教員〉赤川学
土屋絢子「演劇と社会の関係性をめぐる議論への社会学的視点の導入—演劇改良論争を中心的対象として—」〈指導教員〉赤川学
柳田ゆう花「育児をめぐる祖母の「選好」と「受容」—支援者支援の新たな枠組へ向けて—」〈指導教員〉武川正吾
関少波「ナショナリズムと「障害」—近代中国における纏足の「障害化」の過程分析を中心として—」〈指導教員〉武川正吾

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

なし

(乙)

池周一郎「夫婦出生力の低下に関する社会人口学的研究—有配偶完結出生力低下の反応拡散モデル—」
〈主査〉盛山和夫 〈副査〉白波瀬佐和子・赤川学・稲葉寿・鈴木透

2011年度

(甲)

金正勲(KIM JEONG HOON)「民主化以後の労働問題の展開に関する日韓比較研究」
〈主査〉武川正吾 〈副査〉佐藤健二・赤川学・本田洋・森建資
佐藤雅浩「精神疾患言説の歴史社会学」
〈主査〉赤川学 〈副査〉松本三和夫・佐藤健二・上野千鶴子・鈴木晃仁
土屋敦「敗戦後日本の浮浪児、孤児、捨児をめぐる施設保護問題」
〈主査〉盛山和夫 〈副査〉松本三和夫・佐藤健二・赤川学・島藺進
小山裕「ニコラス・ルーマンにおける社会学的啓蒙と市民的自由主義」
〈主査〉盛山和夫 〈副査〉松本三和夫・赤川学・出口剛司・市野川容孝

(乙)

なし

26 社会心理学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

社会心理学は、人の社会的行動や認知の心理的な規定因を実証的に研究する経験科学である。そのため、社会的状況における個人の行動や認知、集団行動、組織における人間行動、文化的に規定された行動や認知の研究など幅広い研究を含んでいる。

現在は、社会文化研究専攻の社会心理学コースとして、教授3名、准教授1名、助教1名で運営されている。それぞれの教員が独自の領域で研究を進めながら、協力しあって教育を行っている。社会心理学研究室は、創設四半世紀を越えたばかりで、人文社会系研究科の中では新しい研究室であるが、研究及び教育活動は活発に行われている。

社会心理学研究室の特色としては、各教員と大学院生の共同研究が活発に行われていることや、学際的、国際的な研究が盛んに行われていることがあげられる。他領域の研究者とのコラボレーションに基づくシンポジウムやワークショップを多様な学会で主催したり、国際的な共同研究を積極的に行っている。また、2010年度と2011年度には韓国およびフィリピンの研究者を招聘して、社会心理学コロキウムを開催した。

なお、研究室所属の教員及び院生の最近の研究は、掲示板に貼り出されているので、誰でもその概要を知ることができる。より詳しい情報は、社会心理学研究室ホームページ <http://www.socpsy.Lu-tokyo.ac.jp/japanese/> に公開されている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

本研究室では、国内外の学会活動も盛んに行っている。多くの教員が、国内外の学術雑誌の編集委員として、あるいは投稿論文の審査者として、社会心理学関係の主要な雑誌の編集に参加している。さらに、日本社会心理学会、日本グループ・ダイナミクス学会、アジア社会心理学会、日本世論調査協会、日本選挙学会、社会言語科学会、国連高齢者会議などの役職者として、学会運営にも大きな貢献をしている。

(3) 学会運営、研究誌の発行など、研究室としての活動

研究室所属の大学院生も積極的に研究を行っている。その成果は、毎月行っている研究室全体のリサーチミーティングで議論され、さらに、学会発表された後、専門学術誌や学術書に掲載されている。大学院生もその多くが国際的に活動しており、学生の多くは、毎年国際学会で英語の口頭発表を行っている。過去2年間に、英語論文が、専門誌に掲載されたり学術書として公刊されている。

(4) 国際交流の状況

ミシガン大学との国際交流協定締結のホスト役を果たしていることに加え、各教員が国際共同研究・国際共同調査に参加しており、かつ学会レベルでの国際交流も盛んである。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

山口 勸 教授

在職期間 1987年10月～現在

専門分野 社会心理学

池田謙一 教授

在職期間 1992年4月～現在

専門分野 社会心理学

唐沢かおり 教授

在職期間 2006年10月～現在

専門分野 社会心理学

村本由紀子 准教授

在職期間 2011年10月～現在

専門分野 社会心理学

ジル・スティーヴル 専任講師

在職期間 2007年4月～2011年3月

専門分野 政治学

(2) 助教の活動

月元 敬

在職期間 2007年4月～2012年3月

専門分野 認知科学

主要業績

(著書) 共著、山口 勸 (監修) 森尾博昭 (編著)、『対人関係の心理学—社会心理学でのぞく心の仕組み』、2011

(論文) 山田陽平・月元 敬・平野哲司、「検索誘導性忘却における競合依存—検索手がかり量の影響」、『心理学研究』、80、533-538頁、2010

唐沢かおり・月元 敬、「情報処理スタイルが不思議現象の信じやすさに及ぼす影響」、『人間環境学研究』、8、1-5頁、2010

月元 敬・橋本剛明・唐沢かおり、「間接的連想関係による虚記憶—職業ジェンダーを用いた検討—」、『心理学研究』、82、49-55頁、2011

(学会発表) 国内、月元 敬・山田陽平、「再学習と再認の処理の違いについて—シミュレーションモデルEMILEによる検討—」、日本認知心理学会第8回大会、西南学院大学、2010.5

国内、山田陽平・月元 敬、「再認経験による検索誘導性忘却—Remember・Know手続きを用いて—」、日本認知心理学会第8回大会、西南学院大学、2010.5

国内、月元 敬・橋本剛明・唐沢かおり、「間接的連想関係による虚記憶—職業ジェンダーステレオタイプを用いた検討—」、日本心理学会第74回大会、大阪大学、2010.9

国内、山田陽平・月元 敬・川口 潤、「ディストラクタに対する再認判断は学習項目の想起に影響するか」、日本心理学会第74回大会、大阪大学、2010.9

国際、Yamada, Y., Tsukimoto, T., & Kawaguchi, J., 「Retrieval-induced forgetting by recognition practice.」、the 5th International Conference on Memory, York, England, 2011.8

国内、月元 敬・大高瑞郁、「有名判断における回想性と熟知性(1)」、日本心理学会第75回大会、日本大学、2011.9

国内、大高瑞郁・月元 敬、「有名判断における回想性と熟知性(2)」、日本心理学会第75回大会、日本大学、2011.9

国内、月元 敬、「抑制プロセスを論理整合的に具備する想起モデルについて—理論認知心理学の立場から—」、日本理論心理学会第75回大会、岡山大学、2011.10

(他機関での講義等) 非常勤講師、埼玉大学、「心理学」、2010.4～2012.3

(3) 外国人教員の活動

ジル・スティール (専任講師)

在職期間 2007年4月～2011年3月

専門分野 政治学

主要業績

(著書) 共著、Ikuo Kabashima & Gill Steel, 『Changing Politics in Japan』、Ithaca: Cornell University Press, 2010

(論文) Gill Steel, 「Asiabarometer Country Profile: Images of Government, Business and Citizen Identity in the United States」、『Japanese Journal of Political Science』、11(01)、2010

担当授業 リサーチデザインとアカデミックプレゼンテーション、アカデミックライティング (院)、応用社会心理学演習、社会心理学調査実習、社会心理学演習 (院)

(4) 外国人研究員・内地研究員

- ・Rosario Laratta (Ph.D., The University of Warwick) 2006年10月～2010年11月
- ・Choi Insook (Ph.D., Institut d'Etudes Politiques de Paris) 2009年10月～2011年9月
- ・Michael W. Myers (Ph.D., University of Oregon) 2009年11月～2011年9月
- ・Chong-Min Park (Ph.D., University of California, Berkeley) 2010年7月
- ・Joonha Park (Ph.D., University of Melbourne) 2011年9月～2013年8月

3. 卒業論文等題目

(1) 卒業論文題目一覧

2010年度

- 「「ボランティア行動への参加意向」の促進・抑制要因についての検討」
- 「店舗環境と購買行動」
- 「親密度と被害の大きさが交通事故加害者への態度に及ぼす影響」
- 「うそをつくことに対する罪悪感の状況による変化」
- 「裁判員裁判における第三者効果の影響及び促進要因・回避方法の検討」
- 「携帯電話における消費者の購買行動分析」
- 「自尊心の顕在尺度が持つ問題点の、sociometer理論の観点からの検討—Brief IATとの比較を通して—」
- 「環境保護的バイコットに関する検討」
- 「状況と共感性が迷惑行動に及ぼす影響の検討」
- 「対人判断における方言の使用の影響」
- 「日本文化における「自己卑下」—適切な謙遜表現とは?—」
- 「一般的信頼が環境広告の認知に与える影響」
- 「対人影響と影響手段の選択について」
- 「心理的コスト感がTwitter継続動機に与える影響」

2011年度

- 「日本人のユニークネス欲求と西欧人の Need for Uniqueness の違い」
- 「自己の環境配慮行動の認知とコミットメント行動が環境配慮態度に及ぼす影響」
- 「ステレオタイプが印象形成や対人行動に与える影響について」
- 「東日本大震災の被災者認知—認知基盤と共感の交錯から—」
- 「類似性の認知および視点取得が援助意図に与える効果の検討」
- 「集団合議における創造性課題の解決」
- 「リーダープロトタイプ性が集団成員に与える影響と、その過程における社会的勢力の関与について」
- 「親密度と項目の重要性が心理的距離と客観的対人印象への自己卑下の効果に及ぼす影響」
- 「同性・異性関係の親密度と自己卑下呈示・自己高揚呈示の生じやすさについて」
- 「途上国支援に関する態度と行動の規定因について」
- 「科学技術政策決定における市民参加が政策の公正感に与える影響の検討」
- 「LMX理論に基づくNPOにおけるリーダーシップ」
- 「心理テストのフィードバックが行動と自己の特性判断に与える影響」
- 「道徳判断が意図性判断に与える影響の検討」
- 「メディアに対する認知的効果の行動レベルの検討」
- 「東日本大震災の被災者に対する援助行動の生起要因について」
- 「裁判員裁判における非対称な認知」
- 「友人関係を伴う状況下での社会的規範の影響」
- 「社会的ジレンマの解決において社会関係資本が果たす役割—環境問題と政治について—」
- 「ネガティブフィードバックが購買行動に与える影響について」
- 「集団目的と集団規範の対立状況におけるコントロール行動と集団主義の関連について」
- 「振り込め詐欺防止の観点からみた、過度に楽観的なバイアスと認知資源量が嘘検出能力に与える影響の検討」

(2) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

- 杉山祐一郎「死の顕現性が潜在的自尊心および自己概念に与える影響」(指導教員) 山口勸
- 鍵山琢実「情報格差を埋めるソーシャル・ネットワーク インターネットリテラシーおよびネットワーク多様性がクチコミ利用と購買満足度に及ぼす効果」(指導教員) 池田謙一
- 鈴木扶美子「大学生の他者からの意見に基づく意思決定の日米比較」(指導教員) 山口勸
- 中山奈緒子「日常的な感情制御が意思決定困難感に及ぼす影響—所属集団の諸要因との関連」(指導教員) 池田謙一
- 渡辺匠「Ingroup attachment as a self-defense mechanism (内集団との関係性をを用いた自己防衛反応について)」(指導教員) 唐沢かおり

王舸「謙遜理由の日中比較研究—内容分析を中心に」〈指導教員〉山口勸
徐思「文脈が「面子」経験に与える影響の日中比較研究」〈指導教員〉山口勸
范知善「消費行動におけるインフルエンシャルに関する研究～What Makes Influentials Influential?～」〈指導教員〉池田謙一
海老原由佳「母親の「不審者不安」が子どもの社会的発達に及ぼす影響」〈指導教員〉唐沢かおり

2011年度

木村綱希「制度による環境行動の促進と弊害」〈指導教員〉池田謙一
高浦佑介「社会関係資本が環境配慮行動に及ぼす効果の検討」〈指導教員〉池田謙一
尹月「マス・メディアは政治・行政に対する信頼感にどんな影響を与えるか?—日本における政・官関係の媒体表現を例として」〈指導教員〉池田謙一

(3) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

尾崎由佳「自己制御過程において自己観のポジティブさ／ネガティブさがもたらすフィードバック効果」
〈主査〉唐沢かおり 〈副査〉山口勸・池田謙一・村田光二・北村英哉

(乙)

なし

2011年度

(甲)

有泉優里「文末形式のジェンダーに基づいた話者の印象形成に関する実証的研究」
〈主査〉山口勸 〈副査〉池田謙一・唐沢かおり・相川充・北村英哉

(乙)

なし

27 文化資源学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

2000年度に創設された研究室である。正しくは文化資源学研究専攻といい、大学院のみで、学部に対応する専修課程を持たない。文化経営学、形態資料学、文字資料学の3コースから成り、文字資料学コースはさらに文書学、文献学の専門分野に分かれる。

この構成はつぎのように発想された。われわれの前には、「かたち」と「ことば」の膨大な蓄積がある。文書は書かれた「ことば」、文献は書物になった「ことば」であり、多くの人文社会系の学問は、もっぱらそれらの「ことば」を相手にしてきた。しかし、学問領域はあまりにも細分化され、また情報伝達技術の発達には「ことば」とそれを伝えるメディアとの関係を希薄なものに変えた。一方、「かたち」を研究対象とする既成の分野は、本研究科においては美術史学と考古学ぐらいだが、おそらくそこから無数の「かたち」が視野の外へと追いやられている。さらに「ことば」にも「かたち」にも残りにくい「おと」の文化をも見落とすべきではないと考える。

そこで「文化」と呼ばれてきたものを、「おと」「かたち」「ことば」という根源に立ち返って見直し、多様な観点から新たな情報を取り出し、社会に還元する方法を研究することが求められるようになった。それが「文化資源学」であり、とくにその後半部が「文化経営学」と呼ばれるものである。具体的には、史料館、文書館、図書館、博物館、美術館、劇場、音楽ホール、文化政策、文化行政、文化財保護制度などの過去と現在と未来を考えようとするものだ。

専任教員10人（文化経営学2人、形態資料学3人、文字資料学3人、外国人客員教授1人、助教1人）と学外連携併任教員3人からなる。文化資源学が既成の学問領域を横断するトランス・ディシプリナリーな性格を有することを反映して、美術史学、博物館学、文化政策学、音楽学、演劇学、社会学、民俗学、フランス文学、中国文学、歴史学など多彩な研究者が参加している。さらに学内の史料編纂所や総合研究博物館、学外の国立西洋美術館や国文学研究資料館と機関連携協定を結んで客員教員の派遣を受けている。今後とも、学外の研究機関・文化機関との連携をさらに充実させていく構想である。

(2) 大学院専攻・コースとしての活動

2010年度の修士課程入学者は9人（うち社会人学生が6人）、博士課程入学者が4人（うち社会人学生が3人）、2011年度の修士課程入学者は8人（うち社会人学生が4人）、博士課程入学者が2人（うち社会人学生が0人）であり、社会人に対して門戸を開いている専攻である。それは、大学を社会に対して広く開いていこうとする意思表示であり、本研究科にあつては文化資源学研究専攻がその最先端にある。

社会人学生は、民間の企業に勤めている者や、国公立の文化機関等を職場にしている。社会人が大学に戻って再教育を受けることや、学部から直接にあがってきた学生に対しては在学中から社会の現場に出るようなインターンシップなどの制度を今後とも充実させていきたいと考えている。

また特筆すべき活動として以下のものが挙げられる。

・文化資源学フォーラムの開催

「文化資源学フォーラムの企画と実践」という授業を通じて、学生の企画により、一般に広く文化資源学の課題を問いつけるフォーラムを、毎年開催してきた。2010年度は、「『書棚再考』～本の集積から生まれるもの～」と題し、2010年12月11日に法文2号館2大教室でフォーラムを開催した。また、2011年度は、「井寺カルチャー～仏教趣味のいまを視る～」をテーマに、2012年2月17日に法文2号館1大教室でフォーラムを開催した。

(3) 学会運営、研究誌の発行など

2002年に本研究室を中心として学内外の文化資源学に関心を持つ研究者、実務家の集まりとして文化資源学会を設立した。また機関誌『文化資源学』を年一回発行し、2010年3月に第8号、2011年3月に第9号を刊行した。2012年度の会員数は308人である。

(4) 国際交流の状況

2010年度修士課程に1名、2011年度修士課程に1名、同じく博士課程に2名、の外国人留学生を受け入れた。いずれも国籍は韓国である。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

木下 直之（文化経営学）

小林 真理 (文化経営学)
古井戸 秀夫 (文字資料学・文献学)
渡辺 裕 (形態資料学)
佐藤 健二 (形態資料学)
月村 辰雄 (文字資料学・文献学)
大西 克也 (文字資料学・文書学)
中村 雄祐 (文字資料学・文書学)

(2) 助教の活動

福島 勳

在職期間：2007年4月～2011年3月

研究領域：フランス文学

主要業績

【翻訳】ピエール・マシュレー「媒介から構成へ：ある思弁的道程の記述」、『別冊情況 68年のスピノザ：アントニオ・ネグリ『野生のアノマリーの世界』』、第三期第十卷第七号、2009年7月、pp.12-19.

【書評】「岩野卓司著『ジョルジュ・バタイユ』(水声社)『週刊読書人』2010年6月4日号、(株)読書人発行.

【論文】「陰画の文学—バタイユのジュネ論より」『文学』、2011年1・2月号、岩波書店、pp.143-163.

【単著】『バタイユと文学空間』水声社、2011年3月.

吉澤 保

在職期間：2011年4月～現在

研究領域：フランス近代思想史

主要業績：

「ドゥルーズの個体化——ライブニッツを中心に——」、2012年、東京大学仏語仏文学研究会、『仏語仏文学』第45号

「ルソーとジュネーブ」、『フランス文化事典』、2012年、丸善出版、324-325頁

「聾啞者教育と盲人教育」、『フランス文化事典』、2012年、丸善出版、326-327頁

(3) 外国人教員の活動

ジョン・カーペンター：2009年10月～2011年3月

研究領域：日本書道史・浮世絵史

担当講義：文化資源学特殊研究「浮世絵と摺物の研究」(2009年度)

文化資源学演習「ヨーロッパとアメリカにおけるコレクション：日本の書・絵画・摺物」(2009年度)

文化資源学演習「文化資源学の原点」(2009年度)

ウィリアム・ハワード・コールドレイク：2011年4月～現在

研究領域：日本美術と建築の歴史

主要業績：

(学会発表)国内、「文化資源としての赤門」、文化資源学会 第1回博士号取得者研究発表会及び特別講演会、東京大学法文1号館113教室、2011.12.3

担当講義：Japanese Culture at the International Exhibitions: Meiji Government Objectives and Western Reception (文化資源学演習)院のみ

日本の門—文化資源としての建築 (文化資源学特殊講義)学部共通

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2010年度

文化経営学コース

赤松はな「リヨン大都市共同体の公共空間整備政策の研究」(指導教員)小林真理

李知映「府民館」が韓国演劇界に与えた影響に関する考察」(指導教員)小林真理

形態資料学コース

星野立子「デザイン史における農村工芸の位相」(指導教員) 佐藤健二

三石恵莉「媒介者としての額縁商：長尾建吉と白馬会の画家たちを中心に」(指導教員) 渡辺裕

嶋原悠「明治後期における水彩画の流行とアマチュア美術愛好家の様相—木下藤次郎の活躍を通じて—」(指導教員) 渡辺裕

山本萌枝「更新されゆく第二世界—現代におけるファンタジーの受容構造分析—」(指導教員) 渡辺裕

2011 年度

文化経営学コース

鈴木親彦「出版流通の再評価 文化におけるストック形成に焦点を合わせて」(指導教員) 佐藤健二

南雲由子「アーティスト・ラン/アーティスト・イニシアティブ；継続可能なユートピアをもとめて」(指導教員) 小林真理

長谷川三保子「国立劇場の設立経緯に関する研究」(指導教員) 小林真理

松浦耕平「芸術団体と公立文化施設の関係について—静岡県舞台芸術センターとすみだトリフォニーホールを事例として—」(指導教員) 小林真理

安武杏季「郷土東京の保存と展示—大正期から昭和初期における史蹟名勝と郷土博物館」(指導教員) 木下直之

土屋正臣「野尻湖発掘—地域文化の担い手としての研究者・行政・市民」(指導教員) 小林真理

形態資料学コース

町村悠香「日清戦争錦絵研究—明治 20 年代における出版メディアとしての錦絵の試行錯誤」(指導教員) 渡辺裕

村上敬「商工省工芸指導所と竹工芸—1930・1950 年代の産業工芸をめぐる—」(指導教員) 佐藤健二

文書学コース

北條立記「字形と用字から見る馬王堆老子の地域的要素」(指導教員) 大西克也

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

(甲)

文化経営学コース

湯浅万紀子「科学館における教育プログラムの評価に関する研究」

(主査) 木下直之 (副査) 佐藤健二・小林真理・小佐野重利・太田泰人

形態資料学コース

矢内賢二「明治期歌舞伎と出版メディアの研究」

(主査) 古井戸秀夫 (副査) 木下直之・佐藤健二・長島弘明・神山彰

小山弓弦葉「辻が花」の研究—「ことば」と技法をめぐる形態資料学的研究—

(主査) 佐藤健二 (副査) 木下直之・渡辺裕・古井戸秀夫・鈴木廣之

(乙)

なし

2011 年度

(甲) (乙)

なし

28 韓国朝鮮文化

1. 研究室活動の概要

本研究室は2002年4月1日、人文社会系研究科附属文化交流研究施設朝鮮文化部門を母体に開設された。大学院のみの独立専攻で、学部専修課程は設けられていない。大学院レベルにおいては、日本では初めて開設された韓国朝鮮文化に関する総合的な教育・研究組織である。

(1) 研究分野の概要

韓国朝鮮を研究対象とする歴史学1名、考古学1名、文化人類学1名、言語学1名、哲学1名の、合計5名の教員で構成される。また、外国人客員教授1名が在籍している（ただし2011年度は在籍せず）。多様な方法論によって韓国朝鮮文化の解明に取り組み、総合的な韓国朝鮮文化研究を目指している。各教員は、文献資料の分析と現地での実地調査や資料収集の双方を重視しながら研究・教育を行っている。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

2002年度に修士課程（定員12名）が開設され、2004年度から博士課程（定員6名）が増設された。2007年度までは、専攻内は韓国朝鮮歴史社会コース、韓国朝鮮言語思想コース、北東アジア文化交流コースの3コースに分かれていたが、2008年度より韓国朝鮮歴史文化コース、韓国朝鮮言語社会コースの2コースに改組した。ただし、2007年度以前に入・進学した学生は旧3コースのいずれかに所属している。

専攻全体が有機的な関連をもって運営されており、総合的な韓国朝鮮文化の教育が行われている。学生には研究言語としての韓国朝鮮語に関する十分な運用能力が求められ、実力が不十分な学生に対しては支援プログラムを準備している。

各教員は学部教育にも関与し、専攻研究分野と関係の深い、東洋史学、西洋史学、考古学、社会学、言語学、中国思想文化学など、各専修課程の講義・演習を担当している。

(3) 研究室としての活動

1. コリア・コロキウム

2003年度より国内外の韓国朝鮮に関する専門家による講演会を主催している。一般市民にも開放し、公開で行なっている。2010年度は5回、2011年度は4回開催した。

2. 講演記録の発行

『東京大学コリア・コロキウム講演記録（2010年度）』（2011年3月）、『同（2011年度）』（2012年3月）を刊行した。

(4) 国際交流の状況

ソウル大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、釜山大学校（韓国）、成均館大学校（韓国）、イリノイ大学校（米国）と交流協定を締結しており、交流協定に基づき、ソウル大学校1名、および釜山大学校1名を、外国人研究生として受け入れた。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

韓国朝鮮歴史社会コース

教授	服部民夫	開発の経済社会学
教授	早乙女雅博	東アジア考古学・古代日韓交流史
准教授	六反田豊	韓国朝鮮中世近世史
准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究

韓国朝鮮言語思想コース

教授	川原秀城	東アジア思想史・中国朝鮮科学史
准教授	福井玲	韓国朝鮮語学・言語学
客員教授	権斗煥	韓国語学（2010年度）

北東アジア文化交流コース

准教授	本田洋	社会人類学・韓国朝鮮文化研究
-----	-----	----------------

韓国朝鮮歴史文化コース

教授	川原秀城	東アジア思想史・中国朝鮮科学史
----	------	-----------------

教授 早乙女雅博 東アジア考古学・古代日韓交流史
 准教授 六反田豊 韓国朝鮮中世近世史
 韓国朝鮮言語社会コース
 教授 服部民夫 開発の経済社会学
 准教授 福井玲 韓国朝鮮語学・言語学
 准教授 本田洋 社会人類学・韓国朝鮮文化研究
 客員教授 権斗煥 韓国語学 (2010 年度)

(2) 助教の活動

木村拓 (2009 年 4 月 1 日から現在) 朝鮮近世史

主要業績

(論文) 「朝鮮王朝世宗による事大・交隣両立の企図」、『朝鮮学報』、221、43-82 頁、2011.10

「朝鮮王朝世宗代における女真人・倭人への授職の対外政策化」、『韓国朝鮮文化研究』、11、3-25 頁、2012.3

(3) 外国人教員の活動

権斗煥

在任期間：2010 年 4 月～2011 年 2 月

研究領域：韓国古典文学

担当講義：韓国朝鮮語運用法 2、韓国古典文学研究、韓国朝鮮文化交流演習

(4) 外国人研究員・内地研究員

学術振興会特別研究員

橋本繁

研究期間 2008 年 4 月 1 日～2011 年 3 月 31 日

研究題目 韓国出土木簡よりみた新羅の地方社会に関する研究

川西裕也

研究期間 2011 年 4 月～2014 年 3 月

研究題目 高麗・朝鮮時代の国家と文書

外国人研究員

金旼奎

研究期間 2011 年 3 月～2012 年 2 月

研究題目 近代東アジア国際秩序の変容と朝鮮

李潤相

研究期間 2012 年 1 月～2012 年 6 月

研究題目 19 世紀末日本人政治家の韓国認識

3. 卒業論文等題目

(1) 修士論文執筆者・題目一覧

2010 年度

韓国朝鮮言語社会コース

遠藤正承「現代韓国語における外来語使用について—韓国語の漢字語・固有語志向と日本語の外来語志向—」(指導教員) 福井玲

曹佑林「植民地期朝鮮における女性雑誌の恋愛言説分析」(指導教員) 本田洋

方乙晴「日本に暮らす中国朝鮮族の生活と意識—中国朝鮮族のアイデンティティ再考察—」(指導教員) 本田洋

李仙喜「『捷解新語』原刊本 5 種の書誌考」(指導教員) 福井玲

2011 年度

韓国朝鮮言語社会コース

鈴木ひとみ「ソウルにおける高齢者福祉サービス—被介護者及び家族介護者のニーズのズレをめぐって—」(指導教員) 本田洋

原田静香「韓国人青年の「エギョ」行為研究—「パフォーマンス」と「遊戯」の視点から—」(指導教員) 本田洋

韓国朝鮮歴史文化コース

許曉静「衡平運動の展開とその社会的影響」〈指導教員〉六反田豊

(2) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲) (乙)

なし

2011年度

(甲)

なし

(乙)

韓国朝鮮歴史文化コース

森平雅彦「高麗・元関係の基本構造—モンゴル帝国の覇権と高麗王家—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・村井章介・佐川英治・吉田光男

吉田光男「近世ソウル都市社会研究—漢城の街と住民—」

〈主査〉六反田豊 〈副査〉早乙女雅博・吉田伸之・糟谷憲一・須川英徳

29 言語動態学

1. 研究室活動の概要

(1) 研究分野の概要

本専門分野では、各教員の研究成果と専門知識、現地調査で培った国際経験を最大限に活用した多面的な授業と研究指導が行われる。本研究室所属の教員の専門とする地域はオーストラリア（角田太作）、中南米（中村雄祐）であるが、各教員とも、現在の研究テーマ—オーストラリア原住民語、言語類型論（角田）、文字や図など認知的人工物の研究、途上国の社会開発（中村）—をふまえて、多言語社会における言語的少数者のあり方の問題への関心、収集・蓄積した言語資料をコミュニティと共有して活用するしくみの確立の重要性の認識、フィールド・サイエンス型の研究方法の重視など、基本的な考え方を共有している。

なお、2009年度に言語動態学専門分野は言語学専門分野と統合され、あらたに言語学専門分野となった。また、角田は、2009年10月に大学共同利用機関法人・人間文化研究機構・国立国語研究所へ転出した。

(2) 大学院の専攻・コースとしての活動

准教授1名。

2010年度は博士課程4名、2011年度は1名が在籍している。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

准教授：中村雄祐 途上国の社会開発、認知科学

3. 卒業論文等題目

(1) 博士論文執筆者・題目一覧

2010年度

(甲)

小野綾子「熊本県球磨方言の動詞と助詞の研究」

〈主査〉角田太作 〈副査〉中村雄祐・上野善道・西村善樹・木村英樹

(乙)

なし

2011年度

(甲)

大塚行誠「ティディム・チン語（ミャンマー連邦）の文法記述」

〈主査〉中村雄祐 〈副査〉西村義樹・角田太作・加藤昌彦・桐生和幸

辻笑子「オロエ語（ニューカレドニア）の文法記述」

〈主査〉中村雄祐 〈副査〉林徹・角田太作・大角翠・下地理則

鴨志田聡子「現代イスラエルにおけるイディッシュ語個人出版と言語学習活動」

〈主査〉中村雄祐 〈副査〉林徹・小林正人・市川裕・角田太作

(乙)

なし

30 次世代人文学開発センター

1. 研究室活動の概要

1966（昭和 41）年度に文学部各専修課程研究室や講座を超えて新しい研究を展開するために文学部附施設として創設された文化交流研究施設が前身であり、改組されて 2005（平成 17）年度より現在の名称となった。センターは人文社会系研究科・文学部に所属し、研究を主体とした活動を行なう。したがって、センターにはほかの研究室のように学部学生・大学院生定員はない。次の 3 部門から構成されている。

a. 先端構想部門（＜文化交流＞、＜東アジア海域交流＞）

旧文化交流研究施設「基礎理論部門」の活動理念を発展的に受け継ぎ、複数の専門領域にわたる研究、複数の地域文化を対象にする研究、あるいは諸地域間の文化交流の研究など、特に領域横断的で国際的な研究を行ない、かつ、それを公開発信していくことを目的とする。平成 17 年度よりセンター主任として小佐野重利教授のほか、小島毅准教授が兼任教員、松山聡助教が専任教員（平成 22 年度まで）、平成 21 年度から佐藤真一教授が特任教授である。また本部門には、小島准教授をリーダーとする文部科学省科学研究費補助金特定領域研究（平成 17 年度から平成 21 年度まで）「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成——寧波を焦点とする学際的創生」の拠点が置かれていた。教育面では、学部の「文化交流特殊講義」（非常勤講師による）、「東アジア海域交流」および「文化交流演習」を開講するほか、外国人研究者による講演会やシンポジウムを開催して古代ローマ考古遺跡に関する発掘成果や、造形資料の電子化媒体による公開のための研究プロジェクトなどを発信している。センター紀要として、『文化交流研究』第 23 号（2010）と『文化交流研究』第 24 号（2011）を刊行した。また、平成 18 年度より研究科所属教員の教育内容・方法についての研究・研修（ファカルティ・ディベロップメント）を兼ねて開始した文化交流茶話会を平成 22 年度、23 年度も継続し、第 19 回から第 26 回まで実施した。

b. 創成部門（＜死生学＞）

平成 17 年度に島藺進教授（宗教学宗教学）を兼任教授として設置された。その前段階は平成 14 年度に 21 世紀 COE 研究拠点プログラムの一つとして採用され、5 年間 23 人の教員が事業推進担当者となって進めてきた「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」のプログラムである。平成 19 年度に本部門に寄付講座として設置された上野死生学講座と、また平成 19 年度から 5 年間 15 人の教員が事業推進担当者となって進めてきた 21 世紀 COE 研究拠点プログラム「死生学の展開と組織化」と連携して、死生学の将来的な発展に向けて体制を整えていくのが創成部門（＜死生学＞）の役割である。教育面では、現在のところ大学院を終えて博士号を取得した PD（ポストドク研究員）を中心に博士課程の大学院生が加わり、学際的な研究推進の訓練を受けるとともに、教員とともに新たな学問分野の構築に携わってきている。死生学講座は学科や専門課程とは異なり、当面は本部門に所属する学生、大学院生はもたない。

c. 萌芽部門（＜演劇学＞、＜イスラーム地域研究＞、＜データベース拠点＞）

2006 年 4 月に古井戸秀夫教授を専任教員として開設された、新しい研究部門である。目的は、演劇学・舞踊学の確立である。哲学（美学）・文学（国文学）・歴史学（日本史）を中心に展開されてきた研究の成果を基盤として、演劇学・舞踊学という新しい研究分野をどのようにして構想するか、ということが課題になる。教育面では、大学院人文社会系研究科文化資源学専攻において、講座を持つ。日本の演劇・舞踊は、形態資料・文字資料として、いかなる文化的価値を持つのか、その特色はどこにあるのか、ということを実証する。文学部では、啓蒙的な特殊講義「日本演劇の歴史」を開設した。

加えて本部門には、＜イスラーム地域研究＞（別々イスラーム地域研究センターとも呼ぶ）ならびに＜データベース拠点・大蔵経＞もある。

＜イスラーム地域研究＞は、大学共同利法人間文化研究機構と東京大学との研究協力協定により、2006 年 6 月にイスラーム地域研究を総合的に推進するための共同研究拠点として創設された。小松久男教授と大稔哲也准教授を兼任教員とする。早稲田大学、上智大学、財団法人東洋文庫などに設置された研究拠点とともにイスラーム地域研究ネットワークを形成しつつ、2006-2010 年度に「思想と政治の動態：比較と連関」をテーマとする研究を展開した。さらに、2011-2015 年度には「イスラームの思想と政治：比較と連関」をテーマとする共同研究に取り組む。内外の研究者（センター流動教員として他部局・他大学教授 4 名、センター客員教員として外国人研究者 1 名）を受け入れ、共同研究を行うとともに、日本学術振興会特別研究員などの若手研究者を本センター研究員として受け入れる。活動の詳細については、次の URL を参照されたい。

<http://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokyo-ias/>

＜データベース拠点・大蔵経＞は、科学研究費補助金と民間の支援を合わせ6億円の資金と226人の協力者、13年の歳月を費やして完成した大蔵経テキストデータベースを基礎とし、次世代人文学の重要なテーマである人文情報学・文献資料分野の研究モデルを構築すべく、2007（平成19）年4月に設立された。現在は、英語電子仏教辞典（世界70人を超える研究者が寄稿する世界的な仏教語彙集）、インド学仏教学論文データベース（日本印度学仏教学会が運営する過去100年の論文データベース）、ロンドン・パリ聖典協会公認テキストデータベース（バンコク・タンマガーイ財団運営）、ハンブルク大学インドチベット学レキシコンプロジェクト、英訳大蔵経プロジェクト（財団法人仏教伝道協会運営）等の大型仏教研究プロジェクトと本格的な共同研究を進めるとともに、日本の知識基盤を形成する国家事業である国立情報学研究所論文情報ナビゲータ（CiNii）とも連携をし、世界の仏教知識基盤の拠点として、かつ文字資料にもとづく人文情報学の先進的拠点として本格的な活動を進めている。特任のチャールズ・ミュラー教授、兼担の下田正弘教授と研究員によって推進されている。

また、2010年度より大学共同利用法人人間文化研究機構と東京大学との研究協力協定に基づく＜現代インド地域研究＞に水島司教授が兼担教員としている。このほか、2010-12年度日本学術振興会事業である次世代人文社会学育成プログラムを実施する目的上、時限付きで兼担教員3名が配置されている。

2. 構成員・専門分野

(1) 教員（専任、兼担および特任教員）

○ 先端構想部門

小佐野重利教授、松山聡助教（文化交流）

小島毅准教授（東アジア海域交流）

佐藤慎一特任教授

○ 創成部門

島藺進教授、一ノ瀬正樹教授（死生学）

清水哲郎教授、山崎浩司講師（上廣死生学寄付講座）

○ 萌芽部門

古井戸秀夫教授（演劇学）

下田正弘教授

松村一登教授

Albert Charles Muller 特任教授

小松久男教授、大稔哲也准教授（イスラーム地域研究）

水島司教授（現代インド地域研究）

塚本昌則教授、中村雄祐准教授、本田洋准教授（次世代人文社会学育成プログラム）

(2) 助教・特任助教の活動

松山 聡（1995年4月1日～2011年3月）

研究領域 先史考古学

主要業績

（発掘調査）

2008-2009年 イタリア共和国カンパーニア州ソルマ・ヴェスヴィアーナ所在のローマ時代別荘遺跡の発掘調査参加

（論文・報告等）

Masanori Aoyagi, Claudia Angelelli, Satoshi Matsuyama: “Nuovi scavi nella “Villa di Augusto” a Somma Vesuviana (NA): campagne 2002-2004”, Estratto dai RENDICONTI della Pontificia Accademia Romana di Archeologia, volume LXXVIII 2005-06, 2007, pp.75 - 109

Claudia ANGELELLI, Satoshi MATSUYAMA, Katsuhiko IWAKI “Somma Vesuviana, ‘Villa di Augusto’. Nuovi dati dalla campagna di scavo 2007”, 国際シンポジウム・火山噴火罹災地の文化・自然環境復元, 2008年2月, 発表要旨, p. 4

Claudia ANGELELLI, Satoshi MATSUYAMA, Katsuhiko IWAKI “Somma Vesuviana, ‘Villa di Augusto’. Nuovi dati dalla campagna di scavo 2008”, 国際シンポジウム・火山噴火罹災地の文化・自然環境復元, 2009年2月, 発表要旨, p. 4

松山 聡、青柳正規、松田 陽、「イタリア南部ヴェスヴィオ山北麓に位置するローマ時代遺跡発掘調査について」、『文化交流研究』第22号(2009), pp.65-79

Claudia ANGELELLI, Satoshi MATSUYAMA, Katsuhiko IWAKI “Somma Vesuviana, 'Villa di Augusto'. Nuovi dati dalla campagna di scavo 2009”, 国際シンポジウム・火山噴火罹災地の文化・自然環境復元, 2010年2月, 発表要旨, p. 4

松山 聡、青柳正規「イタリア南部ヴェスヴィオ山北麓に位置するローマ時代遺跡の発掘調査について(2009)」, 『文化交流研究』第23号(2010), pp.67-76

柴野 京子(2011年4月1日～2012年3月)

研究領域 書籍・出版流通

主要業績

(著書)

共著、日本出版学会編、『白書出版産業』、文化通信社、2010.9

共著、長尾真・遠藤薫・吉見俊哉編、『書物と映像の未来——グローバル化する世界の知の課題とは』、岩波書店、2010.11

共著、池澤夏樹編、『本は、これから』、岩波書店、2010.11

編著、柴野京子編、『近代出版流通メディア資料集—書籍雑誌業団体史編』、金沢文圃閣、2011

共著、和田敦彦編、『国定教科書はいかに売られたか—近代出版流通の形成』、ひつじ書房、2011.5

(書評)

『本を生みだす力』、佐藤郁哉ほか、新曜社、『大学出版』、vol.88、2011.11

(学会発表)

国際、「戦時期日本の出版流通統制—日配の設立と意義」、東アジア文学・文化研究会 冬季国際ワークショップ 行為体・媒介・移動、日本大学文理学部、2011.2.27

国際、「Aspects of Controlled Book Distribution in Asia: On the Creation of Manpai (Manchuria Book Distribution Company)」, Association for Asian Studies Annual Conference, Honolulu, Hawaii、2011.4.2

国内、「東京大学新図書館構想とデジタル環境における教育研究の取り組み」、大学出版部協会電子部会・関西支部共催研修会、大阪大学中之島センター、2011.10.27

国内、「電子書籍時代の図書館のあり方 東京大学の試み—製作・流通アクターの視点から」、図書館情報学会シンポジウム、日本大学文理学部、2011.11.13

(マスコミ)

「ドイツ出版事情」、『新文化』、2011.10.6

「日常は本棚に宿る」、『図書』、2011.11.1

(受賞)

国内、第31回日本出版学会奨励賞、『書棚と平台—出版流通というメディア』弘文堂、2009年、日本出版学会、2010.4.24

国内、第4回日本マス・コミュニケーション学会優秀論文賞、「書棚と平台—近代日本における購書空間の形成」、日本マス・コミュニケーション学会、2010.7

(他機関での講義等)

非常勤講師、相模女子大学、「出版流通論」、2011.4～2011.8

非常勤講師、上智大学、「出版論Ⅰ」、2011.4～2011.7

非常勤講師、成城大学、「マスコミ特殊講義Ⅲ」、2011.10～2012.1

(3) 外国人研究員・内地研究員

2010～2011年度 研究員 古橋紀宏(先端構想部門・東アジア海域交流)

佐藤知乃(創成部門・死生学)

濱本真実(萌芽部門・イスラーム地域研究)

2010～2011年度 研究員 永崎研宣(萌芽部門・データベース拠点)

3 1 死生学・応用倫理センター

1. 研究室活動の概要

「死生学・応用倫理センター」は、グローバル COE「死生学の展開」ならびに「応用倫理教育プログラム」の後継組織として平成23年4月に設けられた。それに伴い「上廣死生学講座」は死生学・応用倫理センターの下部組織として位置づけられることになった。

センターの運営は運営委員会（一ノ瀬教授、榊原教授、熊野教授、下田教授、島菌教授、池澤教授、佐藤教授）により行われる。所属教員として、それ以外に秋山教授、大稔准教授、山崎講師が加わる。なおそれ以外にも教員卒の要望を行っていく。

平成23年度まではグローバル COE ならびに「応用倫理教育プログラム」が活動中であるので、センターとしての活動は特にない。平成24年度以降、センターは以下の活動を行っていく予定である。

①医療・ケア従事者のための死生学セミナー、臨床倫理セミナーを初めとするリカレント教育：これらは今までグローバル COE の活動として行われてきたが、今後もそれを更に継承、拡充していく。それはアカデミズムを市民に開いていく死生学の社会還元モデルケースとなるであろう。

②部局横断型教育プログラム「死生学・応用倫理教育プログラム」の開設：文学部は既に「応用倫理教育プログラム」として応用倫理教育を展開してきたが、それを学部・大学院双方において全学的に開かれた部局横断型教育プログラムに拡充し、展開していく。

③国際シンポジウム・研究集会：21世紀 COE、グローバル COE を通して、極めて多くの国際シンポジウム、研究集会が開かれたが、それを通して死生学に関する国際的なネットワークができつつあり、それを維持、発展させていくためにも、年に数回の国際シンポジウムと研究集会を行っていく。

④次世代を担う若手研究者の育成：COE プログラムの場合と同様、特任研究員を雇用し、センターの運営を担当してもらうとともに、将来の死生学・応用倫理を担う若手研究者を育成する。そのためにグローバル COE の機関誌『死生学研究』を『死生学・応用倫理研究』と改称した上で、継続して発行し、成果を発表する場と位置づける。

2. 構成員・専門分野

(1) 所属教員

秋山 聡、池澤 優（センター長）、大稔 哲也、榊原 哲也、清水 哲郎、山崎 浩司

3 2 北海文化研究常呂実習施設

1. 実習施設活動の概要

当施設は、人文社会系研究科では本郷キャンパスの外にある唯一の施設である。施設が所在する北海道北見市常呂町は、オホーツク海の沿岸、北海道東部で最大の河川の一つである常呂川の河口に位置している。この川と海によってもたらされる豊かな資源に支えられて、この地には旧石器時代から近世アイヌ期に至る約2万年もの間、多数の先史文化の遺跡が連続と遺されてきた。特に国の指定史跡である史跡常呂遺跡は、カシワヤナラの林の中に2,500を超える堅穴住居跡が埋まりきらずに窪みとして残っているという、大規模かつ特異な遺跡である。

この地域における文学部の調査研究活動は1955年に開始された。端緒はアイヌ語方言の研究を目的とした言語学の調査であったが、1957年からはこの地域の先史文化の解明を目的とした考古学的な調査が開始され、以後半世紀の間、発掘・測量などの考古学調査が毎年行われてきた。また考古学・言語学以外にも、開拓民の宗教への関わりかたを究明しようとする宗教学の調査なども行われている。その後、1967年からは助手1名が文学部考古学研究室から派遣され、1973年には施設として正式に発足した。現在、施設の建物としては、研究室、資料陳列館、学生宿舎、資料保存センターが存在し、准教授・助教各1名、有期雇用職員（管理人等）2名が現地のスタッフとして活動を行っている。活動の核となるのは考古学実習を兼ねた発掘調査であり、本郷の考古学研究室と協力しながら、毎年夏から秋にかけて施設周辺の遺跡群を対象とした発掘調査を実施している。また、2004年度からは一般講義として博物館学実習が毎年夏に当施設で開講され、考古学専修以外の学生も展示製作等の実習を受講している。

半世紀に及ぶ当地域での調査成果は12冊の報告書として刊行され、北海道の考古学研究の基礎をなす成果として高く評価され、広く利用されている。また近年は、環オホーツク海沿岸地域を中心とした北方地域との比較考古学研究を重要な研究課題とし、2010年度～2011年度にかけてもロシア連邦のアムール下流域において、現地の研究者や本学の考古学研究室の教員などと協同しながら発掘調査を実施した。それらの成果についても「東京大学常呂実習施設研究報告」と題した9冊の報告書によって刊行してきたが、これは今まで調査実績がきわめて少なかった北方地域の実態を明らかにしたものとして、高い評価を受けている。

北海道に位置する当施設は、その活動において地域との連携を重視してきた。当施設に隣接した史跡常呂遺跡は北見市によって史跡公園「ところ遺跡の森」として整備され、屋外の復元堅穴住居・ガイダンス施設・埋蔵文化財センターを備えた公園として一般公開されているが、当施設は教育委員会が管轄するこの史跡公園と一体となって教育普及活動を推進している。また、新たに史跡公園化が予定されている別の遺跡（「トコロチャシ跡遺跡群」）では、2003年度より現在まで北見市教育委員会と協同して史跡整備のための発掘調査を実施している。さらに2000年度からは東京大学文学部公開講座と銘打った出前講座を北見市で開講し、2011年度までに15回を数えている。

2. 構成員・専門分野

(1) 専任教員

熊木 俊朗 研究領域 北東アジア考古学

(2) 助教の活動

國木田 大 KUNIKITA, Dai

在職期間 2010年4月～現在

研究領域 北東アジア考古学

主要業績

(著書)

共著、國木田大、『考古学がよくわかる事典』、PHP研究所、2010.12

(論文)

Kunio Yoshida, Tatsunori Hara, Dai Kunikita, Yumiko Miyazaki, Takenori Sasaki, Minoru Yoneda, Hiroyuki Matsuzaki, 「Pre-bomb marine reservoir ages in the Western Pacific」、『Radiocarbon』、52, 3, pp. 1197-1206, 2010

國木田大・吉田邦夫、「三内丸山遺跡第32次発掘調査資料（環状配石墓・盛土状遺構）の¹⁴C年代測定」、『特別史跡三内丸山遺跡年報』、14、27-34頁、2011.3

國木田大・I.Shevkomud・吉田邦夫、「アムール下流域における新石器文化変遷の年代研究と食性分析」、『東京大学常呂実習施設研究報告』、9、201-236頁、2011.3

- 庄田慎矢・松谷暁子・國木田大・渋谷綾子、「岡山県上東遺跡出土の弥生土器に付着した炭化物の由来を探る」、『植生史研究』、20, 1, 41-52 頁、2011.5
- 一木絵理・國木田大・吉田邦夫・辻誠一郎、「群馬県板倉町寺西第二貝塚出土遺物の放射性炭素年代」、『利根川』、33, 36-41 頁、2011.5
- (学会発表)
- 国内、大貫静夫・福田正宏・I.Shevkomud・熊木俊朗・内田和典・森先一貴・國木田大・今井千穂・S.Kosityna・M.Gorshkov・E.Bochkareva・佐藤宏之、「コンドン文化の理解に向けてークニャーゼ・ヴォルコンスコエ 1 遺跡の調査から」、第 76 回日本考古学協会、東京、2010.5.22
- 国内、國木田大・吉田邦夫、「クッキー状炭化物の由来解明とその年代」、第 27 回日本文化財科学会、大阪、2010.6.26
- 国内、國木田大・吉田邦夫・I.Shevkomud・大貫静夫・佐藤宏之・熊木俊朗・福田正宏・内田和典・森先一貴・A.Konopatskii、「ロシア・アムール流域における過去一万年間の文化編年」、第 27 回日本文化財科学会、大阪、2010.6.26
- 国際、С.С. Макаров, К. Даи, 「Проблема датирования стоянки древнего человека на территории местонахождения фауны 《Луговское》」、Северный Археологический конгресс, Ekaterinburg, Russia, 2010.11
- 国際、Kunio Yoshida, Dai Kunikita, 「Radiocarbon dating of bones from Mal' ta site」、International Symposium Siberia and Japan in the Late Paleolithic Period, Adaptive Strategies of Humans in the Last Glacial Period, Tokyo, Japan, 2010.11.27
- 国内、役重みゆき・佐藤宏之・熊木俊朗・國木田大・尾田識好・林和広・夏木大吾・高屋敷飛鳥・高鹿哲広・山田哲、「北海道北見市吉井沢遺跡」、第 24 回東北日本の旧石器文化を語る会、秋田、2010.12.18
- 国内、國木田大、「三内丸山遺跡の盛土の形成過程とその場所性の解明」、平成 22 年度三内丸山遺跡報告会、青森、2011.3.5
- 国内、大貫静夫・國木田大・吉田邦夫、「極東北部新石器時代の変遷について—額拉蘇 C 遺跡採集土器の新たな測定年代から—」、第 12 回北アジア調査研究報告会、北海道、2011.3.5
- 国内、國木田大・吉田邦夫・大貫静夫、「付編 額拉蘇 C (オロス) 遺跡出土土器付着炭化物の ¹⁴C 年代測定」、第 12 回北アジア調査研究報告会、北海道、2011.3.5
- 国内、福田正宏・I.Shevkomud・熊木俊朗・國木田大・内田和典・森先一貴・M.Gorshkov・S.Kosityna・E.Bochkareva・吉田邦夫・佐藤宏之・大貫静夫、「アムール河口域の考古学的調査 (2010 年度)」、第 12 回北アジア調査研究報告会、北海道、2011.3.5
- 国際、D. Kunikita, K. Yoshida, I. Shevkomud, S. Onuki, H. Sato, T. Kumaki, M. Fukuda, K. Uchida, K. Morisaki, A. Konopatski, 「Age determination of Neolithic cultural change and dietary reconstruction in the Amur River basin」、12th International Conference on Accelerator Mass Spectrometry, Wellington, New Zealand, 2011.3.20
- 国内、國木田大、「北海道における縄文時代年代研究の現状と課題」、北海道考古学会 2011 年度研究大会 北海道の縄文文化研究の今、北海道、2011.4.23
- 国内、阿部昭典・國木田大・吉田邦夫、「縄文時代の鐸形土製品付着物の自然科学分析」、日本考古学協会 2011 年度大会、東京、2011.5.28
- 国内、山田哲・役重みゆき・佐藤宏之・國木田大・尾田識好・富樫孝志・夏木大吾・高屋敷飛鳥・中村雄紀、「北海道北見市吉井沢遺跡第 6 次発掘調査」、第 25 回東北日本の旧石器文化を語る会、青森、2011.12.17
- 国内、大貫静夫・I.シェフコムト・福田正宏・熊木俊朗・國木田大・佐藤宏之・尾田識好・大澤正吾・夏木大吾・内田和典・M.ゴルシュコフ・S.コシツィナ・E.ボチカレバ・森先一貴、「東部極東平底土器の形成過程について—2011 年度コンドン 1 遺跡の調査から—」、第 13 回北アジア調査研究報告会、東京、2012.2.11
- 国内、大澤正吾・熊木俊朗・國木田大・山田哲、「2010・2011 年度北海道北見市常呂町大島 2 遺跡発掘調査報告」、第 13 回北アジア調査研究報告会、東京、2012.2.11
- 国内、夏木大吾・佐藤宏之・國木田大・尾田識好・役重みゆき・富樫孝志・高屋敷飛鳥・山田哲・中村雄紀、「北海道北見市吉井沢遺跡の発掘調査」、第 13 回北アジア調査研究報告会、東京、2012.2.11
- 国内、國木田大、「史跡常呂遺跡を取り巻く先史時代の自然環境」、ところ遺跡の森講演会、北海道、2012.3.10

(研究報告書)

國木田大・吉田邦夫、「堂平遺跡(本文編)」、津南町教育委員会、393-401 頁、2011.3

國木田大・吉田邦夫、「飛島における考古学的調査」、東北芸術工科大学東北文化研究センター、51-53 頁、2011.3

國木田大、「高梨学術奨励基金年報(平成 22 年度研究成果概要報告)」、財団法人高梨学術奨励基金、85-92 頁、2011.11

國木田大、「東北地方における環境・生業・技術に関する歴史動態的総合研究 I」、東北芸術工科大学、199-206 頁、2012.3

(予稿・会議録)

国内会議、内田和典・シェフコムード I.Ya. ・今井千穂・橋詰潤・國木田大・ゴルシュコフ M.V. ・コシツウナ S.F. ・ボチカリョバ E.I. ・山田昌久、「アムール下流域における前期新石器時代「コンドン 1 類型」について—2009 年度コンドン 1 遺跡の調査成果を中心に—」、公開シンポジウム「縄文時代早期を考える」、東北芸術工科大学、2011.12.17

『縄文時代早期を考える』、55-70 頁、

(研究テーマ)

受託研究、三内丸山遺跡特別研究、國木田 大、研究代表者、「三内丸山遺跡の盛土の形成過程とその場所性の解明」、2010~2010

寄附金、高梨学術奨励基金、國木田 大、研究代表者、「縄文時代におけるクッキー状炭化物の研究」、2010~2010

文部科学省科学研究費補助金、科学研究費補助金(基盤 A)、國木田 大、分担者(代表者は東大外)、「ユーラシア北東部における後期旧石器時代人の適応行動に関する総合的研究」、2010~

寄附金、高梨学術奨励基金、國木田 大、研究代表者、「縄文時代におけるクッキー状炭化物の研究 II」、2011~2011

文部科学省科学研究費補助金、学術研究助成基金助成金(若手 B)、國木田 大、研究代表者、「環日本海地域における文化集団の食性変遷に関する研究」、2011~

3 3 多分野交流プロジェクト研究

多分野交流プロジェクト研究は、平成7年4月に大学院が改組され、いわゆる「大学院重点化」が行なわれた際に、その改革の中核的な位置を占めるものの一つとして発足した。すでに平成5年度より部分的に試行されてはきたが、平成7年度の正式な発足により、本プロジェクトは人文社会系研究科の専任教員に加え、15名の客員教員（併任教授5名、連携教授・助教授10名）の参加を得て、本格的にスタートすることになったのである。

発足に際しては、〈人間と価値〉、〈歴史と地域〉、〈創造と発信〉、〈社会と環境〉という4つの大テーマが立てられた。そして、それぞれのグループの主査のもとに、多くの人文社会系研究科所属教員と複数の客員教員（1プロジェクト平均3〜4名）が集まって共同研究の態勢を整え、博士課程の大学院生の参加を得て、共同研究が進められてきた。なお2000年度からは、より広範な大学院生の参加を認めるべきであるという考え方から、院生は博士課程に限定せず、修士課程院生の参加も認めている。

このプロジェクトは、本研究科がその長い歴史のなかで培ってきた学問諸分野の個々の成果を基礎にしながら、各領域間での交流を行ない、人文・社会系の学問に新たな活力を与えようとするものである。いずれの講座においても、専門もさまざまに異なる、まさに多分野からの学生が参加しており、そういった意味でこのプロジェクトは、教員にとってはもちろんのこと、今後の学界の発展を担っていくべき若い大学院生たちにとっても、よき創造的な刺激の場として機能している。

平成11年度からは、発足当初の4つの基本的なテーマに限らず、柔軟に様々なテーマに対応することによって、本プロジェクトの持つ潜在的な可能性をさらに追求することになった。この年に設けられた〈情報と文化：文化資源と人文社会学〉は、新設を計画していた「文化資源学」専攻を準備するためのプロジェクトであり、院生のほかに、文化資源学ワーキング・グループ全員と、本学以外の諸文化機関の専門家が参加した。また平成14年度の「人間の尊厳、生命の倫理を問う」は、同年新設の「応用倫理教育プログラム」の一環をなす演習としても認定された。このように多分野交流プロジェクト研究は、人文社会系における新しい研究領域を開拓していくための重要な役割を担うようになっており、これは本プロジェクトにとって新たな重要な展開といえよう。また、平成23年度は、3月11日に発生した東日本大震災とそれに続く原子力発電所の事故についても、下記の「生命をめぐる科学と倫理」において主題的に論じられることとなり、この多分野交流プロジェクトが、新しい研究領域の開拓と同時に、学問が実社会へと還元・発信されていく場としての機能をも果たすようになっていったことは特筆すべき事態であったと言える。

なお、多分野交流プロジェクト研究の成果を伝える手段として、年3回のペースでニューズレターが発行されている。ニューズレターにはプロジェクト案内の他、関連エッセイなども掲載されている。

2010年度・2011年度に開講されたプロジェクトは以下の通り。

2010年度

生命をめぐる科学と倫理（島菌進・一ノ瀬正樹）
言葉の力3 言葉の歓び・哀しみ（松永澄夫）
今日の世界の文学・文化（2）（柴田元幸）
東アジアの王権と宗教（2）（小島毅）

2011年度

生命をめぐる科学と倫理（島菌進・一ノ瀬正樹）
今日の世界の文学・文化（3）（柴田元幸）
東アジアの王権と宗教（3）（小島毅）
近代日本のテクストを読む：文学・歴史・社会の交流（佐藤健二）

以上の多分野交流プロジェクト研究の直接の成果として出版された論文集には、主に以下のものがある。

松永澄夫編『言葉の歓び・哀しみ』2011年

小島毅編『東アジアの王権と宗教』2012年